
とある少年の特殊な魔術

飯屋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある少年の特殊な魔術

【Nコード】

N6856R

【作者名】

飯屋

【あらすじ】

学園都市に住む、

いたって普通で平和を愛する面倒くさがりの少年は、禁断とされる『霊装』を拾う。

それに伴って起き始める事件の数々。半ば強制的な転校。風紀委員としての仕事。

『色々と面倒だ・・・』主人公は科学の世界で魔術を駆使する少年、神落励しんらくうれし・・・彼はどのような物語を描いていくのか？

科学と魔術が交差するとき、物語は始まる

!!!

超電磁砲から原作ブレイクしようかなと思っています。

原作ブレイク自体、初めてなのでアドバイス等がいただけたらと思っています。

また、基本、超電磁砲はアニメ沿いで・・・後、オリジナルストーリーあります。

・・・もう少しコメディ要素も入れていこうかな？

まだまだ先になりそうですが、第五位こと食蜂操祈じやくほうすけのりを出したいと思っています・・・ほんと、いつになるやら・・・w スキルアウト編×オリジナル、開幕。

第一話・霊装

ここは柵川中学二年生のとある教室。

黒い髪にやる気のなさそうな目をした少年がブーツとして椅子に座っていた。

時刻からして放課後らしく、周りの学生達はセカセカと帰るために荷物を鞆にしまっていた。

(・・・平和だ〜・・・いいよな〜平和って・・・)

こんなことを考えながらブーツとしている少年の名は神落^{しんらく}励^{りき}。

どこにでもいる普通の学生だ。

そこに、励より少し背の高い男子生徒が励に声をかけてきた。

「またブーツとしゃがって・・・一緒に帰ろうぜ励」

彼の名は峰崎^{みねざき}修^{しゅう}二^に、彼もまたどこにでもいる学生だった。

呆れ顔で話しかけてくる峰崎相手に励は振り返って答える。

「ああ、今行く」

手で鞆に教科書などをしまっている励を峰崎は名前と正確が逆だと
言いたそうな顔で眺めていた。

不意に、メールの着信音らしき音があたりに響いた。

励は不機嫌そうな顔になり

「ちょっと確認する・・・」

制服のポケットから携帯電話をとりだして開いた。

「・・・」

メールを見た励の目がさらにやる気なさそうな目になった。

「またか？」

「・・・ああ」

それから何かを察した峰崎は励の携帯電話の画面を覗き込んだ。

画面にはこう書かれていた。

TO：白井黒子

仕事ですわよ！！

『すぐにセブンスミストまで来てくださいですの！！』

うなだれる励を哀れむ目で見ながら峰崎は口を開く。

「・・・お前、自分のことなんて呼ばれてるか知ってるか？ 『白井の世話係』だぞ？」

「それは白井に踏まれたいとか言ってるファンクラブみたいなのか

らだろ？

嫉妬の念が凄まじく感じられるな・・・面倒だ・・・」

そう言いつつ励は鞆を持ち上げて立ち上がった。

心底だるそうな目で峰崎を見ると手をひらひらさせて

「わりいけど、先に帰るぜ？・・・面倒だ・・・」

「はいはい、行ってこいよ」

テクテクと励は教室から出て行った。

学校から出た励は道路を走りながら目的地を目指していた。

突如、カランカランツと金属が転がり落ちたような音がした。

彼は足を止めてそちらを見た。

そこには円柱状の黒い筒のようなものが落ちていた。

黒い表面の上には紫や白色の模様が入っていて、不気味だった。

「・・・万華鏡か？」

励はヒョイツと片手でそれを軽くもち上げて観察した。

思ってたよりも軽いな、と思いつつながら励はそれをじっくり見つめている。

もはやなぜそこを通っていたのかも忘れて・・・だ。

「そ、それはツツ！！！！！！！！！！」

不意に声をかけられた励は驚く様子も見せず、そちらを見た。

そこには銀髪の修道女が立っていた。

少し傾いた日差しが少女を照らし、かすかながらだが、神聖な雰囲気
を放っている。

「その『霊装』は、危険なんだよ!!!」

その、という言葉を受けて励は首を傾けながら問う。

「……れいそーってこれ？見たところただのガラクタだけど……
どこが危険なんだ？」

「その『霊装』は禁断と言われる物なんだよ!!!」

素質がある人の前にだけ姿を現すけど、それを使った人は皆
早死にしている!!!!!!

そしてその『霊装』は魔術サイドでは『核』^{コア}とか呼ばれてい
るけど、その力は未知数とされているんだよ!!!」

励は少女の言葉を聞いてますますわけがわからなくなる。

まず、この少女は何が言いたいんだ？

そして、これを使えば早死に？どういうことだ？

そもそも、魔術って何だ？

「・・・魔術って何？」

少女は背筋を伸ばすと、話し出した。

「魔術っていうのは

「

少女と出会ってから約5分が経過した。

「・・・ということなんだよー！」

（・・・信じるしかねえな・・・・・・面倒だ）

ようやく開放されたということから

はぁーとため息をつくとき、 励はこう返した。

「つーか捨てればいいんじゃないの？」

「無理だよ。その『霊装』は君からはなれない」

予想外の答えに、 励は目を見開く。

確かにその『霊装』をどこかに投げようと思っても出来なかった。

『霊装』からは先ほどまでは感じなかった威圧感が感じられた。

「は？ってことは俺は早死に確定なのか？」

「違うよ。ただ一度も使わなければいいだけ……一度使えば、早死にするよ」

「つてお前！さっき言つてたけど！能力者に魔術は使えないんじゃないかあ！……！」

励はレベル0だが、一応能力はなにか持っている状態……つまり能力者だ。

「……そうだね。でもその『霊装』のおそろしいところはそこなんだよ」

静かな口調で語る少女の言葉に励は静かに耳を傾ける。

「その『霊装』は、魔術を使う瞬間にその人の情報を一時的に塗りつぶすの……」

君で言えば能力者特有の回路を一時的に塗りつぶし、使えるようにするということだよ。

そして……」

そしてと言った少女に対し、励はゴクリとのを鳴らす。

「その力は、サタンやルシファー……堕天使とか、悪魔とか言わ

れている存在の力を秘めているんだよ・・・」

「・・・ふん・・・」

緊張感が抜けたと言う感じで返す励に少女は怒りを見せて、何かを言おうとしたが、

ピロリロリンッ！という音により、遮られた。

ゲツと言う声を出しながら励は携帯を眺める。

TO：白井黒子

・・・

『遅いですわ！！何をしているんですの！？』

励の顔が真っ青になった。

「急用が入った！！じゃあな！！！！！！」

「えッ！？ちょ、ちょっと！！」

あわてて携帯を閉じながら励は少女を置いて走り去った。

「何をしていたんですの？」

「面倒だ・・・」

励は息を切らしながら白井の前で座り込んでいた。

ジャケット
風紀委員数名がすでにそこに集まっていた。

かつて、俺にも、正義の味方とかヒーローとかある人物に憧れたときがあった。

不良に絡まれてどう逃げようか考えていたときにとある少年に助けられたからだ……。

勢いだけで奇跡的に風紀委員に入ったのはいいが、雑用ばかりで正直後悔している。

白井に目をつけられた原因は一つしか思い浮かばない。

皆、白井とかを目標にしたりしているため、白井に気軽に話す男子などいなかった。

……俺以外……
……
……面倒だ……。

白井に説明を受けた励は状況を理解した。

いたって簡単な立てこもり事件で、相手は4人。

レベル4一人とレベル3が三人。

なんで強盗すんの？そう言いたげな顔で励はため息をついた。

白井はそんな励を引っ張って立ち上がらせると周りに居た風紀委員全員にむかってこう指示した。

「さて、作戦開始ですわよ！」

第一話・靈装（後書き）

よろしくお願ひします。

第二話：作戦決行

白井黒子の作戦は、おとり作戦だった。

まず、セブンスミストの二階から白井黒子と神落励が乗り込む。

次に他の風紀委員シャッジメントが正面から入り、時間を稼ぐ。

騒ぎになっているうちに人質を助けて、取り押さえる。

ちなみに犯人と人質は同じ一階にいる。

白井の空間移動テレポートで二人は無事、セブンスミストの建物の二階に潜入した。

「まったく、こつちが泥棒の気分だ……」

「早くつごきますわよ!!」

二人は人気のない廊下を歩いて移動した。

真っ白な壁や床からして、従業員などの心遣いを感じられた。

逆に今の状況では、少しさびしい感じがするが……。

二人が廊下を移動していると下からワーツというような人の声が聞こえてきた。

励は白井のほうを見ると

「始まったのか……」

「そのようですね……」

「はぁ……何かと面倒だ……」

「こんな時に何言っているんですの？」

ため息を吐く励を見て、呆れたという顔で白井は手を頭にやる。

「こんなことなら、固法先輩を連れてくるべきでしたわ……」

「できればそうして欲しかった」

そう言いながら、励は懐にある『霊装』を意識して胸元を見た。

『一度使えば、早死には避けられない』

その事実を自分の中で確認しながら考える。

（……つまりは、だ。使うごとに命が削られるって感じじゃあなさそうだな……使う気ゼロだが……）

そんな励を白井は手で制してこう呟いた。

「ここですわよ……今見張りはレベル3と思える人物だけですね……」

壁越しに人の集まりを二人は見ている。

「……顔でレベルがわかんのか？」

「初春からデータがきてるからです」

人質が居る周りを先ほどから、レベル3らしき人物がキョロキョロしながら歩いていた。

「で？どうする？」

「もちろん」

会話の最中に白井が消えたかと思うとレベル3の人物の頭上に現れた。

（少々手荒ですけど、人質のことを考えると！！）

白井は強烈なドロップキックをレベル3らしき人物にお見舞いした。

レベル3の人物は白井に気付いたが、何も出来ずに蹴られて意識を失った。

倒れる敵に目もくれず、白井は人質を解放するべく、人質に歩み寄

ろうとした。

(ひゃー・・・容赦ねえなー・・・ん？あれって？)

励は人質の中で唯一目つきが悪い青年を見つけた。

その目は明らかな敵意を含んでいた。

その青年に気付かずに白井は人質の集団に近づいている。

「待て！！白井い！！」

励が叫んだ時には青年は立ち上がって手をかざした。

励の叫び声を聞いた白井はハッとにそのことに気付いてその場から離れる。

突如、白井のいた場所の床が衝撃を受けたように削られ、へこんだ。

(念動能力！？)

ユラリと立ち上がった青年は人質と白井が分断したことを確認し、ニヤリと笑う。

「風紀委員ですか・・・でも念には念をとばよく言ったモノですね。人質の中に共犯者を入れておいてよかったです」

「くッ!!」

白井は身構えるが下手には動けなかった。

人質をとられている以上、下手には動けない。

そして、敵のレベルが明らかに3、4といった高位能力者だからだ。

そんな白井を見て、敵の青年はフツと笑うと近くに居た人質の5、6歳の少女をつかむと、目の前に放り出し、

能力でその上の天井を破壊した。

ガラガラと音を立てながら勢いよく瓦礫の山が少女に降り注ぐ。

白井は一瞬、驚いて戸惑うが、

空間移動で少女のもとに移動し少女の手を握ると、再び能力を使用し、もと居た場所に移動した。

「すぎだらけですよ」

その瞬間、メリツと白井の腹部を念動力が襲う。

「か・・・はッ！」

白井の体は少しだけ宙を舞うと数メートル先の地面に叩きつけられた。

励は動かずにそれを見ていることしか出来ない。

どうにかしたくても何も出来ずに居る。

「どうしました？こっちは仲間が捕まっているせいでイライラしているんですよ」

青年がそう言った瞬間、白井の真上の天井がメシメシと音を立てて亀裂が大きくなっていく。

(・・・ちつくしょう！！アイツ、イカしてんじゃあねえか？このままじゃあ白井が！！)

ふと、励は懐にあるものに気付き、取り出した。

(・・・こいつなら・・・でも、早死にするんだぞ？・・・でも！！だけど！！！)

励は一度視線を霊装から逸らし、白井のほうに向ける。

白井は意識があるにも関わらず立てていないようだ。

その間も天井がメシメシと音を立てながら崩れ始めている。

グツと手の中にある『霊装』を握り締めた。

(迷う暇なんかねえ！！どんなことがあるうとも……………
・後悔するような生き方はしねえ！！)

ゴッ！！という音とともに天井が崩れた。

霊装から力の使いかたなどが自然と頭に流れ込んでくる。

励は飛び出し、青年の正面に出た。

バツと霊装を振るうと霊装は励の手の中に入り、消え失せる。

『Satana013（運命に逆らう者）！！』

突如、励の背中に巨大な翼が出現した。

その翼はまるでカラスのように真っ黒で黒い羽を持った翼だった。

それは天使の翼と真逆の色であるのに、天使と同じ神々しささえ感じられた。

翼が出現したと同時に衝撃波のような物が生まれ、白井に降りかかる瓦礫を全て蹴散らした。

「な、なんですか？これは！！！」

青年は後ずさりしながら、怯えたように話す。

それを見た励はつまらなさそうに呆れる。

「つまらねえな」

右手に竜巻を作るところを呟いた。

「風よ、嵐となりて敵を蹴散らせ（N W O T J）」

彼の手の中であつた小さな竜巻はどんどん大きくなり、励が腕を前に突き出すと竜巻が凄まじい速さで繰り出された。

「がッ！！？」

青年は何も出来ずに吹き飛ばされ、意識を失った。

(ちいッ！！ク・・・ソ・・・い・・・しき・・・が・・・
・・・)

背中から翼が消えたかと思うと筋はその場に倒れこんで意識を失った。

第二話：作戦決行（後書き）

うーん？どうでしょうか？

我がままですが、アドバイスや感想なんかをいただきたいです。

第三話：不良と能力と（前書き）

励のあの霊装は定期券！みたいな感覚です。

一度しようする死ぬまで使い放題！

ぶっちゃけそんな簡単なものじゃあないですがそう考えるとわかりやすいかと

思います。

第三話：不良と能力と

あれから、数日経った。

目を覚ました後、

俺こと神落励はあの能力についてや事件についてなど色々なことを固法先輩や白井に聞かれたので、

とりあえず、能力についてはうまいこと・・・いやかなり強引にほのめかした。

それから俺はいつもと変わらない日常を過ごしていたわけだが・・・。

「面倒だー・・・・・・・・なんか事件とかあるの？」

ジャケットメント
風紀委員第177支部のソファに寝転がりながらだるそうに励は声を上げた。

その視線の先には椅子に座っている初春飾利がいる。

補足説明しておく、現在白井黒子はパトロール中のため、不在である。

初春は椅子を動かして励のいる方向を向いた。

「うーん・・・なんか、ここらあたりで猫が迷子になったらしいですわね」

励の目がさらにだるそうになり、初春の頭の上の花を見つめると「う呟いた。

「とつとつ頭の中までお花畑になったか・・・」

「ちッ！違いますよ！！本当にそつという報告が！！！」

顔を赤らめながら初春は反論する。

さりげなく普通に言い放った彼女だが、内心はかなり恥ずかしかったのだろう。

照れ隠しのように彼女は励を手招きすると、画面を指差した。

励はゆっくりと起き上がり、初春の指差した画面を見た。

そこには確かに猫が迷子になっているという報告が書かれていた。

励は呆れたようにうなだれる。

「……いつから風紀委員ジャッジメントは便利屋になったんだ？」

「まあこれも立派な風紀委員の仕事ですよ？」

「仕事、仕事ってお前といい、白井といい、仕事熱心ですなあ？
でも俺より年下とは思えねえよ」

「それは神落さんが少々サボりすぎな面があるからじゃあないですか？
だって皆きっちり仕事してますよ？」

ウツ！とうめき声を上げて励は初春から一歩後ずさりする。

初春はそれを見て目を細めた。

自覚はあったんですね？彼女の目はそう物語っていた。

「……………よし！この猫を探しにいくぞ！レッツゴー！」

「えッ！？わ、わかりました！」

苦し紛れに励はそう言ったのだが、初春は本気にしてしまったようで身だしなみを整えていた。

自分の言ったことを確認すると励は心の中で死ぬほど後悔した。

（おいおい……………言わないほうがよかった……………面倒だ）

「……………神落さん。その大量の煮干はどうしたんですか？」

初春は励の持つているタッパーの中身を確認して言った。

二人は今、猫が迷子になったとされる公園にいた。

タッパーの蓋を開けながら励は初春にこう返す。

「猫をおびき寄せるために決まってるんだろ？」

ふざけているのか？初春の声にでない本音はこうだった。

だが、励の目はどこか自信に満ちていた。

しかし、励がこの作戦を考えた理由は彼を知る人間になら簡単に理解できた。

「……………もしかして自分が極力動きたくないからじゃあないですか？」

「ギクッ！」

「そんなことだからいつも白井さんに雑用ばかりさせられるんですよ。」

「……………はい、反省してます」

いつの間にか公園のベンチで筋は正座していた。

周りにいる人は怒られている筋を物めずらしそうな目で見つめている。

周りの視線が痛い。そう思いながら筋は初春に別の話へ切り替えるように促す。

「……………で、猫ってどんな？」

「ちょうどあんな感じの……………」

聞かれた初春は紙をとりだすと、公園の砂場をうろついていた猫を

指差して言った。

「……………っていつかアレじゃあねえのか？」

『ニヤー』

「……………」

一瞬、二人の間に沈黙が流れた。

初春はコホンッと咳をすると落ち着かない足取りで猫を追いかけていく。

「きゃッ！？す、すいませんッ！！」

ドンッと初春が誰かにあたり、こけた。

はあとため息をついて励はゆっくりと初春に近づいていく。

だが、それよりも先にぶつかられた相手が声を上げた。

「痛いなあ！お嬢ちゃん……ゴメンじゃすまねえぞこらあ！
！」

「だよなあ！兄貴！！」

金髪で耳にピアスをしているなんともレトロな絡み方の不良×2が
初春に向かって叫ぶ。

身長からしておそらく高校生だろう。

二人は初春が風紀委員だと気付いていないようだった。

駆け寄ってきた励はしかたなさそうに風紀委員に腕章を見せながら、

「風紀委員だ。面倒なことになりたくなかったらさっさと逃げろ」

すると不良の二人は爆笑しながら励を指差す。

「ぶはは！！お前みたいなやつが風紀委員！？嘘つくなよ！！」

「ですよねえ！！兄貴！ボウヤは風紀委員ごっこでもしてな〜」

「・・・」

不良の子分らしき男は突如、初春の腕を持って引っ張る。

「おらあ！！こつちにこい！！」

「きゃあ！！」

励は静かに手を掲げるとため息を吐いて呟いた。

「重力は敵を縛る鎖となる（G I P M W Y）」

「ぐおッ！？」

その瞬間、地面に初春をつかんでいた不良が叩きつけられる。

「うっ、うっけねえ！！」

「し！神落さん!？」

驚いて声を出す初春のよこに神落は立つ。

「ったく・・・初春にふれんじゃあねえよ」

頭をかきながら目を瞑る励にもう一人の不良は電撃を飛ばしてくる。

それに対し、励は片目をあける。

(魔法名を名乗って翼を出すまでもねえな)

「風よ、嵐となりて敵を蹴散らせ(NWOTJ)」

竜巻が励の前に現れたかと思うと電撃をかき消して不良を吹き飛ばした。

不良が横たわっている光景を見て、励はゲツと言いながらどう説明しようか考える。

(・・・どう報告しよう・・・)

「神落さん？」

「は、はい!？」

突然声をかけられ、ビクツとなる。

初春の声とは違った、励がもつとも恐れる人物の声だった。

「・・・・・・・・・・な、なんでせう？」

「ちよーつとこの状況を説明してほしいんです・・・・・・・・」

貴方の能力についても・・・・・・・・ですわ!」

ダッ!という音を立てて励はダッシュで逃げ出すが、いつの間にかその肩を白井につかまれていた。

「ま、まさか俺を泳がせていたのかッ!？」

「その通りですわ！」

逃げられないと悟った励はその場で倒れこんだ。

「面倒だ………」

第三話：不良と能力と（後書き）

魔法名を名乗る「本気（翼も出現）ですね。

超電磁砲から原作ブレイクしようかな？なんて考えてます。

少々、インデックスさんの学園都市に来る日を早くしちゃいました
が……。

どうでしょうか？原作ブレイク……アリかなあ？

第四話・電撃使い（前書き）

長いけど、呼んでいただけたらうれしいです。
少々台詞変えたりしてますがご勘弁を・・・。

第四話：電撃使い

朝早くから白井黒子と神落励は向かい合って風紀委員177支部のソファに座っていた。

翌日は猫の探索を再開させることで逃げ延びたわけだが・・・。

「全く・・・今日は身体検査の日だと言いますのに・・・」

白井は疲れた様子で呟くとうつぶむいている励を睨む。

「いい加減、教えてくださらないと・・・レベル0の貴方が、どうしてあんな能力を、しかも複数なんて・・・」

「・・・グーグー」

「いや、グーグーではなくて」

「グーグー・・・」

「いやそうではなくって!!寝てるんですの!?!」

白井は少し立つと、うつむいてる脇に向かってピンタを繰り出した。

バチンッ！！

「ブッ！！痛えな！！何しやがる！！！！」

「何か文句がありました？」

「い、いいえ・・・文句ないです」

黒いオーラを出す白井に対し、つい逆らえなくなる脇。

彼の中ではある力関係が出来ていた。

自分おのく初春はつはるく鬼おに

それを自分の中で確認した脇はため息をついて、チラリと時計をみた。

時計の針は登校時間に迫りつつあった。

それを見た励はテーブルの上に置かれていた鞆を持ち上げると

「遅刻ー遅刻ー（棒読み）」

それを聞いた白井の顔が青ざめる。

「わたくしとお姉さまの楽しい二人きりの登校時間があー!!」

そう言ったかと思うと、ソファから白井の姿が消え去った。

空間移動したのだろうななどと考えながら励は扉をくぐって支部から
出た。
レポート

能力測定が終わった励は一人で下校しようと思つて校門に向かっていた。

(またレベル0・・・ってあれ初春か?)

人ごみの中にひときわ目立つ少女を見つけた。

励は頭に花を乗せている少女、初春飾りに駆け寄りながら声をかける。

「おーいうーうーいはーるん!」

バサッ!!

独特なアクセントをつけた叫び声とともに、突如初春のスカートがめくりあげられた。

初春は何が起きたか理解していないようで啞然としている。

(話しかけ辛ッ!)

すでに初春のすぐそばまで駆け寄っていた励はどうしていいかわからずに固まっていた。

「いッ！いきなり何するんですか佐天さんッ！！」

「いや、親睦をふかめるためにと……ところでその人って、初春の知り合い？」

佐天と呼ばれた少女は静かに固まっている励を指差した。

ようやくそれで励の存在に気付いたのか、初春は顔をさらに赤くして励に問い詰める。

「神落さん！！ま、まさか見ちゃいました？」

「へッ！？」

励は突然思考を取り戻させられた。

だが、いまだカチコチの思考回路でうまい嘘を言うことなど不可能だ。

励は顔を真っ赤にして首を横に振って動揺しながら答えた。

「見てない見てない！！淡いピンクの水玉以外は何もツ！！」

「ばっちり見てるじゃあないですかッ！！！！」

「良かったねえ初春！きっちり女の子としてパンツを見てくれる
みたいだよ？」

その言葉が終わった瞬間、二人の怒りの眼差しが佐天に向けられた。

グルリと首を回転させて目を輝かせる二人に佐天は冷や汗をかきながらひきつった顔で笑う。

「あ、え〜つとごめんなさい？」

三人はとりあえず別の場所でベンチに座っていた。

「あ、でも私、白井さんとの約束が・・・」

会話の途中、立ち上がった佐天に対し、覗き込むようにして初春はそう告げた。

呆気にとられたような顔で佐天は初春の顔を見る。

「約束って、この前の？相変わらずだな？」

「約束ってなんですか？」

佐天は励を覗き込むようにして前に屈む。

励はそれに対し、気だるそうな感じで答えた。

「常盤台のレベル5・・・超電磁砲御坂美琴お姉さまにあわせてく
れるだそうだ」
レベルガン

「なんで知っているんですか？」

「あのなあ・・・俺も風紀委員だぞ？」

「ええッ!？」

びっくりしたような顔で手で口を押さえる佐天に対し、励はため息をつく。

でも　と佐天は続ける。

「常盤台のレベル5?どうせまた上から目線のいけ好かない奴じゃあないの?」

「いや、あの白井が慕っているんだ・・・魔王みたいな女の可能性も高い」

「二人ともなんでそうやって悪い方向に捻じ曲げて考えるんですか? いいじゃあないですか! お嬢様!！」

二人の言葉が消えたタイミングを見計らって初春が立ち上がると、二人の腕をつかんで引っ張り出す。

「この際、二人とも、一緒に!」

強引に連れて行くこととする初春に対し、佐天と励は反論する。

「いや、俺はいいって」

「わ、私もいいから・・・」

「いいからいいから」

結局、やけにテンションが高い初春に引つ張られて二人は御坂美琴と会う予定の場所まで連れて行かれた。

「というわけで、とりあえずご紹介しますわ・・・」

頭を抑えながら白井が若干沈んだ声でそう告げた。

周りには街路樹が生い茂り、緑が多い歩道に五人はいる。

白井の変態ぶりは励も知ってはいたが、ここまでのものとは知らなかった。

何より、自分がもつとも恐れる人物が目の前で殴られていた光景を見てしまった励は自身の中の表を改めなおした。

自分あぐまのよつねあゆしく初春みさかく鬼おにく鬼神かみじん

白井は手を使って初春を紹介する。

「こちら、柵川中学一年、初春飾利さんですの」

初春は少し緊張したように固まりながら目の前の茶髪の少女に向かい合う。

「は、初めまして！初春飾利です！！」

たとえるなら芸能人を目の前にしたファンのような感じだった。

ちなみに、茶髪の少女と向かい合うように初春、佐天、励の順に並んでいて、その間に白井は立っていた。

「それから」

白井は佐天のことを言いよんだとき、それを察した佐天が右手で頭をかきながら自己紹介を始めた。

「どーもー、初春のクラスメート佐天涙子です。なんだか知らないけど付いてきちゃいました」

ちなみに能力値はレベル0です」

茶髪の少女に言い放つように佐天はレベル0を強調した。

「ああッさッ！佐天さん！！」

横の初春はそんな佐天を注意している。

佐天の横に居る人物を見た瞬間、スッと白井の目が細くなった。

先ほどよりもはきはきした口調に戻る。

「なんで貴方がここにいるんですの？」

「えーゴホンツ！柵川中学二年、白井と同じ風紀委員の神落励。ここに来た理由は・・・佐天と同じ」

励は白井の言葉を完全に無視して自己紹介した。

すると茶髪の少女は静かに名前を確認するように読み上げていく。

「初春さんに佐天さんに神落さん」

顔を上げて微笑んだかと思つと静かに口を開く。

「私は御坂美琴・・・よろしく」

「よ、よろしく」

「おねがいします」

「よろしくな鬼神みまが」

呆気にとられた二人の言葉と、なにやら悪意がこもってそんな挨拶をした励。

それが終わると同時に、白井が全員の前真ん中にでるよつに足を一歩前に動かした。

「ではつつがなく紹介もすんだところで」

白井の表情がなにやら活気付いたものになる。

右手には手帳をもっていることからして何か怪しげなことでも書かれているのだろうなどと

励は考えながら白井を見ていた。

白井はお構いなしといったようすで続ける。

「多少予定が狂ってしまいました、今日の予定はこの黒子がばっちり！！」

御坂はグググッと拳を握り締めたかと思うと、

ゴツンッッ!!

「ったく」

頭部にパンチをくらった白井は頭を抑えて座り込んだ。

すると御坂はリラックスしたような感じで

「まっ、こんなところに居ても仕方ないし……とりあえず……
ゲーセン、行こっか?」

「はあ?」

なんやかんやでクレープ屋がある広場のベンチに初春、佐天、神落の三人は座っている。

神落はベンチに完全に身を預けていてグターツとしている。

(ゲコ太好きのお嬢様・・・ブツ！)

先ほどから笑いがこみ上げてくるのを必死に押さえている。

目の前で白井が御坂にクレープを食べさせようとあーんなどと言いついて追いかけているが、それも無視している。

横で初春や佐天がなにやら話しているが、そこに励が入らなかった。

男が自分一人だということに気づき、なにやら疎外感を感じていた。励の意識が後方の銀行に向けられた。

(シャッター？何で？・・・とてつもなく面倒な予感が・・・)

「あれ？」

「ん？」

初春もそれに気付いたのか銀行のほうを見た。

声を上げる初春に佐天がどうしたの？と言いたげな目で初春を見た。

「いえ、あそこの銀行なんですけど・・・なんで昼間っから防犯シヤッターがおちているんでしょう？」

「あー面倒だーそんな強盗とか強盗とか強盗とかしかねえだろ」

「強盗しかないですよ？」

「ほかにも・・・泥棒とか？」

「・・・」

「その目は俺をバカにしてるだろ!？」

その声を聞いた御坂と白井もシャッターがしまっている銀行を見た。

ドカアーーーーンッ!!!

直後、防犯シャッターがひしゃげたかと思うと、内側から爆発がおこり、シャッターは跡形もなく吹き飛んだ。

ジリリリリッ！！

それと同時に非常ベル？が鳴り出す。

それを聞いた瞬間、白井はクレープを強引にほおぼり、一口で平らげると、ベンチを蹴って銀行の正面に出た。

風紀委員の腕章を取り出し、腕につける。

「初春！^{アンチスキル}警備員への連絡と怪我人の有無の確認！急いでくださいな
！！！」

「は、はい」

初春も腕章を着けるといわれたとおりに動き出す。

せ付けて、宣言する。

「風紀委員ですの器物破損・・・および強盗の現行犯で拘束します」

励はあとから追いつくと白井の横に立つてすぐに腕章をみせつける。

結構急いでいたらしく、少しだけ息を切らしている。

「（くそ・・・俺も連れて行けよ・・・）風紀委員だ。こいつに半殺しにされたくないけりゃあお縄につけ」

犯人の男達は一瞬唖然としていたが、お互いの顔を見合わせると笑い出す。

「なあんだよ！このガキども！！風紀委員も人手不足かあ！？あははははは！！」

無言で足を進めて犯人に近寄る白井を見た励はだるそうな顔でこう呟く。

「あーあーご愁傷さま・・・手加減してやれよ？」

「もちろんですの」

腹を抱えて笑っていた一人のふくよかな体形の男は顔を上げて

「おらお嬢ちゃん！とつとどつか行かねえと」

白井に向かって走り出すと右ストレートを放つ。

「怪我しちゃうぜえ！！」

それを白井はヒラリと右にかわすと体を時計回りに回転すると

「そついう三下な台詞は・・・」

男の右手の袖を右手で引っ張ると左足で男の右足を蹴り、宙で一回転させる。

そして、男をリングで出来たような赤色で、少しおしゃれな歩道に背中からたたきつけた。

「死亡フラグですわよ……」

「あちゃー……もうちょっと優しく倒してやれよー!」

「何甘いことをいつているんですの?」

男の体から力が抜けてぐったりと動かなくなる。

すると目の前に居た男の一人が炎を放ってきた。

「白井!下がってる!」

「神落さん!」

励は白井を押しつけて右手を振りかぶると水の球体が出来上がる。

「聖なる水は降りかかる災厄をも洗い流す(WOBVRI)」

炎の塊と水の塊が衝突したかと思うと、あたりに大量の煙を発生させて相殺する。

男が二発目を発生させようと手をかざした時に懐に白井が現れる。

「うおッ!？」

男が驚いた瞬間を白井は見逃さなかった。

さらに空間移動を使用して男の背後に回ると男の後頭部にドロップキックを食らわせる。

「があ!！」

地面に叩きつけられた男がすぐに炎を放とうとした瞬間、

「重力は敵を縛る鎖となる(GIPMWY)」

励の声とともに再び地面に叩きつけられる。

(一体・・・何の能力ですか?)

白井はそう思いながらも太ももに隠していた白い金属矢で男の衣服

と地面を縫いつける。

「テ、テレポーター!？」

「これ以上抵抗するなら、次はコレを体内に直接テレポートさせますわよ」

白井は金属矢をもちながら余裕の笑みで倒れている男にそう告げた。

「お前が言つと洒落にならねえぞ?この外道!」

「貴方にして差し上げましょうか?」

「やめれ!」

「なんだお前!?!?離せよ!?!」

「ダメーッ!!」

「クソがッ!!」

ドガッ!!

一斉に皆がそちらを見たときには子供を抱えた佐天が蹴り飛ばされていた。

「佐天さんッ!!」

初春の叫び声が響く。

励の表情と御坂の表情が変化する。

白井が車に乗り込む男を追おうとした瞬間、御坂が叫んだ。

「黒子お！！！！」

いッ！？という声を出しながら白井は顔を強張らせたまま声のした方向を見た。

「ここからは私の個人的な喧嘩だから悪いけど・・・手、出させてもらうわよ」

電撃を纏う御坂に対し、白井の横にいた励は腕章をしまつと御坂の正面にでる。

「俺の台詞だ・・・これは俺の喧嘩だ」

「こつちも頭にきてんのよ」

「じゃあやつたモン勝ちってことでいいな？」

「いいじゃない・・・乗ったわ」

『S a t a n a 0 1 3』

バサアツ！という音とともに肋の背中から真つ黒な羽を生やした翼が生えてくる。

御坂は一瞬驚くが、ゆっくりとポケットからコインを取り出す。

「ちくしょお！このまま引き下がれっかよー！！」

車に乗った男はある程度の距離をとると、二人のいるほうに方向転換する。

「こうなりやあ teme 工らまとめてー！！」

おそらく二人を車でひき殺す気だろう。

男はグツ！と思いつきリアクセルを踏み込んだ。

キキイイツツ！！とタイヤと道路がこすれる音がしたかと思うと、車は勢いよく動き出した。

御坂は落ち着いたままコインを空中に跳ね上げる。

対して、右手を後方にやり、なにやら構えているようだ。

突然、白井の近くで横になっている男が声を上げた。

「お、思い出した！！風紀委員には捕まったら最後、

身も心も踏みこじって再起不能にする最悪のテレポーター
が居て！！！」

「誰のことですか？」

白井は自覚がないのか、それともわざとが、男の言ったことを聞き返す。

だが男はお構いなしといった調子で続ける。

「さらにそのテレポーターの身も心も虜にする、最強の電撃使いと
エレクトロマスター

そのテレポーターに仕える最強のレベル0が！！！」

白井は御坂を見ると眩く。

「そう、あの方たちこそ学園都市230万人頂点、七人のレベル5の第三位・・・」

風紀委員の中で最強のレベル0・・・」

迫り来る車に向かって御坂はコインを音速の三倍で飛ばし、オレンジの物体を放つ。

「AGNORIKSWL（真の正義のもとに敵を裁く光の槍を放て
！！）」

励の声とともに、一直線に進むオレンジの光と平行に進む真っ白な光が放たれた。

二つの光は地面を削り取りながら進んでいく。

「なあッ！！？」

車に乗っていた男が驚いているうちに二つの光は同時に車の真下に直撃し、爆風を巻き起こした。

「超電磁砲レールガンと怪物風紀委員……常盤台が誇る最強無敵の電撃姫、御坂美琴お姉さまと

風紀委員一のやるときはやる男、神落励さんですよ!!」

爆風で車は吹き飛び、御坂や励の頭上をを軽く通り過ぎ、遙か後方の道路に落下した。

あたりにアスファルトの欠片や粉塵が飛び散る。

御坂はチラリと横にいる励を見る。

すでに励は翼をしまっていて、普通の格好だった。

「やるわね・・・」

「こっちの台詞だ」

ただえあつ二人を見て、初春や佐天は呆然としていた。

「わあ・・・」

「す、すい・・・」

これが励と佐天涙子、御坂美琴の二人との出会いだった。

第四話：電撃使い（後書き）

あまり人の活躍を壊さない程度に頑張りたいです。

最後の励の技、ジャッジメントランス『裁きの槍』なんて

名前を思いつきましたか・・・風紀委員らしさがある・・・よね？
・・・疲れたw

第五話：眉毛は書くもの

とあるバスの中に、神落励と佐天涙子と初春飾利がいた。

外はバスが降っていて、昼だというのに明るくない。

三人は一番奥の席に座っていて、励、佐天、初春の順で座っている。

次のバス停で降りる人がいないためか時間によるものか、三人以外の乗客も少なかった。

両手を胸の前であわせ、目を輝かせながら初春は口を開いた。

「楽しみですね〜！！まなひやのその学舎の園〜」

「って言ってもさ〜」

佐天が初春の言葉に眉を少しひそめて言う。

「それって女子高が集まってるだけの街でしょ〜？」

「その集まってる学校が普通じゃあないんじゃないですか？」

初春は両手を再びあわせると、佐天のいるほうに身をよせる。

佐天は少し初春のその熱意におされ、少し初春から身を引く。

初春が何かを言おうとした瞬間、励が会話に割ってはいる。

「お前のそのお嬢様への異常な憧れはわかったけどさ、俺としてはどうでもいいわけだ」

「なんでですか？」

小首をかしげる初春に励が珍しく得意げに言う。

「学舎の園にしかない食い物なんか今日食えるんだぜ？」

「ケーキとかですよねー!!」

佐天が若干、身を乗り出して言い出したことに違和感を感じた初春

は佐天の鞆の中に本を見つけた。

その本を手に取り、パラパラとめくっていく。

「あれ？これって？」

どうやらそれはケーキ屋に関するものらしく、有名店の店に印がつけられていた。

初春は少しにやけると

「なあんだ。佐天さんだって楽しみにしてたじゃあないですか」

恥ずかしさからか顔を赤くした佐天が初春に目を大きく開いて反論する。

だが、それを聞きながら海斗は冷静に告げる。

「……………よく覚えてるな。相当読み込んだんだな」

「佐天さんって意外とミィハーなんですな」

ウグツと言い、言い返せなくなる佐天は話題を変えるべく、励に話しかける。

「そ、そういえば神落さんって学舎の園に入れるんですか？」

「あ、私もそう思いました」

「はあ……確かに普通は女子しかいねえから男子禁制のイメージが強いが……」

~~~~~回想~~~~~

「なあなあ白井」

「なんですの？」

支部の中で励に後ろから声をかけられた白井は振り返る。

肩がこっているのか、肩に手を当てながら励は白井に尋ねる。

「今度、学舎の園に誘ってくれたのはいいけどさ」

「来たくないでしたら別にこなくてもいいですわよ？」

「いや、そうじゃあなくて・・・」

「じゃあなんですか？」

白井は小首をかしげながら問う。

「俺って普通に学舎の園に入れんの？」

「大丈夫ですわよ。わたくしたちが招待している以上、なんの問題もないですわ」

「じゃあやつぱり異様な目で見られると？」

「そうなりますわね。だって殿方はあの場所では珍しいですから」

がっくりとした様子で励はその場に座り込んだ。

ズーンなどという効果音が聞こえてきそうだった。

「・・・面倒だああああああ」

~~~~~回想終了~~~~~

「でも来たんですか？」

「ああ、どうせお前らの服装も目立つしな」

「あ、あははは」

初春と佐天は顔を強張らせながら笑つことしかできなかった。

「え？」

御坂と白井の二人は思わず驚いてしまった。

遅れてきた佐天がずぶ濡れで、横に居る初春や励も苦笑いをしてい
るからだ。

「な、なんですの？」

白井はやっとのことで疑問を口にする。

「え、ええ」

「水溜りでちょっと」

「いや、思いつきりな」

初春、佐天、励の順で告げた。

申し訳なさそうに佐天は頭に手を当てている。

「は、はあ？」

「今更だけど、お前って結構ひどいよな」

街を歩きながら励はふて腐れた様子で白井を見た。

今は5人で街を歩いている。

佐天の服は着替えたのか、常盤台中学の制服になっていた。

白井はしょうがないという様子で続ける。

「ですが、殿方が女子の浴室に入るといのはダメでしたから」

「んなことわかってるさ。けどなあ、俺はずっと何も言わずに置いていかれたんだぞ!？」

何か一言ぐらい言えよ! つつーか初春! お前はそんな視線を通りがかりの人に放ち続けるのをやめろ!」

「くッ! じゃあどうすればいいんですの!？」

「おごれ!! そしていい加減にしろ初春! 俺たちまで変な人扱いされてるじゃあねえか」

実はというと、励はつい先ほどまで常盤台中学の前に置いてけぼりにされていたのだった。

「別に変な視線なんか・・・あッ!」

「初春ーそれだよその視線」

それを置いて初春は通りがかる人についつい変な視線を送ってしま

う。

おそらくお嬢様への憧れが作用しているのだろう。そう思いながら御坂は口を出せずに居る。

「さ、佐天さん……」

「な、なんですか？」

御坂が三人の行動と発言を見て佐天に耳打ちする。

「あの三人……本当に風紀委員ジャッジメントよね？」

「こ、個性的なだけじゃあないですか？」

佐天は苦笑いで答えることしか出来なかった。

風紀委員から突然の呼び出しを受けた三人はケーキを諦めて（正確には佐天に頼んで）支部に集まっていた。

（サツサと終わらせてPASTICCERIA MANICAGNEのチーズケーキを食ってやる……）

そんなことを考えながら励は目の前にいる固法美偉の話を聞いていた。

「常盤台の生徒が襲われる？」

「そう。昨日の放課後から今日にかけて連続して襲われているの」

そう話しながら固法は右手で近くの机の上においてあったノートパソコンの電源をつけ、

画面に何かを表示させてそれを見た後、励たちのいるほうに振り返り、告げる。

「しかも、全て学舎の園の中で」

PASTICCERIA MANICAGNE（ケーキ屋？）のト
イレに一人でいた。

用を足した後らしく、口でハンカチを銜えながら手を洗っている。

ガチャツ。

なんの前触れもなく佐天の真後ろの扉が開いた。

「ん？」

佐天はそのまま振り返るが誰もいない。

にも関わらず、扉は再びひとりでに動き、閉まった。

「ふぁね？（あね）？」

わけがわからず、しばらく何もない空間を眺めていた佐天だったが、

再び前を向くと銜えていたハンカチをとり、手を拭く。

(でも、どうして開いたの?)

もう一度振り返り、辺りを見回す佐天。

直後、バチィッ! という音がしたかと思うと、佐天の体から力が抜けていく。

(あ、アレは?)

佐天は目の前の鏡に移ったものを一瞬見て洗面所に身を任せるようにして気絶した。

「それで、意識を失った被害者は？」

白井が真剣な口調で固法にたずねる。

固法はノートパソコンのほうに顔を向けると屈んでノートパソコンに手をかける。

「写真はあるけど・・・」

固法は眉を寄せて、二人のほうを見る。

「ノックペラぼうになってるとか?」

「いやそれはないでしょう?」

「それとも、お経を書き忘れた耳をちぎられた・・・とか?」

「耳なし法一ですか!? あれって実話だったんですか!?!」

初春と励の会話を無視して固法は白井に告げる。

「ひどいわよ? 見るんだったら・・・ 覚悟しなさい」

その言葉により、白井や初春の表情が硬くなる。

白井は唾を飲み込むと静かに覚悟を決めた様子で告げる。

「風紀委員に志願した以上、覚悟は出来ていますわ」

「私もです」

「面倒だけど……見なきゃあ始まらねえだろ」

固法は左手でノートパソコンの画面を三人に向ける。

「そう、だったら……」

向けられた画面の写真を見た白井たちの表情が驚愕にそまる。

「ああッ!?!」

……一人を除いて。

「……………チーズケーキ食ってきてもいい？」

佐天が襲われたということをつけて、五人は常盤台中学の風紀委員室にいた。

支部などに比べると機材などの設備は少ないが、それでも凄いなど、励はあたりを見渡して思う。

その一室のすみのソファに佐天が寝かされていた。

額から両目の目の下辺りまでをぬれたタオルがかぶせられている。

御坂と白井たちが話している中、意外と励はのんびりしていた。

佐天の近くでこそこそ何かした後、腹を抱えて笑いかける。

(・・・やべえ・・・笑いが・・・でも・・・いや)

「くッ!!くくくく!!」

笑いをこらえるので必死な励は初春たちの話が犯人の能力について話し合っていることを確認すると

話に入ってしまった。

「それ以前に、監視カメラに写っているんでしょ？光学操作系ってのはちょっと違うんじゃない？」

御坂の話を聞いて話の流れを察した励は告げる。

「忍者みたいな能力者ってことか？」

「それはないでしょ？」

「じゃあ相当な格闘家!?またはスパイ!？」

御坂と励が話しているときに、白井は考えながら窓のほうを見た。

それに続き、初春は視界の端に何か白いものを確認して、窓の外を見た。

「あ、ハト」

「え？」

「白井さんは見なかったんですか？」

「そんなこと気付きませんでしたわ」

「真つ白でよく目立ったよな？」

「はい。ってか神落さん、気付いてたんですか？」

励は得意げな顔でにやける。

「気配を感じたんだよ」

「そんなことできますの?」

「嘘はいけませんよ」

「……白い羽を見て気付きました……すいません」

(気付かない……?)

励もハトの話で盛り上がっている最中、御坂は何か気付いたよう
すで初春に声をかけた。

「初春さん、ちょっと調べて欲しいことがあるんだけど」

「……該当する能力者は一名、関所中学校二年、重福省帆」

パソコンの画面に映し出されたデータを読み上げた初春の横から、
白井が身を乗り出す。

「そいつですわー!!」

「いやいや、よく見るよ。レベル2だぞ?」

「ですね・・・自分の存在を完全に消せる力ではないとかかかれています」

それを聞いた御坂は少し残念そうに呟く。

「良い線いってると思ったのにな」

「ん・・・」

「」「」「あ」「」

全員の視線が部屋の隅のソファで寝ている佐天に向けられた。

佐天は体を起こすと、頭を抑え、自分がなぜここにいるか考えながら地面に足をつけた。

「わたし・・・」

立ち上がるうとする佐天に対し、初春や御坂は体を心配して声をかけた。

「佐天さん！」

「無理しない・・・うえッ!?」

佐天の顔を覗き込んだ瞬間、励以外が口に手を当てて笑いをこらえる。

励だけが、腹を抱えて苦しそうに笑っている。

「無理無理無理・・・うははははははははッ!?!?!」

しばらくの間、なぜ皆が笑っているか理解できずにいた佐天だが、手鏡を見た瞬間その答えを知った。

彼女の悲痛な叫びが部屋中に響き渡る。

「は、犯人をみたんですの!？」

白井は驚いた様子で問い、それに対し佐天は静かに答える。

「はい、あの時………鏡の中に………確かに………」

手を口元に当てて考えながら御坂はものを言う。

「鏡に監視カメラ………能力でけせるのは直接肉眼で見てるかぎりなんだ………」

自分以外の皆の真剣な表情を見て、励は首をかしげる。

(なぜ笑わずに入れる!?!こいつら、すげえ!!)

「くくくッ………プッ!」いつまで笑っているんですの? 「がッ!?!」

白井に思いっきり肘うちされた励は笑うことをようやく止める。

「ふっふっふ・・・」

佐天は下げていた頭をユラリとあげると、画面の女を指差して怒りに満ちた表情で告げる。

「この眉毛の恨み、はらさでおくべきかあ!!」

顔を初春のほうに向け、真剣な表情で告げる。

「行くよ！初春！」

対して、初春はなんともいえない雰囲気についていけなくなったのか、目を数回ぱちくりさせると顔を強張らせる。

「は、はい？」

~~~~~

コンピューターに電子音が鳴り響くなか、初春が一齐に複数の画面を見ながらキーボードを叩いている。

それぞれの画面には、かなりの数の文字が現れては流れていく。

「初春！上からの許可、取りつけましたわ！」

白井は携帯をしまつと振り返り、凄まじい作業を淡々としている初春に告げた。

「初春！どーんといってみようかあ！」

「はいはい、どーん」

そついいながら初春はエンターキーを右手の人差し指で押した。

直後、ヒュンヒュンヒュンという音とともに複数の画面に学舎の園の風景が写されていく。

「うっひゃー流石初春。もしかして特技がないのって俺だけ!？」



「今更なにを言っているんですか？これで学舎の園の監視カメラ、接続を終えました」

「「「「おおッ！」「」「」」

佐天は左手で拳を作ると、不適な笑みで笑う。

「よし！待ってるよお、前髪女。必ず見つけ出してやるからなあ  
！！」

「女の子の台詞とは思えねえな……」

「眉毛の恨みは恐ろしいんです」

「……（やべッ！）」

初春は横目で佐天を見ると

「約束のケーキ。忘れないでくださいよ」

「三個でも四個でも好きなだけ食べてよし!」

「わーい」

「ってなんで神落さんまで!」

「まあまあ、とにかく行こつじゃあねえか」

「じじいくるのかよ?」

「静かに・・・」

「ああ」

学舎の園の人通りの少ない道路に一人はいた。

『そつちに行きました』

耳につけている機器から初春の声を聞くと二人はそれぞれ壁にもたれた。

(このあたり・・・)

タタタツという音を聞いた白井は突然蹴りを放った。

ドガッ

蹴りがあたったのか、見えない空間から音がした。

何も無い空間から前髪の長い少女の姿が浮かび上がる。

「な、何？」

白井は腕章を見せ付けると

「風紀委員ですの！おとなしくお縄についてくださいまし」

白井が言い切る前に前髪の少女、重福は能力で姿を消し、走り出す。

「ってつくわけないですわよね・・・」

「ってわけだのむげナビ頼むぜ初春!」

『はいはい』

励はふと、先ほど重福がしりもちをついていた場所に音楽プレイヤーらしきものを見つけた。

(音楽プレイヤー?とりあえず持っておくか・・・)

『何しているんですか!?逃げちゃいますよ!?!』

励は音楽プレイヤーらしきものをポケットにあわてて入れる。

「すまねえ初春」

白井のそばに居た励は勢いよく走り出す。

「こっちの体力なめんなよこの野郎!!」

『犯人との距離は3メートルです！キープしてください。あ、右に曲がりました』

「りょーかい！」

初春の指示を聞きつつ、励は重福のあとを追う。

初春もその間に佐天たちに指示をだす。

重福は後ろを走ってきている励を確認するとさらに曲がり、複雑な道を通ろうとするが、

その先にいる佐天を確認すると別の道に逃げ込む。

(なんで?)

闇雲に逃げているもその先に白井がいたり佐天がいたりして通れない。

(なんで!?)

逃げても逃げてもその先には誰かが居た。しかも後ろの励は先ほどから距離を詰めようとしなない。

やっとの思いで公園に来た重福は目の前のブランコに座っている常盤台の生徒を見つけた。

耳につけているものからして、追っ手と理解した重福は息を切らしながら構えた。

彼女の逃げ道を断つように白井と帽子を被った佐天と励が追いついてくる。

「鬼ごっこは」

重福の目の前にいた御坂はブランコから降りると、静かに重福のほうを向く。

「終わりよ」

「テメエ・・・少しは走れよ」

「体力を使う仕事は殿方である貴方のほうが適任ですわよ」

---

---

---

「どうして？なんでダメーチェックが効かないの!？」

ブランコを囲っていた柵を乗り越えた御坂はとぼけてみせる。

「さあね？」

「ッッ！これだから常盤台の連中は!！」

「あッ！」

ポケットからスタンガンを取り出した重福に対し、危険だと感じたのか、佐天が御坂を心配そうに見る。

だが、白井はノーリアクション。励はあくびをして伸びている。

重福は思いっきり地面を蹴り、御坂の懐に飛び込んだ。

「だあああッッ!!」

バチバチッ!!

スタンガンを当てた重福はニヤリと笑う。

だが、御坂が倒れないことに疑問を持ち、驚いて御坂の顔を見る。

たしかに胸のしたあたりにスタンガンは当たっている。

御坂は顔の前で両手の人差し指をから、少量の電撃を見せる。

「残念。私こういうのは効かないんだよね」

「え、えつと?.....あ」

御坂の人差し指が重福のスタンガンを持っていた手に突きつけられ



る。

バチチチッ！

「きゃあああ！」

重福は体から力を失い、その場に倒れた。

「手加減はしたからね」

「何よ？どつしたの！？さあ笑いなさいよ！」

「……………わけわからん（剃れよ……………）って叫びてえ！！！」

佐天をメインに眉毛を見せ付けてくる重福に励はそう答えることしか出来なかった。

色々過去の話をされた拳句、この世の眉毛が憎い！などと言われた四人はどうリアクションしていいかわからずにいる。

「え？えつと・・・変じゃあないよ？」

「へ！？？」

「そのくらい・・・その、そう！ちょうど良いチャームポイントだつて！私はそれ好きだなあ〜！」

「あ・・・」

佐天の言葉に重福は頬を赤く染めた。

それを見た佐天は口を開けたままポカンとしている。

白井はそれを見て、腕を組んで得意そうに手を顎に当てると

「罪な女ですわね」

「ええッッ！！！？」

「し、白井属性発見!!」

「ええええー……ッッ!!」

夕暮れ、佐天の声が響きわたる中、重福が何かに気付いたように佐天に声をかけた。

「あ、あの……私は眉毛を太く書いただけ……」

「ん？」

(……………マズイ)

「眉毛をつなげていません……」

「じゃあ俺はコレで……『ガシッ!!』……」

その言葉を聞いた瞬間、白井と佐天はその場からそそくさと立ち去ろうとした励の肩を

黒いオーラを放ち、目を光らせながら？む。

励は全身から冷や汗を出して、口元を引きつりながら後ろへ振り返る。

「貴方は何を考えているんですの……これは取調べが必要なようですわね？」

「神落さーん？逃がしませんよお〜。しーっかり納得いくまで理由を聞かせてもらいますからね？」

「えーっと？みみみみ御坂！助けて！」

「自業自得よ」

「……………面倒だあああああッ！……………」





**第五話・眉毛は書くもの（後書き）**

ようやく更新です。すいません。

**第六話・連続虚空爆破事件？（前書き）**

なんか飛びましたね・・・w



## 第六話：連続虚空爆破事件？

「ケラヒトン連続虚空爆破事件……ねえ……」

励は目の前の資料に目を通しながら呟く。

その横では固法美偉が難しそうな顔をして座っている。

なにやらかなりの重症を負った仲間も出たらしく、かなり深刻な問題になってきている。

その重症を負った風紀委員もジャツシメント一般人を庇って……とのことだ。

ここは風紀委員第177支部。

アルミを基点とし、重力子を加速させ周囲に放出……。

つまりアルミを爆弾とする。

そのようなことがデータに書かれているが、励には全く理解できな

い。

「先輩・・・この意味がわかりません」

「会議でも寝てるからでしょ？白井さん凄く怒ってたわよ？後でどうなっても知らないわよ」

「わからないから眠たくなるんです）・・・（キリッ」

「はあ・・・」

固法は呆れた様子で頭を抑えるが、励はそんなことも気にせず支部の扉へ向かう。

固法は励が出て行くこととしているのを確認するとたずねる。

「どっくに行く気？」

「パトロール兼ね散歩」

---

---

ドガッ!!

「ぐッッ!!」

とある橋の下にて、眼鏡をかけ、やせている少年を体が少しこついで男達が囲んでいた。

少年の顔にはあざが出来ており、壁に叩きつけられて顔を蹴られる。

少年と男達は同じ制服を着ていた。おそらく同じ学校なのだろう。

少年はどうすることも出来ずにいる。

「いやーちょっと金貸してもらっただけだっ」

囲んでいる三人の男のうち、少年を蹴っている一人が財布を他の二人に渡す。

その様子を見た少年は財布を持った男に手を伸ばす。

「返してくれよ……」

「ちゃんと返すって……出世払いでな！ははははは！」

ドガツツ！！バキイツツ！！

鈍い音があたりに響き渡る。

少年は何もできず、ただただ殴られたり蹴られたりされてボコボコにされた。

「おい、そろそろいかねえと風紀委員が来ちまうぜ？」

殴り続ける男に向かって財布をもっていないほうの男が声をかけた。

殴り続けていた男は少年に背を向けて歩き出す。

かいたひはつや  
介旅初矢から少しはなれると、介旅

「楽勝楽勝！あいつらが来るのって、いつも事件がおきた後だろ？」

「ははは！その通りだな！！」

その場から立ち去っていく男達を悔しそうな目で見ながら、介旅は心の中で呟く。

（何が風紀委員だ！お前たちが無能だから僕がこんな目にあつんだ  
！！！！

（見てろ！！）

そんなことを考えている介旅の耳には、音楽プレイヤーのイヤホンがはめられていた。

---

---

「レベルアップ？なんじゃこりゃ？」

励はフラフラと歩き回っている最中にふと、

少し前、重福省帆が落とした音楽プレイヤーが自分のポケットに入

れっぱなしだったことに気付いた。

とりあえず犯人の物なので取り調べ気分でどんな曲が入っているか調べた。

流石に女の子だけあってかなりの曲が入っていたが、少しだけ奇妙なものを発見する。

「どんな曲だろ？」

励はイヤホンを自分の常備している音楽プレイヤーのほうの結構良い値段のするイヤホンに取り替える。

単純に高音質で聞きたかっただけだろう。

イヤホンを耳につけると、そのまま曲を流そうと再生するボタンに指を当てた。

だが、次の瞬間、音楽プレイヤーを一本の白い金属矢が貫

き、

貫かれた音楽プレイヤーは大きなノイズ音を立てたあと、大破した。状況を理解できずにしばらく啞然としていた励だが、ある声とともに自分の置かれた状況を理解した。

「神落さん……………何をしていたんですの?」

励の振り返った先には白井黒子が何食わぬ顔で立っていた。

言っていること自体は普通のことだが、その異様なドスのきいた声には本人の今の心情が現れていた。

励は冷や汗を流しながら白井に普通に対応する。

「いきなり何すんだよ……………音楽プレイヤーが大破しちゃったじやあねえか!」

「こんな事件で皆が忙しい中、貴方一人だけなぜそんな風にサボっているんですの?」

「ああ！？俺は面倒だけどちゃんとパトロールしてたぞ！固法先輩にも言ってきた」

「その固法先輩からサボっていると聞いたのですけど……」  
嘘はよろしくないですよ」

「……お前はもう少し年上に敬意と言つものをだな？もっと持つべきだと思つ」

ゴツンツツ！！

白井の拳が励の脳天に炸裂した。

励は頭を抑えてだるそうな目で白井を見る。

「痛ツツ〜俺何にも悪いことしてねえのに……」

「バカを言っていないで支部に戻りますわよ？今日はかなり遅くなりそうですので、

仕事をしたくないなんて言わせませんわ」



白井は励の肩をつかむとそう告げた。

「なッッ!?マジかよ……」

励はうなだれることしか出来なかった。

---

---

---

「書庫にもいねえの?」

「うん……もう少し手がかりがあれば……」

「はい、該当する能力者でレベル4以上の人は一人しか居ませんし……アリバイがあるんです。」

それに威力から見ても間違いなくレベル4以上……わからぬことばかりです」

パソコンを扱う初春に寄り添う形で励と白井は画面を見つめている。

「もしかして、短期間で急激に力をつけた能力者とか!！」

白井は何かを思いついたように顔を上げるが、すぐさま初春の言葉によって否定された。

「まゝさか・・・いくらなんでもそれは無理ですよ」

残念そうにうなだれた白井は何かを思い返したように励を見た。

その目は、やや疑心が混ざっている。

励はその視線に圧倒され、一步下がる。

「俺を疑ってんの!？」

「そついえば神落さん・・・最近何かと強力な能力を使っていますわよね・・・何かご存知で？」

「急激に力をつける・・・ねえ・・・」

励が顎に手を当てて考えるしぐさをした後、チラリとパソコンの画

面を横目で見て

「力を急激にノーリスクでつけられるなんて虫の良い話はねえだろ？」

それなりの代償とか……いるんじゃないあねえの？」

「代償……とは？」

「魂を差し出す、とか、大金を払う、とか、寿命を削る、とか？」

「貴方に聞いたわたくしが馬鹿でしたわ……」

(俺は真剣なのに……)

呆れて首を横に振る白井の前で励はやや不服そうな顔をするが、一瞬なのでだれも気付かなかった。

初春はそんな二人を見ると、座ったまま急に胸を張り、二人にこう促した。

「根気よく！一から遺留品に当たってみましょう！」

「ですわよね！」

「じゃあ俺はパトロール……！」

励はそう言つと支部の出口へと向かう途中、白井は励の真意に気付いたのか励の肩を持つとする。

しかし励はそれをヒョイツとかわすと、出口でこう言い放った。

「爆弾魔つてのは放火魔と同じでな！意外とわかりやすいもんだぜ  
！」

「また連絡しますわ……全く……」

「いいんですか？」

扉から励がいなくなった後、初春はキーボードを叩きながら横目で白井を見た。

何がいいのか？初春の目は語っている。つまり励のサボり癖だ。

それを察した白井はしょうがなしと言つ顔で呟く。

「いざというときは一番動いてくれますわ……でなければ今頃首ですもの……」

励はとある道路の歩道を歩いていた。

歩道と車道を分けるように木々が生えており、ビルなどの建物側には自販機が所々ある、普通の道だった。

ただ、学園都市の道の装飾やビルなどがなんともいえない清潔感を出していた。

(あれは?)

ふと、道路の向こう側の喫茶店の外のテーブルに、佐天と御坂を見つけた励は、そこに駆け出していった。

「よお御坂に佐天」

「あ、神落さん。こんにちわ」

「こんにちわ！」

二人は木の小影に位置するテーブルに座っていて、いかにもくつろげそう。

などといういかにもサボりたい一心で二人に声をかけた励に御坂は当然の問いをする。

「神落さん、風紀委員の仕事はいいの？」

「今はサボ……ではなくてパトロール中だ。面倒だけどな……」

サボりですか？そう二人は突っ込みたかったが、励

の座った後のだらけ方を見て、

苦笑いそのまま目を合わせあった。

ああ、こんな人でしたね？

・・・そうね。

目だけで語り合った後、佐天は大きいため息をついて話を励が来る前に戻す。

「はあー・・・ちょっと、なんだかな〜って感じなんですよね〜」

「え？」

励はいつの間に頼んできたのか、アイスクリームを気持ちよさそうに食べるがらぐったりしている。

そんな励もしつかり佐天の話に聞きに入った。

「いや〜なんていうか、初春や白井さんは風紀委員頑張ってる、御坂さんは凄い人だし、私はなあ〜みたいなの・・・」

「俺が居なかったけど、気のせいかな？」

佐天の話聞いた御坂は遠くを見ながら真剣に考える中、励は呆れた様子で呟く。

それに反応した佐天は、あわてて立ち上がり、手をぶんぶん振り回しながら言い訳をする。

「いや〜!!そんなことないですよ〜!!すっかり覚えてましたけど、ほらなんていうか・・・」

神落さんってこう、仕事してな・・・いや、サボ・・・ではなくて!!!!」

「しょうがねえな〜。ま!今ここに居る時点でサボりだし・・・」

「自覚あったんかい」

御坂もつい反応してしまい、振り返ると同時に突っ込む。

それを華麗にスルーして励は佐天に問う。



「で？重い話の続きは？」

「いや、そんな重い意味じゃあなくってですね！」

佐天は両肘をテーブルにつけると、両手を胸の前で組んで、どこか目を輝かせて言う。

「私も能力があったら、毎日が変わるかも〜って！」

(・・・重いじゃん！)

御坂は言い終わった佐天が飲み物に口をつけたのを見て、自分も飲み物を口に含んだ。

励は心の中で突っ込みながら、佐天の心情を考える。

「やっぱりレベル0なのを気にしてるのか？まあ前まで俺も『ただのレベル0』だったし、わかるな。」

「は〜あ・・・レベルアップとかあれば、レベル5も夢じゃあ

ないのに・・・」

「レベルアップ？なんだ？それ」

「前に話してた都市伝説のこと？」

「そうです！能力のレベルを、簡単に引き上げてくれる道具なんですって」

佐天はそういうと、ドリンクを飲み干したのが、容器内に残った氷を口につき込む。

「にゅぎほんなもいるくらいだからひよつとふいて〜なんて（脱ぎ女もいるからひよつとして〜なんて）」

「・・・あっても使っなよ？」

「ふえ？」

「え？」

突然、励が声のトーン落として、真剣に話し出したことに二人は驚き、御坂までも声を上げてしまった。

「簡単つてのが気になる……そうというのは何かやばい気がするから絶対、使つなよ？」

励はレベルアップの概要が気に入らなかったわけではなく、ただその副作用のようなものが心配だった。

命を削って力を手にした励は、後悔こそしていないが、出来ればそういうことが起きるのを防ぎたかった。

「まあ、あるわけないですよね！あははは！ははは！」

頭に手をあてて笑う佐天だったが、作り笑いということは誰にでもわかった。

（流石にこれ以上はサボりすぎだな……）

励はゆっくりと立ち上がると手をヒラヒラさせる。

「俺、もう行かないと……。ばれたら殺されちまう」

---

---

---

介旅は耳に音楽プレイヤーのイヤホンをつけて歩いている。

「もう少しだ……もう少しで無能な風紀委員をいつそう出来るぞ……」

その目には憎しみや怒りがこめられていた。

続く……。

## 第七話：連続虚空爆破事件？

「で？結局わからずじまいと？」

『はい……わかっているのは貴方がサボっているということだけ……全く……』

「柄にもなくおとなしいな？」

『暴言を吐いたところで、貴方にとってはご褒美にしなければならないでしょうし……』

「お前の中で俺はそんな趣味を持つお前レベルの変態になってんの！？人を勝手に変態扱いするな！」

「っつーか、例えそうだとしてもお前にだけは言われたくない！」

『違いまして？』

電話の向こうから聞こえるため息に励は空いているほつ拳を握り締める。

この後輩だけはいつか痛い目にあわせてやる・・・そう考えながらも話を戻す。

「早くしないと・・・な。次の被害者が出ちまう」

『神落さん』

「ん？」

『ちよーつと初春を探してきてもらってもよろしいんですの？また調べなおしたいんですの』

昨日から一日たったが何の収穫もなく、解決しそうにもない。

初春は御坂や佐天を誘ってセブンスミストにお買い物・・・どつやら励のサボリ癖が影響したのだろう。

腕章をつけて、表面上はパトロールとなっている。

励がなぜ知っているかという点、一応誘われたからだ。

付いて行きたかったが、男一人ということに底知れぬ面倒くささを感じ、断った。

初春としてはサボリ仲間が欲しかったのかもしれないが……。

もちろん、白井はそれを知らないし、知られば初春の頭の花がむしりとられることになるだろう。

そして自分も理由にされる。

そう一瞬で考えた励はやや苦笑いをしながら、白井に悟られないように電話を切った。

「わかった見つけたら連絡する」

励は電話するほどのことでもないので、徒歩でセブンスミストに向かうことにした。

（小一時間前）

初春、佐天、御坂は三人で話し合いながらセブンスミストに入っていた。

それをひ弱そうな眼鏡をかけた少年、介旅初矢は見ていた。

一瞬見落としそうになったが、初春の左腕には確かに風紀委員シヤッジメントの腕章がつけられていた。

反対側の歩道にいた介旅は自身の持っていた鞆からカエルのぬいぐるみを取り出すと不敵な笑みを浮かべる。

（僕を助けられない風紀委員なんか・・・・・・・・・・知らない）

-----

（現在）

御坂はピンクのファンシーなパジャマを見つけると、佐天と初春を



手招きしてパジャマを指差しながら目を輝かせる。

「見て見て！これ凄く可愛い」

かわいいという意見の同意を求めて御坂は二人に言ったのだが、帰ってきた答えは違った。

佐天はそのパジャマを見ると、腰に手をあてて初春に話しかけた。

「見て初春。これすごく子供っぽいよね？」

「たしかに、小学校までならありますけど……流石に今は……」

「私たちはあつちで水着見てきますね」

「わかった……」

御坂は心のそこから凹み、そのファンシーなパジャマの前に崩れた。

少しなみだ目になりながらも、自身にいいわけする。

( いいもん!! ちょっと着てみるだけだもん!! )

チラリと水着コーナーでワイワイ騒いでいる佐天たちを見た。

セクシーな水着を佐天は手に取り、初春に勧めている。

対して初春は顔を真っ赤にして拒否していた。

( 今よ! )

御坂は目の前のファンシーなパジャマの一つを手に取り、全身が写る鏡の前に出た。

サイズが合うか? 似合うか? そういったことを確認しようとした御坂の目は自分の後ろにいる人物をとらえた。

ツンツン頭の少年、上条当麻は腰に手を当ててあきれた様子で口を開いた。

「何してんだ? ビリビリ?」

彼のそばには、小学生になるかならないかくらいの小さな少女がいた。

〜数分後〜

風紀委員第177支部にて。

白井黒子は机の上に腰をかけてカップを片手に座っている。

すると突然、横の椅子に座っている固法美偉は思いついたように人差し指を立てて、話し出した。

「もしかして！手口は同じだけど犯人は別々だとか!？」

「そんなわけありませんわ」

「そつよね・・・」

白井の即答に固法はうなだれながらつぶやいた。

「もう同僚が九人も負傷しているわけだし、早くなんとかしないと・・・」

その瞬間、白井はびっくりしたような顔で固法を見た。

「同僚が九人！？ちょっと多すぎませんか!？」

風紀委員も学生とはいえ、特殊な訓練を受けたり、覚悟を決めたりしている者たちだ。

爆発が起きるとわかっているにもかかわらず、そんなに怪我人が出ることが不思議でならなかった。

「まさか!」

白井の言葉を受けて、固法の頭がフル回転する。

白井も気づいたらしく、二人とも顔を青くした。

「犯人の狙いは!!!」

次の瞬間、パソコンから、重力子の加速を観測した事を知らせる音が鳴り響いた。

---

---

「白井さんから？」

初春は携帯電話を取り出し、御坂と佐天の間で電話をとった。

『初春!!!重力子の加速が確認されましたわ!!!』

電話の向こう側の白井はなにやら焦っているようで、周りにいた御坂や佐天の表情が曇った。

初春は白井に負けない勢いで話す。

「観測地点は!!!?」

『急いで戻ってきてくださいですのー!!』

「だからー!!観測地点はー!!?」

『第七学区、洋服店!セブンスミストですのー!!……!!……!!』

初春は一瞬、啞然とした。

なぜ、ここなのか?愉快犯なのか?

そんなことを考えていたが、即座に思考を中断して返答する。

「ちよつどいいです!!私そこにいます!!」

『なんですってー!?!』

「今から避難誘導を開始します!!」

『ちよつ!初春!!』

ピッ！パタンッッ！！

白井の静止を無視して、初春は電話をきり、御坂と佐天に向き直った。

「ここ、セブンスミストに爆弾が仕掛けられています！御坂さんは避難誘導を手伝ってください！」

「わかったわ」

「佐天さんは避難を！！」

「え？・・・わかった・・・」

初春や御坂に自分の気持ちを悟られぬようにそそくさとその場を立ち去った。

(やっぱり・・・レベルのじゃあ・・・)

ただ闇雲に、己の無力を噛み締めながら、佐天は走り去った。

プルルルッ!!

励は携帯電話を取り出して歩きながら耳に当てた。

「どづした？白井？」

『すぐにセブンスミストに向かってくださいですの!!』

「・・・おいおい。まさかと思っが・・・」

『その通りですの!わたくしも向かっておりますが!!...このままでは間に合いませんですの!!』

「なんであの場所なんだ？」

『犯人の狙いは風紀委員ですの!!...今回の標的は、おそらく初春!』



！」

励は舌打ちしながら駆け足で走り始めた。

「ちくしょう!!」

携帯電話をしまった励は勢いよく走り出した。

励は元々、セブンスミストに向かっていたため、距離はそんなになかった。

道路の柵を乗り越え、路地裏を走り、セブンスミストが見える位置まで来た瞬間、

励は突然何もない空間から蹴りを食らった。

ドゴオツッ!!

「がッ!？」

2、3メートルほど地面を転がった励は痛みをこらえながらすぐに

顔を上げると、そこには三人の不良がいた。

一人は金髪で、残り二人はロン毛。

先ほど吹き飛ばされたときに頭を打ったらしく、励の額に血が滴り落ちてくる。

そんな励を見て、金髪の男は余裕の笑みを浮かべた。

「風紀委員さんぐずいぶん焦っているみたいだな。そりゃそうだもんな？」

「犯人がわからず、どんどん仲間が怪我していつてるんだからな

」

励は状況を頭の中で整理する。

この期に乗じて風紀委員を狙おうってか？

だが、こいつらと爆弾魔が協力してるわけじゃあないみたいだ。

「別の理由をつけて客を避難させてるみたいだけど？もしかしてその急ぎ様？」

例の爆弾魔じゃあないの？」

「ぎゃははは！今は風紀委員も打撃を受けてるみたいだからなあ！」

「お前もここで怪我してくれね？ってかしてるか！」

「「「わはははは！」「」「」

不良三人の声が響き渡る中、ゆっくりと励は起き上がると

「どげよ」

「あ？」

金髪の不良は励を睨み付ける。

「障害物にもならないやつが・・邪魔なんだよ」

「あんだとコリアアッ！！！」

「埋められなきゃわかんねえのなら・・・・・埋めてやる」

続く



第七話：連続虚空爆破事件？（後書き）

暗部組織の名前を暇だから考えてみました。

『フエイク』  
『スモーク』  
『ライフル』  
『フリーズ』  
『ストーブ』  
『エアコン』  
『コタツ』

励「・・・途中からおかしいだろ!？」

なんだよ! エアコンって!! 完全に途中から電化製品じゃあ  
ねえか!!」

作者「でも、いいセンスだと思いませんか、・・・」(キリッ!」

励(駄目だコイツ!)

**第八話・連続虚空爆破事件？（前書き）**

はしょりすぎだろ！？と思ってしまいましたw

## 第八話：連続虚空爆破事件？

三人の不良のうち、金髪の男が電気を放った。

『S a t a n a 0 1 3』

励は鴉の翼のように黒い羽を持つ翼を背中に出現させると、翼を盾にして電撃を防いだ。

早く初春を助けに行きたい励は、力強く足踏みした。

バキィッ！！

「なッ！」

アスファルトの地面がめくれ、金髪の男は地面からの衝撃波に吹き飛ばされた。

地面に叩きつけられた男は力なく倒れる。

気絶したのだろうと思い、その男に目もくれずに励は残り二人を倒そうと視線を前に移した。



(いない?)

辺りを見回しても誰もいない。

先を急ごうかと考え始めた瞬間、肋の腹部に衝撃が走った。

ガッ!!

「かッッ!?!」

何も無い空間からの攻撃に肋は戸惑ったが、沸いてきた感情は別のものだった。

ただ純粹な怒り。

なんで邪魔をする? あいつが何をした?

てめえらの自分勝手な考えで善良な人間の

。

歯を食いしばり、強引にその場に踏みとどまると

「足を引つ張るんじゃねえよ!!」

バサアツツ!!

黒い翼を大きく広げ、黒い羽を撒き散らした。

「殺せえ!!」

「おう!!なめやがって!!」

何もない空間から声がしたが、気にもとめずに翼を羽ばたかせた。

黒い翼から放たれた烈風は男たちを吹き飛ばし、路地のビルの側面を削った。

烈風で飛んでいく瓦礫の中に男たちの姿が浮かび上がったかと思うと、瓦礫ごと道に叩きつけられた。

(急がないと!!)

もう一度翼を羽ばたかせた励は空中へ飛び、セブンスミストを目指した。

セブンスミストの外に避難させられた人々は不安そうに建物を囲んで眺めていた。

放送では混乱を避けるために本当のことを言わなかったが、ただ事でないことぐらいは理解できているのだろう。

御坂美琴もその中にいた。

中に残って逃げ遅れた人がいないか見張る初春を心配してか、どことなくソワソワしてあたりを見ましている。

ふと、彼女の視界にツンツン頭の見慣れた少年が入った。

ツンツン頭の少年こと、上条当麻は御坂を発見すると、急ぎ足で駆

けよってきた。

「あの子を見なかったか!？」

上条がセブンスミストに来た理由は幼い少女を親切でここまで連れてきてあげたからだ。

そのことは、すでに御坂も知っていたので『あの子』がどんな子かはわかっていた。

「アンタと一緒にいたんじゃないの!？」

「さっきから姿が見あたらねえんだ!」

「もしかしてまだ中に!？」

御坂が顔をしかめて建物の入り口を見た瞬間、上条は走り出した。

「ちょ、ちょっと!！」

御坂も後を追うように、人気のないセブンスミストの中に入ってい

った。

セブンスミストの中の少し広い場所で、初春は辺りを見回して携帯を取り出した。

辺りに人はいない。避難は完了したので、後は爆弾に対処するだけだった。

携帯の電話帳から、同僚の番号を選び、耳に当てる。

非常時のせいなのか、かけたと同時に電話はつながった。

「無事に避難を終えまし『初春!!』 ツ!？」

初春の言葉を見無視するように白井は声を出した。

電話の向こう側から足音が聞こえる。

おそらく、急いでいるのだろう。

「で、どいつのことですか!？」

慌てて聞き返す初春に、白井は

『今回の事件の人的被害は風紀委員ジャケットだけですよ!!!』

ここまでくれば初春も、白井が何を伝えたいのかすぐにわかった。

啞然として白井の次の言葉を待つ。

『つまり、今回の標的は初春!! 貴方ですよ!!!』

「ッッ!」

すぐに建物から出るしかない。

そう思い、携帯を切ろうとした初春に向こう側から6、7歳ぐらいの少女が人形を抱えてかけてくるのが見えた。

「おねえちゃん!!」

少女は初春の前で立ち止まると、笑顔でカエルの人形を差し出す。

「これ、眼鏡のお兄ちゃんが風紀委員のお姉ちゃんにとって!!」

無邪気な笑顔で差し出された人形を初春は微笑むように見ていた。

だが、その視線の先にあったカエルの人形の頭が内側に吸い込まれるようにひしゃげた瞬間、

顔を青ざめて、人形を突き飛ばし背を向けると、

少女をすぐ来るであろう爆風から守ろうとかばうように抱きかかえた。

---

---

---

「俺はこっちを探す!!」

「じゃあ私はこっち!」

上条と手分けして探すことにした御坂は少女を抱きかかえ、人形に背を向けている初春の姿を確認した。

どンドン収縮していく人形。

あれが爆弾と確信した御坂は思うよりも先に体が動き出していた。

「初春さん!」

初春は御坂の声を聞くと、反射的に叫んだ。

危険な目にあわせたくなかったのだろう。

「逃げてください!!あれが爆弾です!」

御坂はその声を無視して爆弾と初春の間に立つと、即座にスカートのポケットからコインを取り出す。



その間にも人形は転がりながら収縮されていく。

(レールガン超電磁砲で爆弾ごと!!!)

チャリーンッ!

急いでいたためか、コインが御坂の手から離れ、床に落ちる。

(しまっ!!!)

御坂がコインを拾うことも許さぬように、人形は爆発した。

カッッ!!!

爆発による炎が御坂たちを包もつとした瞬間、御坂の前に人影が現れた。

その人物は背中から生やしている黒い翼を広げ、背中で爆発による炎や爆風を受け止めていた。

「あ、アンタ・・・なんで!？」

御坂はその人物を見て、驚いた。

顔をしかめながら歯を食いしばり、

自分たちに爆発があたらないようにその場に踏みとどまる人物は神落励だった。

天井を見ると、炎の奥には穴の開いた天井があった。

「ぐツ!!!?.....」

周囲の床が爆発の衝撃で削られて、辺りの棚にあった商品も吹き飛

ばされていく。

黒い翼を広げて背中で三人を守っている励だったが、自身の背中の肉が焼けているのがわかった。

ジリジリと焼けるような痛みを背中に感じるが、気にしていられないと自身に言い聞かせてさらに翼を巨大にする。

アツイ。

(なんだ！？この感じ・・・)

励は自身の脳内に何かが入り込んできた感覚になった。

正確には、元々あったものが目覚める感覚。

ニクガヤケル。

ストレスなどが無意識に溶け込むのと反対に、沸きあがってくる。

疼ク　　。

(俺・・・なのか?)

励は薄れゆく意識を強引に引き寄せた。

爆風がなくなり、

御坂のいるほうに倒れそうになった励は初春の向こうの店の無事だった棚に一つの人形を発見した。

「だ、大丈夫なの!？」

駆け寄って励を支える御坂。

だが、励の視線はそこになかった。

なぜ人形があんなところに？

「ま……さか……」

その人形が収縮を始めた。

今度は先ほどよりも早い。

犯人は保険をかけていたのだろう。

励以外はまだ気づいていない。

(体……が……)

励は動かない体を動かそうとするが、何も出来ずに倒れかける。

次の瞬間、二度目の爆発が四人を襲った。

クソッ……。

励は悔しそうに目を細めた。

ドゴオツツオオオオ！！！！！！

爆発に気づいた残り三人とともに、励は目をつぶった。

だが、いつまでたっても爆発による炎や爆風はこなかった。

何かを打ち消すような音とともに励は目を開いた。

炎や爆風は四人を避けるように、いや、四人を守るように何かや炎や爆風を打ち消していた。

静かに励は視線をその原因に目をやった。

(あれは……あの時の……)

ツンツン頭の少年が右手を突き出す形で立っていた。

その少年は励には見覚えのある人物だった。

(・・・遠いな)

その背中を見ながら微笑むと力尽きたように御坂の体に体重を預けた。

いつか・・・俺も・・・ああいう風に・・・。

励の背中から黒い翼が消えたかと思うと、励は意識を手放した。

その後、

御坂美琴により犯人が捕まえられたことを励は次の日に知ることになる。



## 第九話：ありえない転校

ここは柵川中学。

今は今日最後の授業が終わったばかりであり、授業後の帰りのHRと言ったところである。

この前の事件の主犯者である介旅が倒れたことにより、ある物の調査にかり出されている。

背中の大やけどは未だ治っておらず、服のしたには包帯が巻かれている。

励は窓から降り注ぐ日を浴びながら、机に身を預けて大きなあくびをした。

（レベルアップ・・・そして俺の能力・・・・・・ねえ・・・・もつとちゃんとした言い訳考えねえと、

マジで疑われかねえな・・・）

教師の話をはば聞き流しながら、静かに前日の記憶をたどる。

---

---

前日、

「レベルアップ？なんじゃそりゃ？」

励はじゃが〇こをくわえながら初春飾利に対し、首をかしげながら問う。

ここは風紀委員第一七七支部。  
ジャッジメント

皆は調査のために出払っているのか、二人を除いて、今は誰もいない。

ガランとした部屋の中、パソコンに向き合っている初春をよそに一人励は寛いでいた。

「なんでも、能力のレベルを上げるって噂ですよ」

「聞いたことがあるよーな？ないよーな？」

首を傾げる励のほうに初春は椅子を回転させて向き直り、横においてあったカップに手を伸ばした。

そしてそれを口元に持っていき、一飲みすると静かに話す。

「それだから白井さんにしょっちゅうおこられるんですよ？」

「あー・・・初春までそんな目で俺を・・・面倒だー」

「そんな風にごねるなら、ちゃんと調査してからにしてください」

「メンドウダー」

「棒読みになってるじゃあないですか」

ソファに完全に体を預けながら、おぼろげな瞳で天井を見つめる励  
食べる気すらなくなったのか、まだ手をつけていないじゃが〇こを  
テーブルの上に置いたかと思うと

静かに立ち上がり、初春の傍まで歩み寄る。

「……どう調査すればいいんだ？」

「何を聞いていたんですか？」

グサツという音がしたかと思うと、その場に肋は崩れ落ちた。

初春の予想以上の毒舌に大ダメージを喰らったようだ。

自業自得、そのような言葉が一瞬自分の中に浮かび上がったがあえてそれをもみ消す。

「……そういえば忘れていました」

「……?」

未だその場に崩れ落ちている肋に初春が声をかけた。

「木山春生って人が、貴方に会いたいそうですよ？」

「アイス食いたい。寝たい。サボりたい」

「あ、今から会えるって連絡入れときますんで、ファミレスでも会ってくださいね」

初春は励の言葉を完全に無視してパパッと慣れた手つきでキーボードをうつていく。

機械オンチの励には画面の上で何が起きているか全く理解できないが、メールでも打っているんだろくらいは

予測できた。

はあ、とため息をつきながら立ち上がり、支部の出口まで足を進める。

最後に、出て行く前に、彼は振り返って初春を指差し、こう言った。

「俺が変なこと言う確立は？」

「200%は超えますね」

---

---

第七学区のファミレスの奥のほうの席に木山春生と神落励は座っていた。

オレンジなどといった明るい色を使用している店内に比べ、励の出しているオーラは若干におってきそうな色だ。

何故こうなっているかというと、木山が励の能力についてしつこく質問してきたからであった。

いつかこうなることはわかっていた励だが、木山はAIM拡散力場のことを中心に聞いてくる。

励はどう答えていいか全くわからなくなっていた。

「ホワイ？」

「どうしたというんだ？君の能力についてさっきから質問しているのだが……」

木山はテーブルに肘をつけて少し身を乗り出して問う。

「あーもう、俺も知らないってことで……」

「それじゃあ納得できないのだが……」

魔術のことは、基本誰にもいえないし、言えば何かと物騒なことになるのは間違いない。

しかし、こう研究者に問い詰められるとはぐらかすことさえ難しい。

「いや、俺もよくわからないんで……それよ」

「聞けば色々な能力を使っているそうじゃあないか……」

「ぐッ（……人の話を聞けええええ）」

「まさかと思うが、君は多重能力者デュアルスキルなのか？それにしてもAIM拡散力場の・・・」

ぶつぶつと呟きながら窓の外を見る木山。

窓の外の道では学生たちが通行している。

冷や汗いっぱいのはきはき必死にこの間にも言い訳を考える。

一旦振り切ってしまうば・・・そうだ！逃げよう！！適当なことを言って！！

そんなことを思いついた励はまだ考え込んでいる木山の顔を見ると勢いよく言っつ。

「そうそう！俺、その、デュアルなんちゃら。では忙しいのでこれでー」

そう言っつてそそくさと席を立ち、その場から去ろうとした。

それに気付いた木山は立ち上がって励を追おうとした。



しかし追いつくことなど出来ずに呼び止めるように手を前に出しな  
がら言っ。

「待つてくれないか？君の能力はそんなモノではないの……」

「アデュー」

適当なことを言って、さっさと励はその場を後にした。

「明日から、このクラスの仲間が少し離れ離れにな  
ることになりました……」

前日の記憶をたどっていた励はそこで思い出すことを止める。

あの後、白井にかなり怒られたことは、正直思い出しくなかつた  
というのもあるが……。

それを置いて、励は机にうつ伏せになつたまま、教師の言葉に耳を

傾けることにした。

）・・・どういうことだ？（

他のざわついているクラスメイトとともにあたりを見回す励。

ざわつくクラスを静めようと、女教師は続ける。

「実は、あの常盤台に一時的に特待生として転校するらしいです・・・」

女教師は少し残念そうな声で言った。

とたんに、クラスは静けさを取り戻した。

普通ならば、ここで驚愕して声を上げるのだが、皆誰が転校するか早く聞きたいらしく、静かにしている。

常盤台、と言えば女子だけだよな？と励は考え、女子のほづの様子を見る。

(・・・このクラスにレベル3以上なんて、いないはずだぞ?)

そう、常盤台中学は男子禁制の上、レベル3以上でないと入れないはずだ。

しかしこのクラスにレベル3以上の人物はいない。

そのことに皆が気付いたのか、首を傾げながらひそひそと話し出す。

「誰なのか知らね? 励」

席を乗り出すようにして訪ねてくる峰崎を前に、励は首を横に振る。

「知るかよ。常盤台に転校するなんてまーた面倒な奴だな。あの学校、結構厳しいらしいぞ?」

「バカ野郎。だからお嬢様学校でいられるんじゃないか?」

「・・・お嬢様・・・ねえ」

励は常盤台の生徒二名を思い浮かべて苦笑する。

変態の白井に男勝りな御坂。

どう見てもお嬢様ではない。

ここで、女教師が再び口を開く。

その直前で皆は静まり返り、教師のほうに一齐に注目した。

「その生徒は

神落励君です」

「……………へ？」

スットンキョな声を出しながら、そういわれた本人は目をパチクリさせて驚いた。

何がどうなっているのか、思考が追いついていないようだ。

何かの間違いだと思った励は席を立って教師に言う。

「えーっっつと……何の冗談ですか？先生？」

「本当のことですよ」

「だって俺、レベル0……」

「え？知らないの？」

今度は女教師のほうに驚いたというように、目をパチクリさせる。

クラスメイト達も何が何だかといった調子で、呆気に取られている。

「だって、これは常盤台中学のレベル5、超電磁砲レベルガンの決定ですよ？」

「み……さかあああああああああああああああああああああああああああああ  
あああああああああ！？」









と非番なものにも関わらず風紀委員としてレベルアップの調査に乗りかかっている。

初春飾利もそうらしく、佐天涙子はCDを買うとかでない。

一人とくにするこゝともなく歩いてみると、ふとそこに見慣れた人物が現れた。

「ぜえぜえと肩で息をしている励は、鬼のような形相で御坂の肩を掴むと」

「何で俺が常盤台!？」

「えっ?・・・と落ち着いて落ち着いて!!」

「説明しろ!じゃねえと俺が死ぬ!」

「アンタがツ!？」

御坂は突然の励の問いに驚いて後ずさりする。

御坂も少しは予想していたことらしく、反射的に電撃を出さなかった。

「・・・わかったわよ！話すわ！」

「んで、まず何で男子が常盤台に？」

「そこが大切なの」

御坂は励の手を振り払い、少し距離を置くと片手で頭を抑えながら考え込むようにして話し出す。

「まず最初に、常盤台の上から、あることを言われたの」

「男子を入れるってか？・・・なんで？」

「うーん、常盤台の女子ってね、男子のことをよく知らないじゃない？  
い？」

しかも絡んでくるのは基本不良だから最近、男子を怖がってし

まっ女子が増えちゃったの・・・」

「・・・もしかして・・・」

一気に励はうなだれて顔をしかめる。

その表情は落胆に満ちていた。

某不幸少年ならば、ここで不幸だーとか叫んでいそうだなあ、と御坂は考える。

そんな励を見て、ため息をつきながら御坂は続ける。

「それで理事長に言われたの。レベル3以上の実力を持つ生徒ならいいから転校させる、ってね」

「実力!?!」

「そ、アンタの実力は私が認めたのよ?だから問答無用で入学!」

「待て待て待て待て！」

御坂が何かを言おうとする前に、励が待ったをかける。

「男勝りなお前が男子を選ぶのに最適って判断はわかるが、何でお前は俺を選んだんだよ!?!」

「だ、だってしょうがないじゃない!!条件に当てはまる男子がアツタしか居なかったのよ!?!」

ほんのり頬を赤く染めながら御坂は恥ずかしまぎれに大声をだす。

道を歩いていた通行人が一斉に肩をビクツとさせてこちらを見たが、二人は気にしない。

正確には励は絶望感に打ちひしがれていて地面に両手をつけて四つんばいになっている。

彼は学校の寮生活をしてきたわけだが、ここからでは常盤台までかなりかかる。

つまり、寮も常盤台のモノに移動することとなる。

一見、ハーレムのように思える状況だが、実際はひどいものだ。

男友達はいなくなり、女子からはおそらく希少生物を見るような目で見られるだろう。

ああ、俺もうだめだ。

立ち直れそうにない励は見た御坂は罪悪感を感じたのか、ゴホンッとわざとらしく咳をすると

「アンタの借りることになる寮の部屋を教えてあげるから、ついてきなさい。後、制服も・・・」

「面倒だー」

御坂はガッ！と励の衿首を持つと、そのまま励を引っ張って寮に向かった。





第九話：ありえない転校（後書き）

実は裏があつたりなかつたり……。  
明かされるにしても、まだまだ先ですが……。  
木山に会わせたのも理由あります。



## 第十話：レベルアップ

第七学区のとある通学路。

人々が行きかうおしゃやかな街並みの中、佐天涙子は一人音楽プレイヤーを持って街を歩いていた。

励が常盤台に行ったこと、白井が怪我をしたこと、レベルアップ・  
・・。

これらのことを受けて、佐天は一人、考え込んでいた。

やっぱり、神落さんも私みたいなただのレベル0とは違うんだ・・・。

片手に握られている音楽プレイヤーには巷で噂のレベルアップが入っている。

しかし、彼女は使おうにも使えないで居た。

ジャッジメント  
風紀委員にいる親友に言うべきか否か、迷っていたからだ。

風紀委員はまだ何も掴めていないらしく、言ったら取り上げられるかもしれない。

『あこがれの能力者』になれるかもしれない。

学園都市での自分の生活が刺激的なものに変化するかもしれない。

でも、なぜだかズルをするような、悪いことをするようない。。。

そんな感じがして未だ使えずに居た。

そんなことを考えながらも、どこに向かうという目的もなく歩いていくと、

レンガで出来た緩やかでおしゃれな坂にさしかかった。

佐天は坂を手すりを手でなでるようにしながら、どこか悲しそうな

目で下っていく。

そこに聞き覚えのある声が聞こえた。

「るーいこーいー！！」

「アケミ！ムーちゃん！マコちゃんも！」

彼女たち三人はどうやら図書館で勉強していたらしく、佐天は何をしていたかたずねられた。

流石にレベルアップを使うか迷っていましたが、などとは言えずにごまかす。

次第に話の能力についての愚痴へと変わっていった。

佐天は友人とともに歩きながら、ふと階段にさしかかった。

そこを下りながらアケミは話す。

「あーでもさー聞いた？レベルアップって？」

「ッ」

佐天は一瞬声が出そうになったが、もう少しといつとこころでなんとか出さずにすんだ。

「な〜に〜それ〜?」

「あ、知ってる!能力が上がるとか言う奴でしょ?」

「そーそー、噂じゃあ今、高値で取引されてるらしいよ?」

「お金なんかないよー」

友人たちの話を聞いて、佐天は階段の踊り場でクルリと体を回転させて振り返ると

「あ、あのさ・・・」

「」「ん?」「」

一斉に友人たちが佐天のほうを見た。

言つべきか、言わないほうがいいのか、不安と期待にあふれた表情。

使つてはいけないものはず……。

でも。

『そついつのは何かやばい気がするから絶対、使つなよっ。』

でもッ私だつてッッ!!

「あたし、それ………持ってるんだけど……」

翌日。

神落励は常盤台の女子寮の一室、御坂美琴と白井黒子の横の部屋で、荷物整理していた。

突然の転校、ということもあり、かなり疲れた様子でいる。

彼の着ている制服は、今までの制服と違い、ベージュを基本色としたブレザーを羽織っている。

暑苦しい姿に見えるが、服の素材は学園都市製の特別素材らしく、本人はそこまで暑くなさそうだ。

(畜生、この後も捜査かよ・・・白井が怪我したらしいし、休んでられねえんだな・・・)

白井が怪我をしたらしく、さらにはレベルアップの正体を掴んだらしい。

音楽プレイヤーという報告が来た所で励は思い出した。

そっぴや、あの眉毛女の音楽プレイヤー・・・にあったよな!!!?俺、もうちょっとで使う所だった!!!?

使用者が昏睡状態に陥ったらしく、これ以上ないくらいの大事になってしまった。

( )とりあえず、暴れている能力者を片っ端から捕まえるか・・・)

そう思い、彼は初春に電話をかけることにした。

---

---

---

路地裏にて。

「へへ、俺の能力を見」

「・・・」

ドゴオッッ!!

「うん！？」

目の前の大男が何かを言い切る前に励は背中から黒い羽の翼を出し、男を地面にたたきつけた。

男は一撃で伸びたようで、ピクリとも動かなくなった。

駐車場にて。

「オレに喧嘩売るとはいい度胸じゃあねえか！俺の力を！！」

「・・・」

バキィッッ！！

「ひょッッ」

また・・・レベルアップ使用者かよ・・・。

第七学区の道路にて。

「調子乗るなよー！？じゃっじ」



「……………」

ガッツ！！

「ぶッ」

ま……………た……………。

再び路地裏に下りて。

「このやる」

「……………」

ドゴオオオッ！！

「ほッ！！」

ま・・・・・・・・。。。

「ヒヤッハー」

「もう黙れ!!!!!!!!!!!!!!」

バキバキイッツ!!

「ひびぶー!..?」

いい加減にしろoooooooooooo  
oooooooooooooooooooooooooooo

-----  
-----  
-----

数日後。

「畜生！多すぎるだろ！！？何だよこの街！！全然安全じゃあないんだけど！？」

「しょうがないじゃないですか・・・白井さんだって、ついさっき包帯を巻いた所なんですから・・・」

初春はそういいながら励の胴体に包帯を巻きつけていく。

ここは風紀委員第一七七支部。  
ジャージメント

初春はそういいながら励の体に包帯を巻きつけていく。

その傍のテーブルには救急箱が置かれている。

皆大変なんだな〜などと考えていた励は、ここで体に痛みを感じた。

あれ？包帯、若干きつくね？もしかして、初春怒ってる？

彼女の体格的に考えても、この力の入れ方は少しおかしい。

励は恐る恐る顔をせつせと包帯を巻いていく初春に向ける。

その無邪気な笑顔を見て

「・・・なんで怒ってるの？」

「いや、神落さんが常盤台に入れたことなんて、別に気にしてませんよ？」

笑っているはずなのに、その笑顔はどことなく怒りを秘めている。

ここで、励は初春の近くのビジネスデスクの上に置かれている、

どう見ても危ない薬品のビンを見つけた。

罫線マークが大きく書かれていて、とても医療品とは思えない。

そこで、自身の包帯が巻かれた部分から、ジワリとした強烈な痛みを感じた。

「いだだだだッ！！？痛いから止める！！包帯に何を塗ってんだ！！！！？」

「いいな、なんて、思っていないですよ？あ、ちなみに、すぐ治るって噂の激薬ですよ。」

「激薬つて、髑髏マークついてんじゃねえか!？」

初春が黒くなった!?!白井!どうにかしてくれ!」

励に助けを求められた白井はその光景を見て鼻で笑うと

「殿方ですのに、それくらいで痛がるなんて、ダサすぎますの」

「どうせお前は御坂に巻いて貰いたい、なんて言ってたんじゃねえのか!？」

半ばヤケクソといった感じで励が言った言葉に、制服を羽織っている状態の白井は言う。

「お姉さまにわたくしのこんな姿は見せるわけにはいきませんわ」

「大丈夫ですよー」

痛みで顔をしかめている励を置いたまま、初春は四本足の事務椅子に座った白井のほうを見た。

無邪気な笑顔のまま、とくに悪びれることもなく、続ける。

「誰も見たくないですからー」

「・・・同感」

「ああん？（不良レベルの声）」

ガッ！と白井は初春の胸倉を掴み、ブンブンと揺さぶる。

「あわわわわわわ〜」

ヒュンッッ

「死ッッぬッ!?!」

対して励のほうには白い金属矢が飛んできたようで、彼はそれを間一髪でかわす。

ブンブンと揺さぶられながら、初春は目を回しているらしく、白井に抵抗すら出来ないようだ。

『 …… !! 私も何か手伝えること』

「ッ!?!」

風紀委員の支部の入り口の水色の扉の向こうから、御坂の声が聞こえた。

御坂に怪我をしていることを知られたくない白井は、制服をちゃんと着るため（あくまで今は羽織っている）

初春の胸倉から手を離し、反射的に入り口の扉の真上  
ちよ  
うど入ってきたばかりの御坂の頭上に空間移動させた。  
テレポート

ごっんッッ!?!と初春と御坂の頭が衝突する音が聞こえた。

「だッ!?!?」

「ッッ!?!?」

頭をぶつけた二人はそのまま床に倒れる。

それに気付かなかったのか、白井はすぐに制服を着なおすと、扉の前に出て、苦笑いのまま挨拶をした。

「じ、御機嫌ようお姉さま」

しかし目の前の光景を見た瞬間、白井はようやく自分のしたことを思い出す。

脇は倒れている二人を見て、ネクタイを結び、ブレザーを羽織いつつ、白井のほうへ顔を向けた。

「お前、いつか殺人犯になるぞ？」

「で？進んでるの？捜査のほう・・・」

御坂は回転する事務椅子に反対向きに座って壁に腕を組んでもたれ



る白井と

その脇に立つ初春と励に尋ねる。

その額には大きなシツプが張られており、先ほどの痛々しさがこちらにまで伝わりそうだ。

「それが・・・」

「さっぱりなんだよ」

「木山先生の話では、短期間に大量の電気的情報を脳に入力するための学習装置テストメントという特殊な

装置もあるそうです。でも、それは視覚、聴覚、味覚、嗅覚、触覚の五感全てに働きかけるもので・・・」

白井は少し困ったといった調子で下を向いた。

御坂が後に続けるようにして言う。

「レベルアップはただの音楽ソフト、聴覚作用だけね」

「全然わからん？」

「植物状態になった被害者の脳を搜索しても、あの曲のデータ以外、何にも見つからないんです・・・」

「・・・曲だけでいけそうだけど？」

「「「へ？」「」」

御坂、白井、初春の三人は驚いた様子で励のほうを見た。

その顔には何言ってるんだコイツ？的な感情がにじみ出ている。

それを見てため息をつきながらも、励は言う。

「海かさ？波の音聞くとさ？海の光景を思い浮かべて、海の間を  
味わうだろ？」

風鈴の音を聞くと、夏。吹雪の音を聞くと冬！ってな。

つまりは聴覚を刺激するだけで他のことも刺激されるってことだ」

「つまり、音だけで五感を刺激し、学習装置と同じような効果を出すってどういうことですか？」

「ごめん、言い方難しくしないでくれ・・・俺がわからん」

「そーいや、そんな話、前にかき氷食べた時にしたわよね？黒子？なんて言うんだっけ？そーいうの」

御坂が思いついたように人差し指をピンと立てた。

白井はそれにつられたように顔を上げる。

そして考えるように上を向いて眉を潜める。

「えー・・・っと・・・・・・食べ比べ？」

頭に人差し指を当てつつ、白井は自身なさげに言う。

いや、そっちでなく……、という御坂の呟きを聞いた白井は

かき氷を食べた日の記憶をさらにたどり、たどり、たどり、たどり、たどり、たどり……。

風鈴の音が頭の中で流れた。

「「共感覚醒！」「」

二人は同時に身を乗り出し、言った。

その動作に一瞬ビクッとなった励と初春だが、即座に初春は携帯を取り出すと

『木山春生』と表示された番号に電話をかけた。

少し間を置いた後、電話の向こうから木山春生が聞こえた。

そして、初春は四人で考えたことを話し出す。

---

---

励は木山春生に対し、疑問を感じていた。

このレベルアップに関して、ただの学生である自分たちが気付けたのに対し、研究者の木山は気付けなかったらしい。

励は第七学区の道路を駆けながら考える。

初春は午後から木山の所に行くらしく、少しだけ不安になった。

果たして『ただ見落としただけ』なのだろうか？

(・・・なんか、嫌な予感しかしねえな・・・・・・・・・・)

ただの勘なのだが、励は直感や思いつきを大事にするタイプの人間であるため、考えることを止めない。

(もし、木山が俺たちに何か隠しているとするならば・・・・・・・・・・)  
・・)

ならば、木山を頼ることを一旦止めてみることにした。

レベルアップの流され方をもう一度探ってみることにする。

確かに、レベルアップはダウンロードするだけで使える。

しかし、今では予想以上の広がりを見せているようにも見える。

二万人近くの人が眠っているらしい……。

普通なら、一万程度でも十分に使用者は副作用を恐れ、使わないはずだ

無能力者だからか？そう思い、<sup>レベル0</sup> 励は足を止めて考える。

(……………いや、待て……………)

携帯電話を開き、今まで倒れた能力者のレベル分け表（励オリジナル）を見た瞬間、目を大きく見開き、驚いた。

強能力者<sup>レベル3</sup>以上が、千人以上もいるではないか………と。

(畜生、見落としていた……でもおかしいだろ？なんでレベル3以上が……)

ただでさえ見つけにくいレベルアップをこれほど多くのレベル3以上が手に入れようとする動機が思いつかない。

(まさか……)

ふとある考えが彼の頭を横切った。

(………犯人は、作った奴だけじゃなく……黒幕もいるのか?)











第十話・レベルアップ（後書き）

励の服は、アニメ二期の海原エツアリと似たような感じですよw

## 第十一話：奈落信哉

ちツ！！面倒なことになりそうだ。

神落励は第七学区の道路を走っていた。

いや、正確には駆けていた、といったほうが正しいだろう。

魔術を使用しつつ、行きかう車の屋根を蹴って赤信号で立ち止まらずに済みます。

普通ならば相対速度などの関係でありえないことだが、魔術はそれらを強引に無視する。

（ちツ！！レベル3以上となると、普通はそんな危なっかしいモンに手を出す馬鹿は少ないはず！！

なら、友達に進められたとか、ネットから手に入れたって線は………多分ない）

信号機の上まで何らかの魔術を使って飛び、そこで屈みこんで信号機に片手を当てながら考える。

(・・・と、なると・・・先生、いや違う・・・  
研究者レベルの人物?)

再び携帯を取り出し、初春飾利と表示された名前に向かって、電話をかけた。

彼女は午後から木山春生の所に行くらしいが、今はまだ風紀委員第一七七支部にいるはずだ。

人目を気にせずに彼は電話に集中する。

『どうしたんですか!? 神落さん!? 急に電話なんかかけてきて!』  
『?』

「初春! ちよいと最近単独で活発に動いている  
講座とかそんなことをしている研究者は?」

『え!?!? どういう・・・?』

「もしかしたらただけど・・・犯人は一人じゃない  
!?! レベルアップは製作者が元凶だが、

それに乗じて、別ルートで広めている奴がいるはずなんだ！  
」

焦っている感じの脇に初春は動揺しながらも向こうでパソコンを使っているらしく、キーボードを打つ音が聞こえる。

そして初春は話し出す。

「一人だけ、居ました！ななつしんや奈落信哉！！心理学と能力開発を専門としている研究者、22歳。

最近高レベルの能力者が集まる学校によく授業をしに行くらしいです！..!」

「.....そいつの所在は!..?」

「そこからすぐ近くの大学に研究室を構えているみたいですね.....  
どうするんですか?」

この間にもカタカタとキーボードを叩く音が電話越しに聞こえてくる。

励の焦る理由は、危機感によるものだ。

これ以上被害者を増やしたくないから・・・そして、ここ最近感じる『妙な感覚』によるものだった。

ここ最近、常時感じているものだが

レベルアップ使用者に一定の距離まで近づくと、何かと『妙な感覚』は強くなる。

しかも、『ソレ』に被害者間の個人差はない。

それらのようなことから

彼はレベルアップの真実に、あいまいだが誰よりも近づきつつある。

だからこそその危機感。

「決まってる」



ただレベルをあげる道具ではない。

おそらく、これは

。

そして、何より許せないのはレベルの低い者の気持ちを利用した物であること。

白井や初春ほどの信念は、自分にはないかもしれない。それでも、彼は言い放つ。

「俺は風紀委員だ」

---

---

---

ガチャッ！

「おや？お客さんかい？」

とある大学の、一番奥にある研究室の扉を開けた励を待っていたのは、さわやかな雰囲気を纏った青年だった。

さっぱりした短いフサフサの髪、研究者用の白衣、180センチほどの身長、爽やかな笑み。

木山とは対照的で、『ザ・健康』とも称せるその青年はデスクの上に置かれている書類をどけると

デスクの上に腰を下ろした。

「僕は奈落信哉。奈落さんでいいよ？ ささ、入りなよ？ 紅茶でも入れてあげるからさ？」

励は進められるがまま部屋に入る。

見渡す限り、特に何も無い部屋でまるで研究室とはいえない物だ。

「・・・」

「さて、風紀委員の神落君だったかい？今日は何のご用件で？」

険しい顔で研究室を見回す励に対し、奈落は柔和な笑顔のまま、ポケットから板状のガムを取り出す。

そして、包装紙である銀紙をはがして口に入れて

「僕に答えられることなら何でも話すよ」

「……レベルアップ、というアイテムをご存知ですか？」

「名前だけならね」

奈落は励から視線を外さずに答える。

励はとりあえず何か情報を得るためにも、続ける。

「それについて、奈落さんはどう考えているんですか？」

「そうだね。僕はアレを学習装置テストメントみたいなものだと考えている」

「あれの目的は何だと考えているんですか？」

「脳と脳を繋ぐ……多分、そういう役割をしているんじゃないかな？」

「そう……ですか」

励はすぐに思考を切り替えることにした。

この青年の考えていることがわからない。

ここに来るまでに携帯でデータ表（励オリジナル）を見たところ、この青年の転々と授業をしている学校と

レベル3以上のレベルアップ使用者の学校が見事なまでに一致していた。

これを偶然で片付けるべきか、否か。

「……」

「それにしてもうれしいなあ」

「？」

楽しいな感じで声を出す奈落に対し、励は首をかしげる。

そんな励を置いて、奈落は笑顔でこう言う。

「君の能力には前から興味を持っていたんだ。ちょっとそっちについて質問させてくれないかい？」

「・・・時間がないから、また今度にしてください」

「じゃあ別に！簡単な質問をしてもいいかな？」

奈落はピョンツ、とデスクの上から降りると自身の羽織っている白衣をキチンと着なおし

口に含んでいたガムを銀紙に包む。

ぞっ、と。

奈落の表情は変わっていないにも関わらず、肋は何か背筋の凍るような感覚を覚えた。

構わず、奈落は言う。

「もし、君たちに、権力で守られていて、捕まえられない犯人がいるとしたら  
どうする？」

「どっぴいっことですか？」

「なあに、簡単なことさ。

もしも統括理事会　つまりは学園都市でトップクラスの  
権力に守られている犯人がいるとする。

そんな人物が、目の前で悪さをしていたならば、君はどうする？

……そうだね？質問を変えよう。

そんな人物が目の前にいて、君はその人物の正面にいまする。

その君の手には一本のナイフと手錠があります。そしてその人物は飽きることなく悪事を働きます。

さて、どうする？」

なるほどな、と励は悟った。

おそらくこの青年が平然としていられるのは、何か隠し持っているだけではなく、捕まることがないからだ。

たとえば、無理に捕まえても、権力で出られる。

相手だけ『玉』なしで将棋をするのと同じだ。

「・・・・・・・・関係ねえよ」

バツ！と励は風紀委員の腕章を取り出し、腕に巻きつける。

先ほどまでは研究室に入る直前で一度外していたが、ここにきて彼はそれを付けた。

「俺はお前を捕まえる！！権力とかそういうものは、後でどうにかしてやる！！」

励の言葉に、一瞬だけ驚いたような顔をした奈落は、白衣に手を突っ込んだまま

「いいね。面白い回答をありがとう。でも僕は捕まらないよ？あまりにもつまらないからね」

薄っすらと、どこまでも楽しそうな、人をあざ笑うような、

笑みを浮かべた。



「ッッッ……！」

同時に、『ピシッ』という何かが割れる音に気がついた励は背中から慌てて魔術を使用し、黒い翼を生やす。

刹那

轟音とともに研究室が、コンクリートの壁ごと吹き飛んだ。

スタツ、と。

コンクリートの破片や砂埃が舞う中から、励が翼を生やした状態で吹き飛ばされるようにして出てきた。

そして、何らかの魔術を行使して、大学の建物の壁に垂直に降り立つ。

（危なかった……）

後コンマ数秒反応が遅れていれば、

おそらく今視界に見える落下中の瓦礫とともに、吹き飛ばされていたかもしれない。

「よく反応できたね」

全てを小ばかにしたような、透き通る声。

ゴオツツ！！と風が吹いたかと思うと粉塵に覆われていた部分が晴れて、その中から奈落の姿が現れた。

天井と壁がなくなり、デスクや椅子や資料や本棚

……その全てが吹き飛ばされた研究室の中心に、彼は無傷で立っている。

「・・・」

「そんな怖い顔するなよ。僕が能力開発してないとは言っていないけどなあ？」

「もっとも、正規の方法じゃあないから、書庫バンクには乗ってないさ」

白衣をたなびかせながら淡々と続ける奈落。

「余裕じゃねえか！！行くぞ！！」

励は不適な笑みを浮かべると建物の壁を蹴って奈落に向かって突っ込む。

「ハハッ。威勢のいい奴だな」

「ゴオツツ！！」

「ツツ！！！？」

励の体が奈落から発せられた不可思議な力によって吹き飛ばされた。

吹き飛ばされた励は数メートル先の建物の壁に激突し、

黒い翼を羽ばたかせてギリギリ落ちることをしのいだ。

一瞬だが意識が飛びそうになった励を見て、奈落はポケットから再びガムを取り出し

「僕の能力は引力創造<sup>インタレーション</sup>。引力を作れる。

今はマイナスの引力、つまり斥力を生み出したわけだけど、難しかったかな？」

「……………なら、これはどうだ!!」

壁にたったままの状態で励は左腕を前に突き出し、右腕を後方にし  
て弓を放つように構えた。

そして、白い光の矢を奈落に向かって放つ。

ヒュンッ、と。

空気を切り裂きながら白い光の、槍と称するにふさわしい光線は奈落に向かって突き進んだ。

「ジャッジメントランス裁きの槍!!」

励の全力の、誇りともいえる一撃。

まっすぐ進む光線は奈落に直撃し、即効で終わらせることが出来るはずだ。

しかし奈落はそれを見て不意に笑うと、

「タイミングと、君の今の精神状況、そして僕的能力。これらを計算することで簡単に避けられるんだよ」

ドガッッ!!!!!!!!!!

奈落が視界から消えた。

直後、白い光線が何もない空間に直撃し、床を粉々に砕く。

「ツツ!!!? (避けた!? 御坂の超電磁砲<sup>レベルガン</sup>レベルの速度だぞ!?)」

目を見開く励の頭上から、先ほどまで疑問の対象となっていた人物の音が聞こえた。

「また、足の裏から斥力を出すことで空中でも自由に動くことが出来る」

「くツ!?!」

驚く励の顔面に奈落は蹴りを入れようとキックを繰り出す。

それを両腕を交差させて防ぐが、そうとうの衝撃だったらしく、励の背中側の壁が砕け散る。

「かあツツ!?!」

「蹴る瞬間や殴る瞬間、投げる瞬間。それらに斥力を発生させるこ

とで相手を吹き飛ばすことが出来る」

(どこまでも、余裕ぶっこきやがってツッ!!)

砕けた壁の向こう側の廊下に励はボールのように転がる。

なぜだか、人気は全くなかった。

歯を食いしばり、強引にフラフラと立ち上がり、先ほど奈落がいた位置を睨む。

「ぜえッ……ぜえッ!……ふざけやが」

ガッッ!!!!

「弱いなあ。期待はずれだなあ」

奈落は励の顔面を鷲掴みにするとそのまま勢いよく床に向かって能力を使用しつつたたきつけた。

ドゴオオオッッ!!

「……ツツあッ!?!?!?」

轟音とともに励の叩き付けられた床が陥没し、励の体から力が抜けていく。

(ち……くしょ……う)

励は薄れ行く意識の中、奈落が白衣のポケットから携帯と音楽プレイヤーを取り出し不適な笑みを浮かべる。

「レベルアップ……君も聞いてみるかい？面白いことが起きるかもしれないよ？」

(こ……いつ……何を……考えて……)

励の意識はそこで途切れた。



---

---

暗い、暗い、暗い、闇の中。

上も下も右も左も何もない真っ暗な空間。

宇宙空間のような広さも感じないその不思議な空間に励は一人、立っていた。

正確には浮いている、と言ったほうがただしいかもしれない。

あたりを見回しつつ、考える。

(……………ここ……………は？……………夢か?)

先ほどまでの戦闘による体の痛みはないことからするとこれは夢か何かのようだ。

おそらく未だ意識というものが存在するということは自分は殺されては居ないのだろう。

しかし不思議な夢だな、とあたりを見回す励の耳に、聞きなれた声が聞こえた。

「神落さん？」

「佐天………？」

振り返るとそこには私服姿の佐天涙子が呆然と立っていた。

励は驚いたようにして佐天を見る。

いつものような明るい様子はなく、なぜか悲しげな、儂げな表情をしていた。

「何で、神落さんがこんな所にいるんですか!？」

「………ここが何処か、知ってるのか？」

「………」

佐天は俯くと

「もしかして、神落さんもレベルアップを使ったんですか？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ああ」

「私は今、昏睡状態なんです。多分、神落さんも・・・・・・・・」

あまりにも淡々とした感じで続ける佐天。

衝撃の言葉に、励は目を見開いた。

レベルアップ・・・・・・・・確かあれを使うと昏睡状態に陥るんだっとな  
・  
・

まさか！？佐天も使ったのか！？

昏睡状態の俺と、佐天・・・・・・・・・・・・・・・・昏睡者同士の意識が繋がっている？

「あの……神落さん……」

「……佐天？」

佐天を纏う雰囲気が一瞬にして変わった気がした。

背筋が凍りつく感覚。

「佐……天？」

ぞぞぞぞぞぞぞぞぞぞぞぞぞぞぞぞッ！！

何か悪い物にでもとりつかれたように怪しげな雰囲気を放つ佐天。

見ているだけで恐怖する。

見ているだけで威圧される。

見ているだけで……大きな、大きな、負の感情が流れ込んでくる。

『いくら努力しても！！………夢は夢でしかなかったッ！』  
『この街では！！才能のある者だけが力を手に入れられる！！！！』  
『なら、才能のない奴はどうすればいいんだッ！！』  
『どんなことをしても力を手に入れるしかないじゃあないか！！！！』  
『能力者に、なりたかった……』  
『努力するのは……もうたくさんだ』

（ ツツあ！！？脳が割れるッ！！？呑まれるッ！！ ）

佐天のものではない、まるで助けを求めるような、そんなうめき声  
が聞こえる。

正面にいる佐天はどんどん黒い渦に飲み込まれていく。

いや、そもそもこれは佐天なのか？とさえ思ったほどだった。

励が何か行動を起こそうとした瞬間、佐天は暗闇に消える前に、こ  
う呟いた。

『「無能力者<sup>レヘル</sup>って、欠陥品なんですか？」』

励の視界が、眩しい白色で塗りつぶされた。







忘れられていた主人公紹介

ここでもさかの主人公紹介。

・しんらくつこむ  
神落励

14歳の男子。ジャッジメント風紀委員第一七七支部に所属するジャッジメント風紀委員。

柵側中学二年生だったが、今は常盤台の特別男子生徒として迎えられている。

いざという時はかなり強い正義感を見せるが、普段は面倒くさがりで風紀委員の仕事が多々サボる。

白井黒子や初春飾利といった、才能のある人物にでも平気で話しかける。

また、白井や初春にサボりをさせないために雑用させられることが多い。

風紀委員に入った動機は、本人曰く『不良に絡まれている所がある人物に助けられたから』だが

詳細は不明。

## 魔術の説明

『黒い表面の上に紫や白の模様が入った万華鏡』のような霊装によって小さな魔方陣を展開、

そして悪魔や墮天使といった存在の『力だけ』を強引に自身の力とし、魔術を使えるようにする。

エンゼルフォール  
御使墮エンゼルフォールとしては違い『墮天使（悪魔）自体を降ろしてくるわけではない』ので

意識は励のままである。

魔術を使う時は、

一時的にだが、強引に使用者の個人情報を書き換えているので、能

力者の魔術使用時の拒絶反応はない。

魔法名は『S a t a n a 0 1 3 (運命に逆らう者)』で、宣言して  
いなくても黒い羽の翼が出せる。

だが、魔術を使用することなら常時可能で、

魔法名と黒翼が出た時は最高威力の魔術が繰り出せるが、その分疲  
労が激しい(本人無自覚)。

様々な魔術を繰り出せる。

莫大な力を生身の人間に降ろすため、命が削られるが、

一度生身に降ろせばそのまま力は体中に滞在するため、その人間の  
素質によって寿命は変わる。

## 第十二話：そして動き出す

「佐天ツツ!!?」

ガバツツ!!と勢いよく神落励は起き上がった。

勢いで彼に付けられていた酸素マスクも取れて、ベッドから落ちる。

「神落さん!!」

両脇から同時にかかってきた声に励は我に返ったようにあたりを見回した。

今まで、励は病室に寝かされていたようで白いベッドに患者服

と励がまるで入院患者のようにも見える。

励は両脇にいる白井黒子と御坂美琴は驚いたような表情で励を見つめていた。

構わず、励は問う。

「おい、御坂！佐天は!!!？」

「さ、佐天さんは・・・今・・・横の病室に・・・」

御坂は困ったような表情をして目を励から外した。

「レベルアップか!!!」

励は先ほどの出来事が夢でないことを悟ると、チツと舌打ちし掛け布団を取り払い、ベッドから飛び降りる。

「ど、どうして今まで寝ていた貴方が佐天さんのことを知っているんですの!？」

「夢で、佐天と会った」

「ど、どういうこと!？なんで神落さんだけは目が覚めたの!？」

「それは俺にもわからないけど、多分、俺しか目が覚めることはねえ!!!」

励の言葉に訳がわからないといった調子で首を傾げる白井と御坂。

励は緑の患者服を脱ぎ捨て、近くの棚に置かれてあった自身の制服を着る。

クソッ! どうして気付けなかった!?!? いつでも  
気付けたはずなのに!?!!

そして頭に巻いてあった包帯を取った。

「……この有名な医者は、どこにいる?」

—————  
—————  
—————

「なるほど、意識と意識が繋がっている……ねえ」

「ああ」

「それなら、僕の考えも大体あっているようだねえ……」

励は今、暗い部屋でカエル顔の医者と二人でいた。

カエル顔はPCの画面を見ている。

ふと、カエル顔はPCの画面に目を向けたまま、部屋の入り口に立っているナースに向かって支持を出した。

そのナースは廊下のほうに向かって手招きすると、そこから御坂と白井が入ってくる。

チラリ、と二人のほうを見たカエル顔に向かって御坂は思わず目を光らせ、両手を胸の前で握り締める。

「リアルゲコ太!？」

「いや、違うだろ……」

励と白井は同時に御坂に向かって呆れた表情を浮かべた。



対して、カエル顔のほうは静かに画面に向き直ると、顔に薄い青色の光を浴びながら冷静に説明を始めた。

「僕が調べてみた所、レベルアッパー使用者の脳波には共通したパターンがあることに気が付いたんだ」

「ど、どうゆづことですか？」

「・・・脳のネットワーク」

「そう、彼の話とこれを組み合わせると、ある仮説が出て来るんだよ」

そう言って、カエル顔はPCの画面にある脳波パターンを映し出し、静かに事務椅子を回転させ、三人のほうに向き直る。

そして、一息つく

「何者かの脳波を使って能力者の脳波を揃え、能力者間の脳のネッ

トワークを構築する」

「それによる脳への負担がかかり、別の何か、いや、何かに脳を支配されて・・・」

「それによつて皆は昏睡状態に陥っているわけね・・・って！アンタはなんで無事なのよ!？」

御坂はハッ!となったように励のほうに振り返り突っ込む。

それに対し、白井は横目で二人を見つつ、髪を片手で払うと

「とりあえず、神落さんの脳がおかしいのは普通として、どうしてそのようなことを犯人はするんですの?」

「白井・・・お前も昏睡状態になってみるか?」

「結構ですの」

「・・・僕は医者だ。これ以上のことはわからない」

カエル顔は三人を見ながら静かに言い放った。

その言葉を受けた三人はキョトンとした顔でカエル顔を見つめる。

カエル顔は続ける。

「それを調べるのが、君たちの仕事だろうか？」

初春飾利は木山春生のところにいた。

親友の佐天涙子が倒れたことにより、事件の解決に焦るように彼女は木山の元を訪れた。

彼女に、今励たちが入手した情報は届いては居ない。

彼女はここで木山に樹形図ツリーダイアグラムの設計者を使用してもらい、

共感覚醒によってレベルアップの作用が成り立つこと、そしてその解析を考えていた。

彼女はテーブルを挟んで二つ並べられているソファの一つに腰をかけている。

「・・・コーヒーでも飲むか？」

「そんな余裕はありません」

コーヒーを出してくれた木山に対し、初春は急かすように身を乗り出す。

佐天さんを一秒でも早く目覚めさしてあげたい、そんな心情が彼女にはあったのだろう。

それを察してか、木山はポン！と初春の肩に手を置くと

「気持ちはわかるが、あまり無理をしないほうがいい・・・。」

友達が目を覚ましたときに君が倒れているのも友達を悲しませるだけだ」

「・・・はい」

「少し待っていてくれ」

そう言いつつ、木山は部屋から静かに出て行った。

「・・・」

初春は少し自身を落ち着かせようと周囲に意識を向ける。

(・・・あれ?・・・アレは・・・)

至って普通の棚からはみ出た一枚の紙。

少し距離があるが、そこには共感覚醒、と書かれているような気がした。

(・・・調べてくれたんですか?)

はみ出している一枚の紙が気になった初春はソファから離れ、紙を手に取りそれを眺めた。

しまい忘れたのだろうか？そう思いつつ初春は棚の引き出しを紙をしまったために開いた。

そこで見た光景に、初春は目を見開いて驚く。

(本!?!しかもどれも共感覚醒に関してのものばかり!?)

棚の引き出しの中には、びっしりと本が詰められていた。

どれも分厚く、共感覚醒に関するものらしい。

(何で・・・こんなに?)

本を一冊取り出し、試しに一冊開いてみる。

ずっしりとした重さが腕に伝わるが、気にしてられない。

どうやら相当読み込まれたものらしく、所々にふせんが貼られてい

る。

ここで初春は困惑することになる。

木山春生は共感覚醒を見落としていたのではなかったのか？

自分たちが連絡してから調べたにしてはあまりにも本が読み込まれすぎている。

(どろいっ……)

さらに考えを進めようとした初春の思考は部屋の扉を開く音によって中断させられることになった。

「いけないな」

バツ！と扉のほうを振り返った初春に向かってこの部屋の主は静かに不適な笑みを浮かべる。

「見られてしまったか……」

---

---

ここは風紀委員第一七七支部。  
ジャッジメント

たくさんの書類が隅に積み上げられているデスクの上に脇は腰をか  
けて静かに待っていた。

初春飾利は木山春生のところに行ったらしく、ここにはいない。

とりあえずカエル顔にもらった脳波パターンを固法先輩に調べても  
らっている。

あの奈落の企みは何なんだ？

わからない、と舌打ちしつつ脇は携帯電話を取り出した。

とりあえず初春にこれまでの情報を整理して伝えておこうという考  
えからだ。



通話ボタンを押し、耳に電話を当てて静かに相手が出るのを待つ。

ずっと鳴り続けている電話の呼び出し音を前に、励は違和感を感じつつも待つことにした。

(・・・出ない?)

まさか木山春生の所に着く前に何かあったのでは?と考えた励だったが、

すぐにその考えは固法の声によって消え去ることになる。

「いたわ!脳波一致率、99%!」

「!?!」

励は顔を上げて固法、御坂、白井の三人の居るほうを向いた。

三人ともPCの画面に身を乗り出してその人物の名前を見た。

その名前を見た固法は、確認するように言い放つ。

「大脳生理学者、木山春生!!」

「「「!!?」」」

励はすぐさま携帯を閉じ、デスクから勢いよく飛び降りると驚く御坂たちを指差し

「初春に繋がらねえ!!クソ!感ずかれたか!?!」

「そんな初春さんが!?!」

「初春さんがどうしたの?」

事情を飲み込めないといった調子で首を傾げる固法。

白井は慌てた様子で固法のほうに振り返り

「初春は今、その木山のところにいるんですの!!」

「何ですって!?!」

固法はかなり驚いた素振りを見せたが、すぐの冷静ないつもの表情に戻ると

白井を指差し

「警備員アンチスキルに連絡を! 木山春生の拘束! 向こうには人質がいる可能性あり!」

これも経験の差なのだろう、と励は冷静な固法の指示に感心し、落ち着きを少し取り戻すと

支部の入り口の扉を潜り、出ようとした。

そこに、後からついてきた御坂が声をかける。

「私も行くわ!」

「お姉さま!」

さらに後ろから白井が、御坂に何かを伝えようと駆け寄ってくる。

それに御坂と励は足を止めて耳を傾ける。

「お姉さま！初春は仮にも風紀委員！……いざとなれば！…自分の力で……？」

最初は勢いのあった白井の口調がどんどん自身のなさげなものに変わっていく。

「……」

「自分の力で……何とか？……」

「……」

気まずい空気が三人の間に流れる。

「……運がよければ……？」

「……」

(何だそのひどい評価は……)

聞いていた二人は苦笑いを浮かべることしか出来ない。

白井はその空気を取り払うべく、とにかく!と言つと、自身のもつとも言いたいことを述べる。

「ここはわたくしたちに任せてくださいですの！」

ましてや!木山はただの一研究者!!お姉さまが出るまでもないかと!!!

「それでも!二万人もの能力者の命が握られているのよ!?!」

「ですが!」

トン、と御坂が身を乗り出し、御坂を止めようとしている白井の肩に乗せた。

「~~~~~ッ!?!」

直後、白井がなみだ目になって全身を震わせ、痛みを堪えるような表情になった。

励は目を細めてやれやれといった調子で首を横に振る。

御坂は呆れたといった、手のかかる後輩を見る目になると

「そんな調子のアンタに何が出来るのよ・・・」

「お姉さま？お気づきになられて」

白井はハツとなったように御坂の顔を見た。

御坂はそんな白井の額に、人差し指と中指をトンと当てると

「アンタは私のかわいい後輩なんだから、こつこつ時ぐらい、愛しのお姉さまに頼りなさい」

やさしい、やさしい、そして頼りになる言葉。

それを受けた白井は頬を赤く染めると、静かに消え入りそうな声で  
呟いた。

「お姉さま……………」

(……………何だこの空気……………)

居づらい、と励は思いながら大きくため息を吐いた。

(白井が御坂を慕っている理由……………わかった気がする……………)

---

---

---

青いスポーツカーが、とある道路を走っていた。

青というよりはスカイブルーに近い色のボディを持つスポーツカーの中に二つの人影があった。

運転席には木山春生が、助手席には初春飾利が座っていた。

初春の手は最新式の手錠のようなもので拘束されているが、その瞳は睨むようにして木山を捕らえていた。

木山は後ろに流れていく窓の外の景色を見た後、右隣にいる初春のほうを見ると

「そう怖い顔をして睨まないでくれ」

そういつても、初春は黙り込んだままだ。

木山は少し疲れたようにため息をつく。初春の頭の上にある花飾りを見て

「……ところでずっと気になっていたんだが、君のその頭の花は、君の能力か何かか？」

「レベルアップってなんですか！？どうしてこんなことをしたん



ですか!？」

「……………こっちの質問には答えてくれない、か」

スポーツカーは今、高速道路のようなものを走っているが、人気のない道を走っているためか他に車は見当たらない。

木山はどうしたものか、と再びため息をついた直後、

視界に警備員アンチスキルの車が写った。

木山はとりあえず車を止める。

しかし、様子がなにやらおかしい。

車、というよりは救急車に近い形をした護送車らしきものは、『な  
ぜだか煙を出して横に横転してしまっている』

(これは……………一体……………)

木山は警戒するようにして冷静に現場を注視した。

横で初春が『い、一体・・・何が？』と動揺しながらこちらに疑心に満ちた目を向けているが、

気にしている余裕もなさそうだ。

ふと、気絶して倒れていると思われる警備員たちの中央にゆらりと一つだけ立っている影があった。

その人物を見ながら木山は白衣の懐に手を突っ込み、

そこから音楽プレイヤーと何かのデータが入ったカードを初春に手渡すと、呟くように言う。

「レベルアップのワクチンソフトだ・・・。それでレベルアップ  
ー使用者は目覚める・・・。心配いらない

私は誰も犠牲にはしない」

「貴方のいうことは信用できません！！大体！そんな確証どこにあるんですか！？レベルを上げさせて、

ぬか喜びさせることがそんなに楽しいですか!？」

「……………私の目的はもっと大きいものだ」

木山は静かにそう言いながらスポーツカーのドアを開け、外に出る。

上に開閉するタイプのドアだったため、木山は白衣を羽織ったまま素早く降りることが出来た。

木山はこちらに気が付いた目の前の白衣の人物を見て、これといった反応も示さずに居た。

しかし向こうは口を開き、笑顔になると

「待っていたよ。木山春生先生」

「……………君みたいな一研究者がなぜここにいる？」

「ぶっちゃけ言わせてもらいますけど、レベルアップを譲ってい

ただきたくて、ね」

白衣の青年

奈落信哉は不適な笑みを浮かべながら一

歩前に踏み出した。

木山は少し不機嫌そうになると

「……出来るわけないよ、あいにくだがそうする手段がないんだ・  
」

「それが出来るんですよ」

「……」

「貴方の脳波パターンを使ってプロトコルの役割を果たしている・  
つまりは」

「レベルアッパーのデータを少しいじくるつもりか……」

君の脳波パターンに変えることぐらいは君ならやってのけそう  
だな」

「まあそついでとこるですね」

すらすらと簡単そつに話す奈落。

そんな奈落に木山は目を細めると静かに言い放つ。

「私の知っている君は、もっと穏やかで優しかったのだがな……」

その言葉を受けた奈落は呆れたように肩を上下すると

「時は人を変える、っていうじゃあないですか。ま、僕にも目的があるんで」

ゴッ！という音とともにアスファルトがめくれ上がった。

木山はそれを何らかの方法で防いだのか、木山のいる部分だけは何も起きなかった。

木山はつまらなさそつに目を細めた。

次の瞬間、木山の右目が、瞳の部分を除いて真っ赤に染まる。

「私はここでこれを取り上げられるわけにはいかないのではな」

「楽しめそうだ」

ドゴォー！と次の瞬間、強い衝撃が二人の間の何も無い空間で衝突した。



**番外編：とある少年の転校初日（前書き）**

時間はちょうどレベルアップ編の後くらいです。

更新遅れてすいません・・・。

次回はもう少し早く。



## 番外編：とある少年の転校初日

ここは常盤台中学の、二年生のとある教室の前。

埃一つない綺麗でおしゃれな廊下で神落励は石像のように固まってしまっていた。

ベージュ色のブレザーに身を包んでいる彼は、今日から晴れてこの有名なお嬢様学校に唯一の男子として登校することになった。

転校初日・・・普通ならばここで不安と期待に満ちた、転校生らしい表情というものを浮かべているだろうが  
今の励は全く違った。

冷や汗をダラダラとかきつつ、苦笑いを浮かべている。

(・・・面倒だ・・・)

超能力者第三位超電磁砲御坂美琴、つまりは常盤台中学のEースが  
認めた生徒ということに自分はない。

肩書きは無能力者のままで、ということとは白い目で見られる原因に  
すらなりえる。

さらには男がいないということ。

つまり、確実に何もしなくても自分は目立ってしまうということだ。

(.....ん?)

教室の内側から、先生の自分を呼ぶ声が聞こえた。

と、同時に教室内からザワザワと生徒同士の話し声が聞こえた。

励はもう逃げられない、と悟ったのか、はあっ、とため息を付いてガラガラと教室の前のドアを開けた。

そんな彼の視界に飛び込んできた光景は意外と普通のものだった。

普通、と言ってもやはり他の学校とは比べ物にならないくらい清潔感、いや高級感にあふれた教室だ。

何よりも普通だったのは女子生徒達の反応で、普通の転校生を見る目と何らかわりはなかった。      ように思える。

励はとりあえず教卓の上に立ち、クラスを見渡す。

そして一息つくと

「えーっと、今日からこのクラスでお世話になる神落励です。急な転校、特殊な環境で少し戸惑いがちではありますが

どうぞよろしく願います。今更だシヤッジメントけど風紀委員だ」

第一印象が大切、そうアドバイスされていた励は慣れない口調で自己紹介を済ませた。

とりあえず先生に指示された座席まで移動し、座るために椅子を動かした。

とりあえず横の席の人物に挨拶しておこうと思い、顔を左横に向けた励は左横の席の人物に目を丸め、苦笑いを浮かべる。

「み、御坂……!？」

「改めてよろしく!」

彼の横の席の人物

御

坂美琴は無邪気な笑顔でそう言い放った。

昼休み。

一般的な学校でもある柵側中学とは違い、流石はお嬢様、予想を超えてかなり静かだ。

励は自分の席で机にうつ伏せになってため息をついている。

御坂はそれを見て、キョトンとした顔で励をのぞき込む。

「どうしたのアンタ？さっきからだらしのない犬みたいにずっとぐでーっとしちゃってさ？」

「……授業の意味がわからねえよ。何言ってるんのかさっぱりだ……」

御坂はそりゃあそうよね、とつぶやきながら苦笑いを浮かべた。

常盤台中学と言えば、相当賢い学校でもある。

さすがは名門、と励は知らず知らずの内にため息をついていた。

そんな励を見ながら、御坂は思いついたように指をピンと立てると

「この後の授業、体育よ？アンタの馬鹿みたいな体力の見せ所じゃあない」

「念のために聞くけど、合同授業ってことは？」

「・・・ええーっと」

御坂は突然何かを思い出したように、励から視線をそらし、苦笑いを浮かべた。

合同体育があっただけならば、そのような表情にはならないはずだ。

御坂は気まずそうに、申し訳なさそうに励に向き直ると、こつこつ告げ

た。

「アンタの晴れ舞台が・・・ある、はず」

「説明を」

「アンタの能力を見」面倒だぁー」  
って聞きなさいよ!!」

御坂は少し申し訳なさそうな顔になると、突然励の襟首を引っ張って立ち歩きだした。

励は席から強引に落とされ、足あたりを打ったのかおさえている。

「もうほっといてくれ・・・俺は動きたくないんだー」

「せっかくだから、この美琴センサーが直々に食堂を教えてあげるわ」

「拒否権なしッ!?!」

このままズルズル引きずられるのも嫌なので励はしぶしぶと立ち上

がり、御坂の横を歩く。

途中、廊下から、御坂様、御坂様、という女子からの声と視線がやたらと気になったのだがそこは触れないことにする。

心なしかそう御坂に声をかけた者は頬を赤く染めていた。

励は白井黒子という変態が生まれた理由が少しわかった気がした。

自分にやたらと羨ましそうな視線が突き刺さる。

(……………これが百合<sup>ユウ</sup>ってやつなのか?)

ガラガラと自分の中で崩れていく女子校のイメージ。

居心地が悪そうに眉をピクピクさせている励の後ろから、控えめでつぶやくような女子の声が聞こえた。

「お久しぶりです。御坂様……と……?」

ライトブラウンの髪をもった、ふんわりとした雰囲気を持つ少女と、黒のロングヘアの少女。

まさにお嬢様ともいえる雰囲気をもったおとなしそうな二人の少女が、励と御坂の後ろに立っている。

「神落励だ」

「あ！湾内さんと泡浮さんじゃあない！！どうしたの？」

御坂は笑顔で、励は軽く微笑みながら振り返る。

ライトブラウンの髪が特徴のふんわりとした少女、湾内絹保は口調を変えず、落ち着いていたようすで、それでいて強い感じを出さないで言う。

「貴方が御坂様に認められた転入生ですか。初にお目にかかります。

私は中学一年生の湾内絹保と申します」

「そして私は泡浮万彬あわつきまあやと申します。私たちは水泳部に所属しているんです。

どうぞよろしく願います」



この二人結構俺の好みだな、と思いつつ励は軽く咳払いをする。

そして笑顔になると

「よろしくな。ったく、御坂『様』ってなんだよ？さっきから御坂と一緒に歩いていると

視線がさあ、メンチってかビームみたいに飛んでくるぞ！」

「・・・ちよつと、人を勝手に不良みたいに言わないでくれない？」

「男勝りなのはわかるけど、ここまで御坂が女らしくないとは・・・」

「アンタね。私をなんだと思ってたわけ？」

御坂は横にいる励をギロリとにらみつつ、額から青白い火花を散らす。

これ以上何かを言うと、いつもの白井のようにまっ黒くげにされてしまうことなど、いつもの励なら察知してすぐに話題を逸らしていたはずだ。しかし、今日の励は違った。

「  
ゴリゴリ」

ブチッ、という音とともに御坂の眉が不機嫌そうに動き出した。

御坂は青白い電撃を額からあふれんばかり出現させると

「だーれがあーりーび・り・び・りだああああー……  
……！」

バチバチィッ！と青白い電撃が脇を襲った。

「つつおッ！？こんなところでビリビリすんじゃないねえッ……！」

脇は青白い電撃を手も触れずに逸らした。

もちろん、ちょっとした魔術を使用したわけだが反射的に反応出来たのは奇跡だろう。

空を切った電撃が廊下の床から地面に逃げていく。

内心冷や汗をかきつつも、励は冷静を装う。

（命がいくつあっても足りねえ・・・今度からは気を付けよう）

「で？二人は何か私に用があるんじゃないの？」

御坂は何事もなかったように笑顔で二人のほうに振り返る。

すると湾内が頬を赤く染めながら、恥ずかしそうに言う。

「実はこの次の時間の体育のことで、御坂様を応援しようと思ったのですが」

（結局この二人も他の奴と同じかぁーーーー）

励の心の叫びは現実世界に出ることはなく、しばらく何とも言えない空気を呆然と見つめていた。

---

---

「ふう、やっと飯にありつける。」

励は食堂と思われる場所にたどりつくと、すぐに空いている席に腰をかけた。

食事を取る前から疲れた、と言って足を伸ばしダランとしている。

食堂は思ったよりもシンプルで（励が想像してたのは豪邸にありそうな長テーブルのアレ）、

豪華絢爛ではなかったのだが、デザインのせいか高級感よりもオシヤレな感じが溢れている。

テーブルや椅子も木だけで出来ているが、おそらく上等なものを使っているのだろうくらいはわかる。

「・・・アンタ、なんでそんなに疲れるの?」

「こっちはお前の横を歩くだけで『いいなあ』とか言われて、視線が集中するんだぜ？」

ジト目で見てくる御坂の言葉を軽く流し、励は立ち上がった。

食事を取りに行く気のようにだが、別段急ぐ様子はない。

前の学校なら、この遅れは致命的なはずだった。

その辺楽になったな、とポジティブに考え始めた励の正面に、メイド服を着た少女が現れた。

紺色をベースとした、ロングスカートのメイド服の少女は、御坂と励を見比べたあと、スカートの裾を両手で持って

ペコリ、とおじぎをしながら

「繚乱家政女学校の土御門舞夏である。噂の男子生徒は君だなー？」

「ああ、俺は神落励。っていうか、本当になんなんだこの学校・・・メイドまでいるのか・・・」

「舞夏はもう少ししたら行われる盛夏祭の指導をしてくれるのよ」

横から話に入ってきた御坂を交えて、話は続く。

舞夏はそつだぞつと頷いているが、励には理解できないらしく、首をかしげているだけである。

「何の指導をしてんだ？」

「盛夏祭ではね、ウチの女子寮を年に一度だけ開放するんだけどその時、

私達はメイドになってお客さんを案内するのよ」

御坂は励の質問に答えつつ、微笑む。

御坂の話を聴きながらあることを想像した励はつぶやくように思ったことを口にした。

「御坂にメイド服！？似合うわけ・・・ハッ！これがギャップ？ギャ

ツプというy」いい加減にしろおおおお!!」

だああああああああああああああああああああああああ  
ああああああああああああ!!!」

バリバリバリイッ!!と青白い電撃が肋に炸裂した。

肋は一瞬だけ骨のシルエツトが体が透けて見えたが、すぐにまっくらこげになって床に転がった。

舞夏はその光景を見ながら苦笑いして、『今の、ウチの兄貴とノリがそっくりだったぞー?』と言っている。

御坂は全く、とつぶやいた後、両腕を組んで真っ黒こげにされた肋を見ている。

そこで、あることに気がついたのか御坂はあっ、と舞夏のほうに振り返ると

「そつえば、神落さんってどうなるの?流石にメイド服は着られないでしょ?」

(そ、それを世間では女装っていうんだよ……ってかそれだけは死んでもゴメンだ)

舞夏はそれを聞いてキョトンとした顔であっさりと答えた。

「ちょっとメイドとは違うけど、コイツは執事として案内役になっ  
てもらっただぞー？」

でもまあメイドと似ている部分も多いから、この私が直接、いろ  
いろ叩き込んでやるんだぞー」

「おいおいおいおいおいッ！何でそんな面倒なほうに話が進  
んでいるわけ！？」

第一！執事ってどんなのかも俺は知らないぞー！」

いつの間にかケロつとした顔で舞夏の前に立ち、文句を言っている  
励を見て御坂はため息をつく。

こういう所は白井に振り回されていたせいか、白井に似てタフらし  
い。

励の文句を聞いた舞夏はニヤリと笑うとどこからかある一冊の本を  
取り出す。



それを励に見せつけるようにしながら

「これは授業で配られた資料なんだぞー。メイドと執事の違いが隅々まで書かれている。

だから執事がどういうものか、私は知っているから問題ないんだぞー？」

「あはは、ははははは………面倒だー」

こうして、昼休みは過ぎていった。



番外編：とある少年の転校初日（後書き）

続く、かも！

## 第十三話：進化するチカラ

戦場、この状況を表現するならその言葉がふさわしかった。

ここはとある高速道路。

しかし、道路はところどころ焼け焦げていて、アスファルトが砕け散っている。

警備員アンチスキルの護送車と思える青いボディを持つ車体が横になって転がっていて、

その後方にはきつちりとした装備に身を包まれた警備員が沢山倒れていた。

警備員は気絶しているだけのようで全員息はしているようだ。

そんな道路の真ん中で、再び爆発が起きた。

舞い上がる粉塵の中から、白衣の人物が二人、お互い反対の方向に飛び出した。

片方は髪の毛の長い女性でもう片方は身軽そうな青年だ。

二人はお互いをにらみながらゆっくりと体勢を立て直した。

二人とも白衣には埃一つついてはいない。

不敵な笑みを浮かべる青年、奈落信哉は足で踏みつけているアスファルトの小さな破片をジャラジャラと鳴らしながら

「流石、と言うべきだね。全ての能力のデータを持っていても、傷一つ付けられやしない」

対して、左目を赤く染めてギロリと奈落を睨んでいる木山春生は白衣のポケットに両手を突っ込んだまま

「一つの能力で今の私と渡りあう時点で、相当な化け物なのだがな・・・」

「嫌だなあ。人を化け物扱いするなんて。化け物はせいぜいレベル5の人達と後一人だけで十分さ」

「一人？」

「別の法則・・・それを使う人物だよ。君はそういうの知らないだろうけどね」

「・・・興味深い話だ」

木山はそう言いつつ、白衣のポケットから右手を出し、前にかざした。

それに反応したように奈落は真剣な表情になる。

直後、轟音とともに奈落のいるあたりが爆風とともに吹き飛んだ。

ゴゴォ！！

何が起きているか、それだけを見た人物では到底理解できなかったはずだ。

奈落の居た場所の足元はアスファルトが大きく削れ、音を立てながら全てが吹き飛ぶ。

まっすぐひかれていた真っ白な車線も、もはやどうひかれていたかも分からなくなるほど道路の表面は

全て剥がされてしまっていた。

そこから舞い上がるアスファルトの粉塵が、内側から何かの力がかかったのか、弾け飛ぶように消え去る。

その中心には、少し埃を被った状態の奈落が姿を現した。

少し足あたりにかすり傷を負っている

「強いなあ。でもこっちからもいくよ」

ガンッ！と奈落は道路の剥げたアスファルトを蹴りつけた。

メシメシと音を立ててアスファルトの破片がフワリと宙に浮かぶ。

奈落はそれを即座に引き寄せ、掌の中に掴むとブンツと腕を振るつ。

どう能力を使用したのか、奈落の手から離れたアスファルトの破片はかなりの速度で木山に迫る。

「ッ」

木山はアスファルトを粘土のように柔らかくして、それを瞬時に操り、動かし、自身の前で縦のような形にした。

硬度は元のアスファルトに戻ったらしく、予想以上に厚い壁と勢いよく飛んできた破片が衝突する。

ゴアツ！！と凄まじい衝撃の余派が二人の横を通り抜けた。

「厄介、としか言いようがないねえ」

「手加減した覚えはないのだが・・・」

「ハハハ、それでこそ僕も努力のかがあったってわけですね？」

「・・・」

木山は目を細めて忌々しそうな表情になるとつぶやくような声で言った。

「被害者を無駄に増やしてどうするつもりだ」



刹那、奈落に向かって烈風が放たれる。

烈風は凄まじい音を立てながら一瞬にして奈落を飲み込んだ。

だが、木山はそこで攻撃を止めようとはしない。

ダンツ！と足踏みするとそこから道路を切り裂きながら衝撃波のよ  
うなものが発生し、奈落の居た場所に叩き込まれた。

奈落は攻撃があたった場所の真上から飛び出すと、今までにない真  
剣な雰囲気をもとつたまま

「・・・容赦ないですねえ。僕だって遊んでいるわけじゃあないさ。  
一つの目的を達成するためにここにいる」

「つつ！！」

木山が気付いた時には奈落は木山の目の前にいた。

空中で右腕を前に突き出し、その目は木山を捉えている。

右手の掌で木山の顔面をつかむ形で奈落は右手を前に突き出して  
いる。

とっさのことで戸惑う木山に、凶悪な能力を秘めた手を出しながら  
奈落は凶悪な笑みを浮かべながら言い放った。

「  
潰れる」

まずい、と木山は思った。

今までの速さとは桁が違う。

（甘く見すぎたか！？）

木山は思わず顔をしかめて舌打ちした。

これが奈落の策の一つだったのだ。

対等な戦いをしておきながらも、一気に最高速で迫って一撃で決める。

まともに奈落の能力を喰らえば、元々ただの一般人である木山には一溜りもない。

二万人の脳を代理演算に使っておきながら迂闊だった、と木山は後悔する。

すぐそこまで、奈落の手がせまる。

迫り、どンドン、どンドン、その手が迫ってくる。

確実に、もうよけられない、そう木山が思った瞬間だった。

上のほうから、こんな声が聞こえた気がした。

「久しぶりだな――！奈落君よお

――！！」

ドゴオツツ！――という音とともに奈落の顔面に蹴り

が叩き込まれた。

奈落は蹴り飛ばされ、4、5メートルほど先の道路に体勢を空中で立て直し、降り立つ。

木山と奈落の接触を遮るように、神落励が奈落の正面に降り立った。

首あたりに包帯が巻かれていることが気になったがそれどころではない。

直後、木山が何か反応を示そうとする前に、凄まじい電撃が木山と励の間に叩き込まれた。

「ッ！？」

ガラガラと音を立てながら木山と励の間の道路が崩れていく。

ここで木山は気がつく、電撃が放たれたほうは後方だったということ。

木山はバツ！と振り返り、後方を見た。

そこには、青白い電撃を纏っている御坂美琴が居た。

御坂は好戦的な笑みを浮かべると、木山に向かって言い放つ。

「アンタの相手は、私よ！デュアルスキル多重能力者！！」

「僕を止めるために来ただけじゃあなかつたのかい？」

「まあそんな所だけど、お前が何かたくらんでいるのはバレバレだったからな。動機は何だ？何故犠牲者を増やすだけの行為を繰り返した？」

神落励にそう問われた奈落はほんの少し不機嫌そうになってから白衣のポケットに右手を突っ込んだ。

何か来る、そう思い警戒心を強める励。

「僕の目的、か。さあね。言つとでも思つたかい？」

「ふざけやがつて！人を巻き込んでおいて！！」

ギリツ！と歯軋りの音が聞こえてきそうなくらい筋は怒りが込みあがつてくるのがわかった。

そんな筋を見ながら奈落は呆れたように肩を竦めると

「僕は非科学つてやつが大嫌いだね。君は何故起きていられるんだい？」

「知るか。俺もわからない」

「君のその非科学的な力について調べれば、僕の罪は上層部によって握りつぶされる。それが交渉材料になつてるんだよ」

「？」

「つまり、君が僕と戦つたということは僕にその材料を与えてくれる

だけってことだ」

奈落の言葉に励は揺らがなかった。

もし奈落に自身の能力（魔術）について少しでも研究されればそれだけで奈落は権力で守られ、捕まえられなくなる。

しかし知ったことではなかった。捕まえるとか更正させるとか難しいことは頭でわかっていても彼の感情はそれを無視した。

「知ったことかよ。俺はお前をぶっ飛ばす！」

ダッ！と励は地面を蹴って飛び出した。向こうのほうでアスファルトの道路が完全に崩れ落ちてるのが見えたが、御坂がやられるとは思えない。

「少しは君のそれを研究するために、オカルトも調べたことがあってね。それでわかったことがあるんだ」

「『S a t a n a 0 1 3（運命に逆らう者）！』」

ゴォッ！と先ほどまでと励の雰囲気が変わる。膨大な魔力を取り込

んだためだろう。

特に外見が変化するわけではない。黒いカラスのような翼も意思で出すことが出来るが今はいらぬ。

それを見てニヤリと奈落は笑った後、ロケットのように励の正面に突っ込んだ。

その手には何か携帯電話のようなものが握られている。

「四大属性の全てを君は使っているようだけど、それじゃあ駄目なんだ。それはあくまでオマケでしかない。不安定な力は他のものにも影響を与える」

「風よ、嵐となりて敵を蹴散らせ（N W O T J）」

励はそれを聞き流し右手に竜巻を作ると竜巻を奈落に叩き込もうと振りかぶる。

しかし奈落は顔色一つ変えない。

それどころか携帯端末に片手の指で何かを入力した。



「だから、こんな事態も招くことになる」

ピピピ、と何か電子音がしたかと思うと急に励の右手にあった竜巻は跡形もなく消え去った。

と、同時に頭が砕けそうな痛みが彼を襲う。

「ッがああああああああああああああああああああああああああああああああ  
あああああああああ！！？」

頭を押さえ込み、倒れこむ励。

何が起きているのか、まではかろうじて考えることが出来るのだが、その先が塗りつぶされる。

物事を順番に行っていくときの、順番が強引にめちゃくちゃにされる。そんな感じだった。

「h a z k k l y f u i s e y f u h ! ! !」

「君は特殊らしいからね。それはアレイスターに教えてもらった。でも君を窓口に魔術ってやつを解明したかったんだが、僕の脳じゃあ無理だ」

ドゴオツ！と能力を使用しつつ励を殴り飛ばした。不可思議な力が腹部にかかり2、3メートル突き飛ばされた所でアスファルトの道路に背中を何度か打ち付けて転がる。

「jhかshはツ！？（何が起きてる？コイツは何故そう魔術にこだわるんだ？）」

ノイズ混じりの声しか発せず、物事も整理して考えられない励。

策が立てられない以上、携帯端末を破壊することしかわからない。具体的な方法は思い浮かぶがそれらをどう行っていくかがわからない。

しかしここで負けるわけにはいかない。

この時、彼の脳裏に浮かんだのは、深い暗闇に飲まれていく、佐天涙子の姿。

「まjanklだvhuいだ」

ゆっくりと起き上がる。口の中は鉄の味がするし、頭はずっと激痛が続いている。しかも魔術は使えない。

だからどうした、と励は思う。

元々ただの無能力者だったのだ、元に戻っただけではないか。

白井黒子に振り回されていたことだつてある。これぐらいの危機的状況、慣れっこだ。

拳を握り締め敵を見据える。

それを見た奈落は少しだけ笑った後、身を乗り出すように言う。

「しつこいな。ならここで叩きのめしてあげるよ!!」

ボコッ！と彼の足元のアスファルトが砕けたと思うと、いつの間にか奈落は励の正面にいた。

「オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ

「!!」

励はそれに反応して拳を繰り出すが、奈落はそれを難なく首を横に傾けることでかわした。

そして励に対し左手を差し出すことで引力を発生させ、励の体を引き寄せる。

(ツ!!!)

踏ん張ろうとしたが無意味だった。

強力な引力で勢いよく奈落のいるほうに引き寄せられる。

奈落はそのまま右手で拳を作り斥力を発生させた拳を励の腹部に叩き込んだ。

メリメリメリッ!!

「ッッ!!!!!!?」

肺の空気を吐き出し、強力な力で腹部を攻撃されたためか声を出すことすら出来なかった。

殴り飛ばされた肋の体は放物線を描きながらアスファルトの床に背中を打ち付ける。

しかしそれだけでは勢いは消えず、何度も何度も体のいたるところを打ち付けて赤い液体を所々に撒き散らしながらアスファルトの上を転がった。

(クソ・・・クソ・・・)

体が動かない。

起き上がれない。

「よくまあ、頑張ったと思うよ。それでも、僕も譲れない事情があるんでね」

譲れない事情？関係ねえ！！それでアイツらを巻き込んでいい理由にはならないし、利用してもいい理由にもならない！！

ゆっくりと歩きながら近寄ってくる奈落だけは鮮明に見える。

意識をかるうじて保っている自分ではもはや立ち上がることにすら出  
来ない。

アイツを倒す、誰かを守るだけの力がほしい。破壊じ  
やあない。たった一人の人間を、笑顔に出来る力が

そこで不思議にも励の脳裏に先ほどの奈落の言葉が繰り返されるよ  
うに思い出された。

『四大属性の全てを君は使っているようだけど、それじゃあ駄目な  
んだ。それはあくまでオマケでしかない。不安定な力は他のもの  
も影響を与える』

策が思い浮かばなかったはずなのに、それすらも霊装はほんの一時  
的にだが、塗りつぶす。

まるでチャンスを与えるように。

なら、記号から構築しなおせ、オリジナルの術式を作り出せ。既存のものにこだわるな。

魔力の使い方と特有の配置を作れ。魔力を降ろしてくる時に使うものを利用しろ。

奈落はふと足を止め、近くにあった横幅30センチ瓦礫を能力を用いて持ち上げた。

これで止めをさせると思ったのだろう。

瓦礫を持ち上げ、振りかぶり倒れたままの肋に言う。

「これで終わりだ」

そして瓦礫に向かって斥力を発生させた。勢いよく瓦礫は肋のほうへと突き進んでいく。

音速ぐらいは出ているだろう。空気を切り裂く音が大きい。

ドゴオツ！！

轟音が炸裂したと同時に粉塵が舞い上がった。

アスファルトの破片が飛び散るさまを見る限り、励に直撃した。

そう思いつつ粉塵が晴れるのを奈落は待った。

原型のない死体。それがあらわになる、  
た。

はずだっ

「な、にが」

粉塵の晴れた先を見て、奈落は思わず声を漏らした。

死体どころではない。ふらふらとだが励は立っている。

先ほどの攻撃でついた傷は見当たらなかった。



しかし、奈落が驚いたのはそこではなかった。

「何なんだ！？それは？」

脇を守るようにある、直径50センチくらいのエメラルドグリーン  
の線で描かれた魔方陣。

何かを呼び出すようなものではなく、それ自体が強力な力を持つて  
いるようだった。

「 a d k h d j 邪 a h j k 魔 s v a j i o だ」

スツ、と右手を前に突き出したと思うと、小さな魔方陣が奈落の携  
帯端末を握っている手の手首を拘束するようにして出現した。

ブレスレットのように手首を拘束した魔法陣の影響か、バツ！と奈  
落は携帯端末を落とした。

何が起きているかもわからない。

携帯端末はアスファルトの地面に落下すると同時に碎け散った。それほど強度が高くなかったらしい。

「くッ!？」

励を警戒しながら後ずさりする奈落。

そんな奈落に対し、ようやく激痛から解放された励は魔法陣を消して拳をばきばきと鳴らし始めた。

「さーって、覚悟はいいか？」

奈落信哉!

## 第十三話：進化するチカラ（後書き）

番外編2はその内書こうかと検討しております。

## 第十四話：崩壊する目的

何が起きているか、奈落信哉には理解できなかった。

相手の神落励は魔術、という科学とは『別の法則』を使う相手だ。

だからある程度までなら、理解できなくても仕方がないと思う。だが、それでも理解できなかった。

魔術、とは記号や宗教的な象徴の配置などで決まるものはずだ。励は特殊らしいがそれは他と変わらない。

なら、強制的に脳をレベルアップによって出来たネットワークに繋ぎ、それを介して励の脳内へ信号を送りそうといった配置するために必要な機能を邪魔すればいい。

それで済むはず、だった。

(魔法陣！？何が起きている?)

静かに分析するが、それでもわからない。

彼の根本的な考え方自体が、科学からそれほど離れていないことに彼は気づけなかった。いや、学園都市にいる人間ならば誰も気づけないだろう。

常識、というものがかすかにでも残っていればそれだけで見方が、世界が変わる。

魔術、という異物を解析するのに科学に関する常識は捨てたはずだ  
と思っていた彼だったがそれは違った。

研究者である以上、科学に関する常識を捨てるのは不可能だ。

だが、あきらめるわけにはいかない。

(なら、この状況さえ、解析してしまえば!)

ここまで彼が手の込んだことをしたのには目的があつてこそだった。

そう簡単に諦めるようなことではないし、それに命すら彼はかけている。

だが、励も負けられないし、奈落の目的を達成させる気はない。

「お前の目的も、ここで終わりだ。投降しろ」

「……」

「目的が気になるけどそんなこと知らねえ。木山春生を利用したか  
つたみたいだがそれも無理だ。御坂が終わらせてくれる」

「……」

二人が立っている高速道路のしたのほうから、青白い電撃が見えた。

天を突かんかの勢いで飛び出す電撃と、木山の叫び声。

そして、静寂。決着がついたのだろう。

奈落は驚きを隠せずに二、三步ほど後ずさりした。

彼が動いたことにより足元の瓦礫がジャリジャリと音を立て、静寂

な空間に響き渡る。

「ハ、ハハ」

そこで出た奈落の反応に励は眉をひそめた。

「どうした？」

「ハハハ・・・君は何も知らない。この街がどういうものかを、そしてその君のようなオカルトが、超能力のようにただ能力として使えるものなのかということを」

「何が言いたい？」

「木山先生の動機も僕の動機も大切な人を助けたいから、ということに違いはない。それを君は叩き潰そうとしている」

「・・・大切な人、か」

確かに、二人とも協力しているわけではないにしろかなりの大事を起している。

なら、奈落たちの抱えているものはどういったものなのだ？

「僕はこの街だけでなく、オカルトというものも嫌いだ。神や救世主なんてほざいているのに、呪術なんてモノがある意味がわからないね」

「呪術……だと？」

予想外の言葉に驚きを隠せない励。

呪術、とやらの実態は知らないがいい響きではない。

「だがな！それで人を傷つけていい理由にはならない！！」

「何も知らない者の言葉だ！」

奈落はそっけなく聞く耳も持たずに言う。だが励はそれぐらいでは揺らがない。

拳を握り締めて奈落に正面から言い放つ。



「ならお前は！！それでもし大切な人を傷つけられても、ヘラヘラ笑ってるっていうのか！？」

違っただろ！！そうじゃあねえだろ！！そんな理由なんて、おまえ自身に対する言い訳だ！！」

「なら、どうしろというんだ！そんな感情論で！！僕を説得出来るとでも！？」

奈落の、矛先を見失った怒りが励に向けられる。無力な自分に対するもの。

奈落自身わかっていても彼は止めるすべすらもつわからない。

ぼろぼろになってしまっている励では、怒りをぶつけてくる奈落には対応できないかもしれない。

だが、励はボロボロの体など気にせずに言う。

「なら！抱え込むなよ！！お前の言う、別の法則ってやつは学園都

市の外のものなんだろうーが！！

結局、お前が外に怯えてここに留まっただから！！まだ助けられてねえんじゃあねえかよ！！」

「・・・」

確かに、と奈落は思った。自分はただ、別の法則の理解不明な点に怯えていたのかもしれない。

だが、所詮それも感情論に過ぎない。

もし、別の法則をもった集団に会ったにしても、学園都市とは敵対する場所だ。

まず相手にされないだろうし、下手をすれば攻撃されるだろう。

彼には、親がいなかった。

学園都市に捨てられ、育った者だ。

ゆえに家族は一人しかいない。たった一人の少女

その

命が危機にさらされている。

そんな状況でそんな賭けに出る訳にはいかない。

「……ちつと」

と、そこで奈落の雰囲気再び変わった。

彼の脳内に浮かんだのは、ベッドで目を覚まさず  
に苦しそうにもがく幼い少女。

相手が理解出来ない存在でも、どうでもいい。

何も知らずに無邪気に笑っていられる学生一人一人が許せない。

その笑顔の一つ一つが残酷なものに見えてしまう。

それを守るつととする者がさらに許せない。

魔術とかレベルアップとか代理演算なんて、もうどうでもいい。

もはや、奈落頭の中には励を叩き潰すことしかなかった。

「君は何も知らなくてもいいさ。無様にここで這いずり回るんだからさあ！！」

ドゴオツ！！と奈落の足元の道路が弾けとんだ。奈落が足に能力を発動したのだろう。

高速かつ超低空飛行で励に向かって突っ込む奈落。

右手を伸ばし、己の能力を使用するために励に迫る。

( いいぜ、お前が何に苦しんで )

対して、励もゆっくりと足を前に出し、一歩一歩近づく。

高速で迫る奈落を見据えて、だ。

「潰れるおおおおおおおおおお！！」

（何を守りたいかは知らねえが！！）

二人の間の距離が30センチほどまで縮まった。

「死ね！！」

バツ！！と奈落は右手で引力を発生させた。

ぐぐぐツ、と励の体が胸倉を中心にして奈落に引き寄せられる。

「ぐツ！？」

若干のけぞる体勢から体勢を立て直す励だが、奈落は左手をすでに振り上げていた。

斥力を発生させた拳が振り下ろされる。

（殺<sup>と</sup>った！！）

回避不可能な攻撃に励は動じなかった。

右手で拳を受け止めるようにすると、掌の中に小さな半径15、6センチほどのエメラルドグリーンの線で描かれた魔法陣を出現させた。

（　　そんな理由は認めねえ！！）

ゴキイツ！！！！とにぶい音が炸裂する。

魔法陣によって、奈落の拳が受け止められた音だった。

エメラルドグリーンの円が拳を拒絶している。何か理解不能な力が働いているのだが、奈落にはわからない。

「なっ、に？」

斥力によって吹っ飛ばはずだった励の体が吹き飛ばないことに驚く奈落の手を振り払い右手が自由になる。

「俺じゃあ確かに失敗するかもしれない。酷い嘘になるかもしれない。だけどな」

奈落の立場なら、自分も同じことをしたかもしれない。だからこそ先ほどまでのことが言えたのだ

誰かを守りたい、救いたい、という意味は悪いことではないし、なくなっただけいいものではない。

励は動揺する奈落の顔面に向かって拳を構える。

ただ、救うことに躍起になり、奪う側に回ってしまった人間。

奪われることのつらさを知るものがそっち側に回っていいはずがない。

感情に身を任せ、拳を振るう。

「でも、今は信じてくれ！！お前の大切な人は俺が助けてやる！！だから眠ってる！」

このクソ野郎ッ！！」

轟音が響き渡った。

空中で体勢を崩し、殴り飛ばされた奈落はアスファルトの道路を5、6メートル転がった。

何度も背中を地面に打ち付けて道路の上で大の字になって倒れている奈落からは、もう起き上がる気配はなかった。

彼に背を向け、御坂のほうに向かう。

(・・・さて、御坂はどうなった？)

と、そこで突如ゴォッ！！と突風が吹き抜けた。



同時にしてくるのは悲鳴にも聞こえる、得体のしれないものの泣き声。

木山に作り出せるようなものとは思えなかった。

おそらく、イレギュラーなことがおきてしまったのだろう。

彼の、胸のざわめきが一層強くなる。

(クソツたれ・・・)

静かに舌打ちして彼は足を音のしたほうに進める。

この事件に関わった全員を助けるために彼はもう一つの戦場に足を運ぶ。

「 h u i a g g b j k a d s u f ギ イ ヤ ア ア ア a i y d f u k k

jjp0アアアアア!」

(何・・・?アレ・・・)

第三位の超電磁砲レールガンこと御坂美琴は立ち尽くしていた。

新たに出現したイレギュラーたる目の前の化け物の登場に思考がまだ追いついていないからだ。

その化け物はまるで胎児のようだった。

泣き叫ぶ姿からは何か切ないものを感じる。

(一体、どうなってんのよ・・・?)

とは言ってもわからないことはわからないままだ。

と、そりぞ

「ljaiivhiaアアア!」

バキィッ！！という音とともに空中に不意に氷の塊が数個出現した。

先端は尖っていて明らかに攻撃的だ。

「うえッ！？ちよ

！！」

御坂は目を丸めて驚き、背中を化け物に向けて走り出そうとした。

それと同時に、氷の塊がいつせいに御坂に向かって降り注ぐ。

「うええええええええ！？」

ドドドドドッ！！と氷の塊が御坂を襲う。

御坂も氷を避けながら距離をとろうとしていたが、そこでふと前方に見慣れた人物がいることに気づいた。

「え！？う、初春さん！？」

不意に足を止めてしまった御坂に、氷の塊は待ってくれない。

(まず!?)

この距離はまずい。そう御坂が思った瞬間だった。

「　　　　　つたく!!面倒だ!!」

突如飛び降りてきたのか上空から現れた励が右手を前に突き出し、

半径30センチほどのエメラルドグリーンの輝きを放つ魔法陣で氷を防いだ。

やはり、と励は確信した。目の前の化け物は少なからずだが自分と関係しているようだ。

御坂が後ろで騒いでいるが、励は気に留めずに問う。

「何!?!あの不出来な怪獣はあ!?!」

「　　　　　うっさいわね!私だって知らないわよ!!ってというか人の話を

「

「木山は！？こんなやつどう対処していいかわかんねえぞ！？」

「アンタね！！静かにしなさいって言うてんのよ！！」

「お前もな！！」

ワーワーギヤーギヤーと騒ぐ二人に鉄筋コンクリート柱の影から苦笑いを浮かべることしか出来ない初春。

そんな三人を無視して、苦しそうに化け物は泣き叫ぶ。

「j i h x o ギヤア i h v u s d y v h s アア！！」

「「って黙れ！！」」

励と御坂は叫びながら振り返るが化け物は二人に背を向けて上の高速道路のほうに行った。

？と首を傾げる二人。どうやらあの胎児のような化け物は自分たち

を狙っていたわけではないらしい。

「おいおい、アンチスキル警備員のほうに行つたぞ!？」

「見境なく攻撃してるの?」

高速道路から大量の銃弾が化け物に撃ち込まれているが、化け物は気に留めない。

それどころか銃弾で抉り取られた部分から新しい手が生えたり、体が大きくなったりと

凄まじい再生力を見せ付けてくる。銃弾の飛び交う場所を見つづ励はため息をつく

「なあ、御坂・・・アレ、逆効果だろ・・・」

「じゃあアンタはどうしろっていつのよ?」

「説得」

「・・・アンタに聞いた私が馬鹿だったわ・・・」

と、アホみたいなやりとりをしているがそれどころではない。

奈落にしても木山にしても目的を達成する術は失われたはずだ。

しかも高速道路の反対側・・・向こう側には原子力実験場がある。

つまり目の前化け物がもたらすものはただ一つ。圧倒的な破壊。

（下手にあの化け物の攻撃が向こうのほうに飛んでいったら・・・  
学園都市自体危ない！）

このままでは奈落との一方的な約束も果たすことが出来なくなる。

）くそッどつすれば

（

対処の仕方がわからない。このままでは、と最悪な状況を励が想像したその時。。。

「は、はははは・・・すごいな・・・」

ヨロヨロと鉄筋コンクリートの壁に寄りかかる、ボロボロの  
木山春生を見つけた。





## 第十五話：AIMバースト

「思念の、塊？」

「名づけるなら、そうだな幻想猛獣AIMバーストとでも呼ぼうか……」

AIMバースト。木山春生曰く、あの化け物は二万人近くのレベルアップ被害者の思念の塊らしい。

鉄筋コンクリートに背を預けたままの彼女はやけになったような笑みを浮かべた。目的が果たせなくなったとなると、どうやらどうでもよくなっただらしい。

「それで？どうすればあの化け物を止められるの？」

御坂美琴の問いに木山は目を見ずに答える。

「私が今それを言った所で、君達は信じないだろうな……」

どう言えはいいかわからない。かすかに下唇を噛んで頭を回転させようとした神落励だったがすぐにその不安は打ち消された。

初春飾利。

木山に人質にされていたはずの彼女が木山の前で左手首を差し出すようにして見せたからだ。

「信じます!」

力強く、はっきりと彼女はそう言い放った。

何を、かは決まっていた。それほど彼女の思いは強かった。

「私の手錠

木山先生がはずしてくれましたよ

ね?」

「……ただの気まぐれさ。……まさかそんなことで私を信用する?」

吐き捨てるように言う木山に対し、初春は木山の正面に立つ。

ジャッジメント  
風紀委員としてでもなく、生徒としてでなく、ただ一人の人間、初春飾利として。

「 それに」

( ! )

声に明るさが含まれていた。

ほんの少し微笑みつつ、初春は言う。

「子供達を助けるために、木山先生が嘘をつくはずがありません」

( っ! ! )

「 信じます」

( っ! ! ! ! ! ! ! ! )

初春の言葉に、何の疑いもない純粹な笑顔に、かつて自分の生徒の一人、カチューシャをしていた少女を思い出す木山。

その少女も、確か実験前にこう告げていた。

『 先生のこと、信じてるもん 』

「ツツ!!?」

目を丸めて驚く木山に初春もキョトンとした顔になる。

そこに御坂が気になったように問う。

「聞いてたの?」

無言でうなづく初春。しかし肋には三人の会話の内容が断片的にしかわからない。

子供達?・・・複数なのか?と首を傾げる肋を置いて、木山は少し考える仕草をした後

「 全く 」

どこか呆れたように。

どこか懐かしそうに。

どこかうれしそうに。

つぶやくように言う。

「AIMバーストは、レベルアップのネットワークが生み出した怪物だ。ネットワークを破壊すれば止められるかもしれない」

「それなら！」

思い出したように初春がスカートのポケットから何やら四角い小さな物体を取り出した。

何かのデータが入ったカードなのだろうことは励でも理解できた。

「レベルアップの治療プログラム！」

「……試してみる価値はあるはずだ」

木山の一言に初春はうれしそうに顔を上げた。

やることは決まった。

「「なら」「」

御坂AIMバーストを見ながら、励は指をパキパキ鳴らしながら言う。

「「アイツは（私）俺が（何とかする）食い止めるから、その間に初春は警備員さんの所アンチスキルに！」

と二人はすぐに向き合ってにらみ合っつ。

「「っておい・・・かぶせんな」「」

(・・・)うう時の神落さんと御坂さんって、以外と息ぴったりなんですよね・・・あ、あははは・・・)

苦笑いする初春の後ろから、木山は一步前に出て二人の所にきた。

どこか険しいその表情のまま、彼女は言う。

「その前に少し、やるべきことがあるようだ」

銃弾が飛び交う中、触手のようなもので警備員を次々と殴り飛ばし、  
圧倒していくAIMバースト。アンチスキル

そんな中、奈落によってボロボロにされたにもかかわらず、AIM  
バーストに立ち向かっていく警備員。

しかし、力の差は歴然だ。

その部隊の黄泉川愛穂はそれでも武器を手に取り続けた。

鉛弾をAIMバーストにぶち込み、攻撃の嵐をかいくぐる。

そして相手の手足をもぎ取り、頭に銃弾をぶちこむ。

だが、

(くッ！？再生が早すぎるじゃん！！)

どこを攻撃しても、どれだけ攻撃してもAIMバーストはその分大きくなっていくだけである。

(どっすればいいじゃんよ！！)

と、その時、死角からグオッ！と空気を強引に切り裂く音が聞こえた。

(くッそ！？)

「隊長！？」



後ろから鉄装綴が叫んでいる声が聞こえるが、体は思ったようには動かない。

凄まじい一撃がくることをわかっていつつ動かない体を前に黄泉川は静かに心の中で舌打ちした。

このままでは何も守れないではないか、と。

「オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！」

ドゴッ！と鈍い音が響き渡った。

しかし、いつまでたっても自分に衝撃がこない。

おそろおそろ目を開けるとそこには、黒い何かがあった。

「ッ！！！？」

いや違う、人だ。

漆黒と称するにふさわしい真つ黒な、三対に生えた翼を背中に生やした少年が攻撃を翼で弾いていたのだ。

「なッ！？お前は！！あの時のサボリ症の風紀委員ジャッジメントじゃん！！！」

「・・・助けなきゃよかった」

黄泉川の言葉に思わず頭に手を当てる励。

とそこで向こうのほうから鉄装綴の叫び声が聞こえてきた。

どうやら御坂が磁力を使って助けた所のようなので心配はしなかった。

ここは高速道路の上。

亀裂が入り、所々めくれ上がり、無法地帯のような光景になっているが、頑丈な作りになっているらしく、

足元はしっかりとっていて崩壊する気配はない。

御坂は磁力で、励は翼を使って上ってきた。

黄泉川の横に降り立った励は真剣な面持ちで振り返ると

「俺の可愛い後輩がレベルアップ治療プログラムを警備員の車のほうにあるコンピュータに読み込ませるために動いている。

だけど、読み込ませた所でただの音楽データに過ぎない。だからアンタ達の協力が必要だ」

そう言われた黄泉川は向こう側にある警備員の護送車を見た。

再び爆風の余波でも受けたのか、横倒れになっていたはずの警備員の護送車がいつでも走れそうな状態になっている。

しかしほとんどがその青い表面が完全に破壊されていて中はとても

じゃあないが無事そうではなかった。

唯一無事そうなのが一台だけ、そちらにあるが、高速道路の崩れている部分によって完全に分断されてしまっている。

一度高速道路から地面に降りて、また階段を使用しなければそちらにはいけなかった。

そう思い、高速道路に上がるための階段を見て、目を丸めた。

そちらには、頭に花飾りをつけた中学生くらいの少女が走っているのが見えた。

腕に風紀委員の腕章を付けているが、とくに強大な能力者でないことは黄泉川も知っていた。

心配そうな顔になる黄泉川を見て励は背中の中黒な翼を羽ばたかせて言う。

「面倒だけど、俺はあの化け物とやりあわなくちゃならないんでな。後は任せた」

---

---

AIMバーストは何かに惹かれるように原子力実験場に向かっていった。

その思念の中で、一つの『意思』の一部分となっている佐天涙子は、その深淵に触れる

一つは嫉み。

何故、どれだけ努力してもレベルが上がらないという、レベルの低い能力者達の叫び。

一つは絶望。

あこがれた、能力者というものに、

どれだけ努力してもなれずに何もかもに絶望したくなった無能力者達の叫び。  
レベル。

一つは逃避。

何もかも能力で決める学園都市。それが原因で何もかも放り出した  
いという叫び。

そして、  
怨みと怒り。

『能力開発が才能というもので全て決められるという、これほど残酷なものならば全て壊してしまえ』という衝動。

そんな中に沈みながら、ふと佐天は思う。

ああ、そうなんだ、と。

いくら綺麗ごとを並べた所で能力が上がるわけではないし、逆に言えば悪いやつでも能力が高いやつはたくさんいる。

少し心が軽くなった気がした。

同じ辛さを知る者が、ここにはたくさんいる。

この暗い深淵の中ならば、何かにとらわれる事もない。

突如、ゴツ！！という音がしたかと思うと凄まじい衝撃が深淵そのものを揺るがした。

「何で俺だけ昏睡状態にならねえんだよ・・・根性がないからか？  
　　たく、あの根性ゴリラみたいなこと言わせんじやあねえよ」

根性ゴリラとわけのわからない言葉だったが、やけに聞き覚えのある声だった。

佐天だけではなかった。他の複数の思念が、彼を知っているようだった。

佐天には思念が見えるわけではないので、どんな人物が彼を知っているのかまでは見えなかったが、それでも反応は大きかった。

神落励。

化け物の目を通してだが、はっきりと見えた。

高速道路から原子力実験場まではアスファルトで整備されているわけでもないし、草が生い茂っているわけでもない。

つまり、何も無い。

彼は背中から三対の漆黒の翼を背中から生やしているが、とくに異常はみあたらない。

何か攻撃されたことぐらいしかわからなかった。

行き場を失った怒りの矛先が彼に向けられる。

彼は元々ただの無能力者らしいことは結構有名だった。

しかし、誰よりも無能力者レベル0を知っていながら、誰よりも無能力者ではなくなったものでもある。

つまり、裏切られたような、ドロドロとした感情が深淵の中で生ま



れる。

「ihuvギbsdギヤアアアアshdvuiaaggbd  
iuアアアアアアアア!!!」

バキバキバキバキッ!!

一瞬で氷の塊が大量に空中に現れた。

先ほど御坂に向けたものよりも、明らかに殺意がこもっていた。

それが励に向けて一斉に射出される。

数は数え切れなかった。

しかし励はその黒い翼を勢いよく羽ばたかせた。

ただ、力強く羽ばたいただけにみえたが、それは違う。

直後烈風が炸裂し、氷の塊を全て粉々に砕いた。

さらに烈風はAIMバーストに直撃し、巨大なAIMバーストの体のバランスを大きく傾ける。

これが彼の真の実力。

所詮AIMバーストなど、似たような存在<sup>……</sup>だけで格下の存在に過ぎない。

励が常に真の実力を出せるのならば彼はとっくに別の存在へと変わってしまっていただろう。

だが、今本当の力が出せることには、

やはりあのAIMバーストによって共鳴か何か<sup>……</sup>が引き起こされているのかもしれない。

(ぐツ!?!?……予想以上にさっきの奈落との戦いでダメージが残ってる……)

激痛を感じ、少し励の体の重心が傾いた瞬間、強引にAIMバース

トは体勢を立て直し、彼に突っ込んだ。

「k bギn j mギギギl u i i i i i i i i i i a f dアアアアアア  
! !」

考えているのか、本能的なものかはわからない。

(チッ! !)

一瞬反応が遅れた励にA I Mバーストの渾身のタックルが迫る。

そこに、

「全く、一人で勝手に飛び出しといて、無茶してんじゃないわよ」

バチバチバチバチィッ! !と青白い電撃がA I Mバーストの頭を吹き飛ばした。

雷とも呼べる高圧電流をまともに喰らったA I Mバーストは急ブレ  
ーキをかけてタックルを中止するとすぐに傷を再生させる。

突如、励はこめかみに痛みを感じた。

ではなく、御坂に殴られたのだ。

「~~~~~ツッ!?!?~~~~ツッ!?!」

涙目を浮かべる励の前に御坂が立ってた。

磁力が何かで飛んできたのだろう。

「私がいなかったら死んでたわよ、アンタ」

前髪を払いながら青白い火花を散らす御坂に励は青筋を立てながら立ち上がる。

「うるせえよ。すぐにチャラにしてやる」

五人で笑っていた時のことを幻想と言わせない。

あの時、佐天の心の底がどういう状態だったのか想像もつかないが、  
今度は違う。

全員が心の底から笑えるようにするために。

AIMバーストを前に、励と御坂。

もっとも怒りの矛先となる二人の少年少女はAIMバーストに立ち  
向かう。



第十五話：AIMバースト（後書き）

うーん、この作品を読んでくださっている方々は

これ以上オリキャラが増えることに賛成でしょうか？

出来れば感想を伺いたいです。よろしくお願いします。

ちなみに、今の励の黒い翼は垣根帝督のやつを黒くそめたやつってイメージでよろしく願います。

第十六話：深淵を打ち砕け！（前書き）

今回、少々読みづらい上に、多いですが読んでいただければ幸いです。



## 第十六話：深淵を打ち砕け！

『あのAIMバーストは、予想以上の人数の思念を取り込んだために、思念による一種の防壁のようなものを築き上げている・・・』

やるべきことがあるようだ

。

そう言った後に木山春生が御坂美琴と神落励の二人に言ったことがそれだった。

レベルアップの被害者は本来、木山の予定では一人ほどの予定だったらしい。

しかし奈落の暗躍により人数が増、さらには二人全員の思念が不自然に干渉し合い、あらゆるものを拒絶している状態らしい。

物理的な攻撃をしても再生されることはわかっているが、『拒絶』の意味が理解できなかった。

すぐに励が意味を尋ねるやいなや、木山は少しうつむくと言った。

『あのままでは、AIMバーストは治療プログラムをネットワーク

を介して拒絶するだろうな。

そうなれば、プログラムは意味をもたない。どうにかしてあの怪物の中の思念に接触して、一瞬だけでもそれを阻止する必要がある・

『

・・・どうにかして・・・か』

励は一瞬黙るが、再び顔を上げると木山と御坂に向かって

『

一つだけ、考えがある』



御坂と励はA I Mバースト相手に戦っていた。

何も無いような平原ともいえる場所は、もはや異空間と呼ぶにふさわしかった。

激闘は、嵐のようだった。

何か光を放つ球体が空中に現れ、高速で地面に叩きつけられそうになると、今度は砂鉄の塊が地面から生き物のような動きで出現する。

砂鉄の塊はそのまま空中を駆け巡り、光を放つ球体に衝突すると同時に、光を放つ球体が爆発を巻き起こす。

凄まじい音とともに空気が切り裂かれ、爆風があたりを飲み込む。

しかしその中から黒い翼が現れたかと思うと、鋭い刃物のようにAIMバーストをスタスタに切り裂く。

しかし、AIMバーストはケロリとした顔で体を再生させ、傷を治すと大量の手を出現させる。

赤子のような手なのだが、見ているだけで息がつまりそうになるほど不気味だ。

「u i b v y ギギギギギッ！！ n f r」

ゴオッ！！と大量の手が迫る。

「はあああああああ！！」

御坂の雄たけびのような声とともに青白い電撃が飛び、大量の手を蹴散らしていく。

バチバチバチバチィッ！！という激しい音が数秒間続いた。

音がなり終わるとともにAIMバーストの手が凄まじい速度で再生を始めた。

ギョツ、と驚く御坂を置いて、彼女の後ろのほうから烈風が炸裂する。

ゴツ！と鈍い音が鳴り響くと同時にAIMバーストの肩の部分あたりが吹き飛んだ。

中から肉の破片のようなものが出てくるがそれは本物ではない。

「・・・チツ！すぐに再生しやがる」

励は舌打ちしつつ、念動力による攻撃を真横に飛んでかわす。

ポコオツ！！地面が陥没し、その威力を物語る。

かわした励はそれに目を丸めて御坂のいるほうに駆け寄った。

御坂は泥だらけの靴についた泥を落としてつつ、好戦的な笑みを浮かべると

「やるわね・・・コイツ・・・」

「……ま、さかと……は思う、が……楽しんで……る？」

途切れ途切れに続く励の声に御坂は疑問を感じた。

息切れにはおかしい。

今にも倒れそうな、病人の声を聞いているようだと感じた御坂はすぐに横を向いた。

すると

「ちょッ！？ちょっと！！アンタどうしたの！！！！？」

「……だいじょ……うぶだ……心……配、ねえ」

嫌な汗が大量に出ていて、目も焦点があっていない励がいた。

肩ひざを地面につけて倒れるのをこらえているらしい。

何か重い病気で持っていてそんな病人のようになってる肋に、御坂は肩を貸して立ち上がらせる。

その間にもAIMバーストの攻撃を電撃でいなす。

「ったく!!そんな状態でもアンタ!!言っていたこと実行する気!?!」

「これは、俺自身の・・・、多分反動か、何か・・・」

必死に続ける肋だが、言葉はあいかわらず途切れ途切れで苦しそうだ。

御坂が不安になったのは別のことだった。

肋に肩を貸して初めてわかった。異様なくらい肋はぐったりとしていた。

もう自分の体を支えることもままならないのだろう。



彼の本気、というのは相当強大な力だ。

人ではないものから強引に魔力だけを降ろすという形式上、本気を  
出せば相当な負荷が彼自身にかかることになる。

今までの彼の術式の状態があいまいであったために、力の出力、反  
動、ともに激減していた。

しかし、よくもわるくも彼の術式の状態が安定してしまった今、い  
つでも、ではないが本来の力が発揮できる。

384

反動も相当なモノの上、彼はけが人でもあった。

つまり、限界がきたということだ。

御坂は不安げな顔でたずねる。しかし励は

「・・・それでもだ。それ以外に、方・・・法はない・・・だろ？」

意識が朦朧としているにも関わらず、力強く言う。

御坂も御坂で負けずに言い返す。

「でもッ！アンタが死ぬかもしれないのよ？それに、そんな状態で何が出来るの！？もっと別の方法を」

「  
黙れ」

しかし、死ぬ覚悟を決めた人間に、彼女はこれ以上言及できなくなつた。

彼女も覚悟くらいは決めていたはずだ。

だが、励のような本当の意味での死ぬ覚悟を決めているわけではない。  
い。

励自身も、覚悟などということを意識しているかは知らないがそれ

でも御坂はひくわけにはいかなかった。

万が一、という確立ではない。成功する確証など全くない。

「でもッ!..!」

「  
黙れって、言っただろ」

励は体を強引に立たせて御坂を突き飛ばし、頭を抑えながらAIMバーストに向き直った。

「さ、て……と……一か八かだ」

エメラルドグリーンの輝きを放つ魔法陣が彼の足元に現れた。

それを見た御坂が叫ぶが、もう励には届いていなかった。

レベルアップによる脳のネットワークに、脳が繋がっていないながらも唯一昏睡状態に陥っていない励。

それを利用して、彼自身の精神を魔術で固定し、ネットワークに直接干渉する。

それが彼の策だった。

しかしその策は下手すれば精神自体の存在が破壊され、死ぬ可能性もある。

だが、励の懸念はそこにはなかった。

レベルアップのネットワークを介して、ならば

電氣的なネットワークを形成し、脳のネットワークに接続すれば御坂でも可能なことだった。

御坂がこれに気づけば自分がすると言い出すだろう。

場合によっては強引に行使するかもしれない。

無茶をするのは俺一人がいい。

無尽蔵に湧き出る負の感情の底に、深淵の中に彼は突き進む。



(あの馬鹿ッ!!あんな状態でどうしようっていらっのよ!!)

泥まみれの擦り傷だらけになりながらも御坂はAIMバーストを一人喰い止めんとしていた。

励のことが心配で仕方がないが、どうにも出来ない。

それにAIMバーストは待つてくれない。

御坂は電撃と磁力によって集めた砂鉄、磁力による移動などと超能力者としての実力でほぼ互角の戦いを繰り広げていたが……。

(なんて再生速度よ!?これじゃあ、ラチがあかない!!)

ゴオツ!と複数の光の塊が御坂を襲つ。

砂鉄が生き物のように宙を舞い、光の塊を防ぐ。

ポゴオンツ!!と不自然な音とともに爆風が巻き散る。

威力からして、おそろくまともに喰らえば体はグチャグチャにされてもおかしくないはずだ。



しかし、この程度では御坂は怯まないし、怖気づくわけにはいかない。

(私が！コイツを喰い止める！！いくら再生されようと！時間は稼いでみせる！！)

だから！絶対に成功させなさい！！)

AIMバーストに向かって砂鉄の剣を振るいながらにらみつける。

「絶対に！！何としてでも！！ここは通さない！！！！」

「uiddbugagihddjギギヤアアアアアアアfgsuia  
アアアツツ！！」

( そつ信じてる！！ )



どちらが前かもわからない深淵の中を、  
励の意識は彷徨っていた。

足場があるようには見えないのにも  
かかわらず、自分が立っている

のが不思議でしかたなかった。

「こゝこは？」

自分の声がやけに響いて聞こえる。

「思念の渦の中つてとこか・・・

っ！！」

そこで励はおかしな感覚に気がついた。

とりあえずどうにかしなければと思うのにも関わらず、体が動かない。

精神自体だけで今の励は存在しているようなものだから、思うだけで行動出来るはずだった。

しかし、フワフワと深淵を漂うわけでもなく、全身が押さえつけられているように動けない。

それだけではない。



ノイズが頭の中を無茶苦茶にかき回す。

ノイズが一定の感覚で鳴り止むほんの数秒間、その間に聞こえるレベルアップ！使用者の音がさらに励の精神を破壊へ誘導する。

「ッ！……ク……ソ……ッ……たれがッ！！」

意識を失えば死。

強引に意識をとどめながら顔を上げた。

正面にいた人物に、励は目を丸めて驚く。

「さ……佐天？」

黒いロングの髪に、頭に白い花の髪飾り。私服姿だが、見間違うはずがない。

佐天涙子。

おそらく、この場所は、励という害敵をつぶそうとする防衛機能もあるのかもしれない。

もっとも励の精神を破壊しやすい存在として、現出されたのだろう。

『どうして、来たんですか？　　　　　私は、私は！・・・ここに居たいんです。』

違う。佐天じゃあない。そう思ったかった。

声をかけるだけ、自分も深淵に取り込まれていく。

耳を傾げるだけで、底なし沼にはまっっていく。

『神落さんには、結局わからない。皆がどれほど貴方を羨ましがったかを。偶然でもレベル以上の力を手に入れた貴方には。』

どうして、私たちが努力しても報われないんですか？』

「・・・」

『助けられているのに御坂さんや白井さんを見ててたまに恨めしくなって、そんな自分が嫌で・・・それでもあこがれてしまっ』

「・・・・・・・・」

『結局・・・どれだけ頑張っても、何にも変わりませんでした』

しかし、どうにかして思念自体に干渉しなければ意味がない。

『憧れつてもものを持ち続けても、必死に努力しても、結局最後に待っているのは挫折だけ  
ならッ！』

声をかければどうなるかなど、わかっているはずだった。

「なら、諦めればいい、ってか？・・・ふざけんなよ」

『！』

ぞぞぞぞぞぞぞぞぞぞッ！



得体のしれない量の負の感情が、彼の中に入ってくる。

能力に関してだけではない。

今までのトラウマなどの嫌な思いでも全て流れ込んでくる。

憎い許せない助けて殺す何故？アイツだけ？わからないどうして挫  
折嫌悪偶然羨ましい

絶望、渴望、才能、努力、無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄  
無駄無駄無駄無駄無駄無駄

どうして？わからないわからないわからないわからないわからない  
わからないわからない

k i c f h 欲しい b u i d h f b n s u i g h x c f y u b v g  
s d i j n h d i u o h s 能力ガ i l m o p b v i u h c f u i b  
h d f u h b . . .

「 つぐツ!!? 」

これだけの感情が、この学園都市に潜んでいたのだ。

二万人以上もの負の思念に、普通の人間が耐えられるはずがない。

今この状況下、間違いなく励は一般人と大差ない。

精神など、年齢とともに成長していくもので、鍛えたところで二万人の負の感情は受け止めきれない。

呑まれる、はずだった。

「わからないわけじゃあない。俺も風紀委員少シヤンジメントし前までは、馬鹿やってた時期もあったさ。

散々人に迷惑かけて、それをうけとめようともしせずに逃げるように喧嘩ばかりした。理由に無能力者ってあげてな・・・」

どこか懐かしそうに励はつぶやいた。目を細めて佐天を見る。

あの弱虫の自分に向かって言った、同じ無能力者の言葉を思い出す。

お前は、それでいいのかよ？無能力者だから、なんて言い訳に過ぎないっておまえ自身気づいてるだろ！？

逃げるなよ！！

この街は確かに能力だけかもしれない！！だけどな！！ちゃんと見渡せよ！！それで気づくものがあるはずだ！！

ああ、だから風紀委員に入った。

道がないなら切り開けばいい。進めないなら乗り越えればいい。挫折するなら立ち直ればいい。

苦しいのなら叫べばいい。怒りたかったら怒ればいい。

自分に都合の悪いことなんてたくさんある。『生きる』ってそういうことじゃあねえのか？

「・・・ハッ」

完全に彼の精神が破壊されかかったところで、彼は笑った。

何を難しいことばかり考えてやがんだ、と呟いた後、歯を食いしばる。

たった一人の人間が、二万人の思念を振り払うことなどできはしない。

無理にすれば、それこそ命を落とす危険性だってある。

だからどうした？

ぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐッ！！と彼の腕や足に力がこもる。

キギキギキギキギキギキギキギキギキギッ！！メシメシバキィッ！！などと鈍い音が聞こえるが知ったことではない。

「  
そうだよな」

力強く、二万もの思念を背負いながら彼は足を進める。

風紀委員になって、この街の治安を守るために、人を助けるために動き出して、ようやく周りを見渡せた。

気づくのが遅かったとすら、今では思える。

それを、この深淵の中、意識が薄れ掛けていながらも彼は優しく囁くように言った。

「 本当に大切な物なら、いつも傍にあっただろ？」

『…！』

佐天だけではない。

空間そのものが、少しぶれた気がした。

励の拘束が緩やかに解かれていく。

まるで握っていたものから自然と手を離してしまうような感覚に近かった。

励はかすかに笑みを浮かべると体から力を抜いた。

「全く、手間かけさせやがって

ちとちと帰るんぜ。もう待

ちくたびれたんだ」

バギンツッ！！！！と何かが壊れる音がする。

この何もない空間に白い亀裂が入り始めた。何かが起きたのは明白だった。

幻想が、音を立てて崩れ始めた。







（この音！もしかしてレベルアップ治療プログラム！？しかも効いている！！あの馬鹿と初春さん、成功したのね！？）

ここは原子力実験場の敷地内。

AIMバーストの手に捕まった御坂は同時にレベルアップ治療プログラムの音を聞いた。

最初は理解出来ずに首を傾げていたが、AIMバーストの追撃の腕攻撃を電撃で腕ごと吹き飛ばし、再生しないことを確認する。

励の賭けによって、AIMバーストによるレベルアップ治療プログラムに対する迎撃機能のようなものを破壊。

さらに初春飾利による治療プログラムの使用により、レベルアップ

ーによる脳のネットワークの破壊に成功。

よってAIMバーストの再生能力が失われた。

つまり、攻撃が通じるようになったわけだ。

御坂は安心したのか、好戦的な笑みを浮かべると捕まったの状態にも関わらず、額から青白い火花を散らした。

AIMバーストがそれに気づくはずもない。

「残念だったわね。ここでゲームオーバーよ!!!」

バチバチバチバチィッ!!!と凄まじい電撃が炸裂した。

表面の肌色が赤黒く焦げたAIMバーストはそのまま静かにその場に沈んだ。

ズーンッ!!!という音とともに焦げくさい臭いが鼻をつつく。

これで終わったそう思い御坂は息を漏らした。

すると

「気を抜くな！！まだ終わっていないッ！！」

そちらを見るといつの間ここにきたのかわからない木山が立っていた。

彼女は御坂との交戦でダメージを追っているにも関わらず、「ここまで歩いてきたようだ。」

「な、何でここに！？」

ッ！

ズズズズズッ、と少し地面が揺れた気がした。

気のせいではない、そう確信した御坂は勢いよく振り返る。

「まだ動けるの！？」

倒したはずのAIMバーストがその大きい身を起こしていたのだった。

ありえない、と御坂は呟く。

皮膚のような部分が全て赤黒くそまるレベルの電撃を喰らったはずなのに、立てるということが理解出来なかった。

その意図を察してか、木山は言う。

「あれはAIM拡散力場が生んだ思念の塊！普通の生物の常識は通用しない！！」

「そんな！じゃあどうすればいいっていうのよ！？」

「核だ」

「！？」

「力場を固定させている核のようだが、どこかにあるはずだ」

木山の言葉を受けた御坂はそこで目を丸めて驚いた。

木山の言っていることに、ではない。

その木山の後ろから、体を引きずるようにして歩いてきた励に、だ。

見る限り、無事でないことは明確だ。だから大丈夫？などと安易な言葉はかけられないし、どう言葉をかけていいかわからない。

励は木山を追い抜き、御坂を見ると

「  
腹部だ」

「？」

「あの化け物のど真ん中に、核がある。シンプルでいいじゃあねえか」

「……」

そこで、静かだったはずのAIMバーストのほうから、声が聞こえた。

『なんだかなあ……』

やけに聞き覚えのある声だった。御坂は目を丸めて驚く。

「佐天、……さん？」

『無能力者<sup>レベル0</sup>って欠陥品……』

佐天だけではない。今まで積もっていたレベルアップー使用者たちの感情が吐き出される。

『だと思ってやがる！』

『許せない！』

『どれだけ努力しても……』

『貴方にはわからないでしょうけど……』

『その期待が、重いときもあるんですよ……』

「・・・」

やけにクリアに聞こえる声に、どこか罪悪感を感じる御坂。

少し目を細めて御坂は下を向いた。

そう、相手は二万人もの思念の塊なのだ。御坂は今まで無意識のうち  
に攻撃を戸惑っていた。

「御坂！」

励は静かに笑うと何かを御坂に投げ渡した。軽くパスするような、  
そんな気軽そうな投げ方だった。

「？」

御坂はそれを受け取ると掌の中のそれを見る。

いつも御坂が超電磁砲レールガンに使っている、ゲームセンターのコインだった。

おそらく戦闘中に御坂が落とした物だろう。

「今は、残留思念みたいなモンが暴走してるだけだ。気にすることなんかねえよ」

「・・・それでもさ、こんな事態を招いた理由って、・・・私たちが能力者でしょ？」

御坂は何か思いつめるように言った。

一度御坂は佐天の心境に気づける機会があったのだ。

しかし、気づけなかった。

「だからこそだよ」



励ははっきりとそう言い切った。

もう励に戦えるだけの力は残っていない。

翼だって消えうせた。

それでも、断言できる。

「アイツらは、もう目覚めたがってる。だから、最後の後一押しは、お前がしてやれ」

「・・・全く」

御坂は呆れた、といった感じのため息をついた。

それと同時に、勢いよくAIMバーストの腕が数本、御坂に向かって勢いよく振るわれる。

それを見た木山が、AIMバーストに御坂に向かって思わず声を上

げかけた。

「ツツ!!」

しかし木山が何か言う前に、その腕は砂鉄の波によってバラバラに切り刻まれた。

「今にも倒れそうなのに、重ねるように無茶して……最後は任せた？」

後で電撃くらった位は覚悟しときなさいよ、馬鹿。」

「……ああ、任せた」

「ちて、つと」

御坂は首を鳴らした後、真剣な様子で木山に振り返る。

「その馬鹿と一緒に、ここから離れて。巻き込まれるわよ」

「かまうものか！私にはアレを生み出した責任が！！」

木山の言葉は御坂の言葉でさえぎられた。

「アンタが良くても、子供達は違うでしょ？あの子たちが目を覚ましたときに見たいのはアンタの顔じゃあないの？」

「ッ！！」

「こんなやり方じゃあないなら、私も協力する。さから、諦めないで」

ゴォッ！！と再びAIMバーストの腕が、先ほどよりも遥かに速い速度で振るわれた。

一撃であらゆるものを叩き壊せそうな、そんな一撃だった。

御坂に直撃する、そう思い、木山は思わず息を呑んだ。

だが、それは御坂には当たらなかった。

御坂は振り返ってはいない。

青白い光を放つ高圧電流が、腕を軽く吹き飛ばしたからだった。

「後ね、アイツに巻き込まれるんじゃない」

啞然とする木山に向かって御坂は付け足すように言う。

そして、振り返ると同時に右腕を前に突き出し、凄まじい電撃をAIMバーストに向かって放つ。

「私が巻き込んだじゃう、って　　言ってるのよ!!」

AIMバーストは誘電力場を発生させることで、御坂の電撃を防いだ。

ドバアッ!!と衝撃の余波があたりを駆け抜ける。

「っ!!」(・・・アレは私が使用したものと同じ誘電力場。・・・や

はり彼女では・・・」

木山は衝撃から両腕で顔を守りながら御坂の様子を見ていた。

冷静に分析するようにして御坂を見守る。

彼女は学園都市の超能力者レベル5の第三位だ。圧倒的な力を持っているのはわかってはいるが、所詮一種類の能力しかない。

二万人分の能力の前では厳しい。

そう考えていた。

「なッ！！（直撃していないのに！！）」

御坂の電流が直撃していないにも関わらず、AIMバーストの表面が吹き飛んでいく。

電撃で焼かれた、というよりは強引に力を加えられて焼かれている、といったほうが正しそうだ。

表面が黒くこげ、そこからほんのりとオレンジの光が見えた。

(強引に捻じ込んだ電気抵抗の熱で、表面が消し飛んでいく・・・私とやった時のアレは全力ではなかったというのか!?)

ドクンッ!!

「y c v bギギギギギギh d i oアアアアアアアアアア!!

電撃を強引に振り払い、腕を何本も織り交せて大きな腕を作り出した。今度は爪もついている。

「アアア u i yアアア c h aアアアアアアア a b dア u i!!

ブンッ!!--と横なぎにその強力な腕を御坂に向かって振るう。

「　　」  
「ごめんね」

砂鉄の波が鋭い刃物のようにズバッ!!という音を立てて腕が叩き  
きられた。

うつむく様な姿勢のままの御坂が、AIMバーストを圧倒していく。

AIMバーストの悲鳴にまじって、聞こえる声。

『俺だつて、』

『能力者に、』

『なりたかつた!!』

「気づいて、あげられなくて・・・」

ヒュインッ!!と不自然な音とともに宙にいくつもの氷の塊が出現  
した。

それが容赦なく御坂に向けて飛ばされる。

『しょうがない、よね？私には何にも・・・』

『何もかもぶっ壊して・・・』

「・・・」

ザアツ！！

御坂は指一本動かさずに全ての氷の塊をなぎ払った。

砂鉄が意思を持った生き物のように、的確に、一撃で全ての氷を粉碎する。

その光景に、木山は驚愕することしか出来なかった。

御坂はほんの少し口角を上げて、優しく優しく、微笑んだ。

「頑張りたかったんだよね・・・」



『何の力もない自分がいやで、でも、憧れは捨てられなくて……』

「 うん 」

御坂はAIMバーストから聞こえる声に頷いた。

AIMバーストは、その巨大な体をもってして御坂を叩き潰そうと勢いを付けて前のめりに突っ込む。

「 u i g d f キキキキキキキキキキ u i g h u e キキキキキキキキキキ  
イイイイイイイイイ

イイイイヤアアアア g y i u v d h a s n l f j o p j v i  
アアアアアアアアア a d y i j アアアアア k l b n  
d f o k x c o p v j o r l ツ ! ! ! 」

「でもさ、 だったら、もう一度頑張ってみようよ」

もう一度。

そうだ、いくら挫折しても、諦めなければ努力は自分の何かを変え

てくれる。

コインを指で弾く音が聞こえた。

緩やかに空中で回転しながら落ちてくるコイン。

綺麗ごとだ、とか言われても、それはゆるぎないものはずだ。

「こんな所でくよくよしてないで、  
に嘘つかないで……」

自分で自分

ほんの少し、目を閉じて御坂は全集中力をコインに向けた。

そして、コインが、御坂の右手の親指の先に、落ちた。

「  
もう一度っ!!」

空気を切り裂く音が聞こえた。

それと同時にオレンジの物体が御坂の右手から撃ち出される。

オレンジの物体は一瞬にしてAIMバーストの腹部を突き破り、宙に何か三角柱の物体を放り出す。

核、だろう。

水晶のようにも見えるその物体は、はるか上空で粉々に砕け散った。

パライイイインッ！！と甲高い音が響き渡る。

悪夢の終わりを告げる音だった。

AIMバーストの体が、緑色の光となって煙のように空気に溶け込み、消えていく。

その光景を眺めながら、木山はただただ咳くことしか出来なかった。

「これが、・・・・・・・・・・・・・・・・レベル、5・・・・」

230万人の中で、七人しか存在しない超能力者<sup>レベル5</sup>。

その実力を思い知らされたのだろう。

あれほどまで巨大だったAIMバーストは空間から完全に消え去った。

何もなくなった場所を見ながら、静寂の中、しばらく御坂は動こうとしなかった。

平穩が、帰ってくる。

第十七話：終結？（前書き）

・・・なんか今回微妙ですw

## 第十七話：終結？

半壊した高速道路の下にて。

両手に手錠が嵌められた状態の木山春生は警備員アンチスキルの護送車に乗り込むべく  
足を静かに進めだした。

空はややオレンジ色に染まり、もう少しすればきれいな夕焼けがみえるであろうことを考えさせられる。

奈落信哉のほうは、すでに別の護送車にて運ばれていったらしい。

「あ、あの！」

やや遠慮気味な、そんな声が木山に向かってかけられた。

木山が静かに振り向くとそこには御坂美琴と初春飾利と神落励が立っていた。

御坂は木山に向かって言う。

「……どうするの？子供達のこと……」

子供を助ける、という木山の行為を邪魔したことに少し罪悪感を抱いているのか、

子供達を助けることを木山が諦めるのを不安に思ったのか、御坂の声はどことなく暗かった。

優しいな、そう思いながら木山は微笑む。

「……もちろん諦めるつもりはない」

「……」

御坂と初春は同時に顔を上げて木山を正面から見た。

「もう一度やり直すさ……」  
刑務所だろうと世界の果て  
だろうとも、私の頭脳はここにあるのだから

御坂と初春は安心したように笑みを浮かべた。

事が事だが、この人物の動機に悪意はない。

木山はそう言うのと再び三人に背を向け、足を進めだした。

護送車に完全に乗り込む寸前といったところで、不意に足を止めると

「ただし、今後も手段は選ぶつもりはない。気に入らなければその時はまた、邪魔しにきたまえ」

バタンツ！と木山が乗り込んだ瞬間、護送車の扉が固く閉じられた。

そのまま走り去っていく護送車を見ながら、三人は苦笑いを浮かべた。

「やれやれ・・・懲りない先生ね」

「全くだ」

立っているのもやっとの励は御坂に同意するように呟いた。

その瞬間、入れ替わるようにタクシーが三人の前で急停止した。



その中からツインテールの少女が勢いよく駆け出してきた。

その少女を見るや、御坂は驚いたように後ずさりするが少女は大きく両手を広げながら

御坂のほうに駆け寄らんとする。

「お姉さ、まああーーーーー!!!」

「!?!」

どう反応していいかわからずにいる御坂の目の前に突如少女は空間<sup>ポト</sup>移動すると

御坂に抱きつきながら押し倒す。

「黒子? ちょーーーーー!!!?!」

バタンツ!と御坂が勢いよく倒れた瞬間、おもわず初春は目をつぶった。

御坂に馬乗りになっている少女、白井黒子は御坂を見て

「黒子は心配しましたのよ！…心を痛めておりましたのよ！…」

「……いつもどおり……ですね」

そんなことを思いながら見ている初春をおいて白井は続ける。

「お肌に無数の擦り傷が！！？……ひっひっひっ  
ら電撃を放つ体力も残っていない様子。」

「ここはあ 黒子が隅々までみてさすっていやしてあげますのっ！  
！」

（うわぁ……）

変なテンションになっている白井はそこで、『あっ、そうでしたわ』  
といいつつ

初春のほうに振り向いた。

「先ほど病院のほうから連絡がありましたの」

「！」

「レベルアップの使用が次々と意識を取り戻していると・・・

」

「！！！」

これで親友の佐天涙子も目を覚ます、とおもった初春の顔から思わず笑みがこぼれた。

それを見通してか、白井は初春にこう言う。

「貴方のおかげですわよ、初春」

「そんな、私だけじゃあないですよ・・・神落さんだって・・・  
ってあれ？」

「どうしたんですの？」

首を突然傾げる初春に白井も首を傾げた。

先ほどまでここに居たはずの人物がいないのだ。

その人物がいないことをうきぼりにするかのように初春はその名を  
呟く。

「神……落……さん？」

佐天涙子は病院の屋上で立ち尽くしていた。

所々に植物が植えられていて、その前に佐天は居た。

その目はどことなく呆れたような感じだった。

もうレベルアップが使えない今、再び能力というものが遠ざかっ  
た気がした。

このような状況でも、やはり能力というものを手放したくないと思

った自分に呆れていた。

「……」

少しだけその時の喜びを思い出しながら佐天は俯いた。

その時不意に後ろから声がした。

「佐天？何でここにいるんだ？」

「神落さん？」

振り返ると、そこには体中包帯だらけの脇がキョトンとした顔で立っていた。

「どづして神落さん」その声に？」

「一方的な約束を果たしてきた、って言ってもわからないよな」

「？」

「まあ、初春たちよりも先にここにきたってことだよ」

「……そう、ですか」

初春の名が出た瞬間に少し暗くなる佐天。

励は暫く佐天の前で立ち尽くしていたが、何か思いつめる佐天に気づくと声をかける。

「……そう抱え込むなよ」

「！」

「お前は俺なんかより、ずっと強いさ。でも一々背負う必要はねえだろ？」

ハッ！となつて顔を上げる佐天に対し、励は勢いよくその場に座り込んだ。

倒れる仕草にも見えて驚く佐天だったが、励は掌をひらひらさせておどけて言う。

「おはよう、でもいいんだけどな。                      おかえり、佐天」

「ッ！・・・はい！！」

それだけ言い切ると励は急に顔を下に向けた。

少しフラフラとしていることに心配した佐天に励は言う。

「そろ、そろ初春たちが来るこ、ろだろ・・・うな。そんな・・・  
わけでちよつと寝る」

「ええええええ！？だだだ大丈夫ですか！？」

ゴロンと寝転ぶ励に対し、佐天は驚いて駆け寄ったが、返事はなかった。

スースーと心地よさそうな寝息が聞こえる。

(・・・紛らわしい!?)

思わず励に突っ込みたくなった佐天だが、ここはこのままにしておいたほうがよさそうだ。

と、そこで突如屋上のドアが開かれた。

そこから見慣れた少女が自分の名を呼びながら駆け寄ってくる。

「初春じゃん、どうしたの?」

「どづしたの?じゃありません!」

目の前に来た初春に対し、普段と同じような態度で接する。

(本当に大切な物、か・・・)

佐天はほんの少し、目の前にいる少女に気づかれないように



微笑んだ。

窓のないビル。

その内部で、逆さまになって生命維持装置の中に入っている人物は、装置の前に立っている金髪にサングラスの男に話しかけた。

「何か言いたそうだな・・・不満か？」

金髪にサングラスに、アロハシャツという組み合わせの姿の男は少し考え込むようにして手に取った資料を眺めていた。

それから目を離し、目の前に居る人物に向かって言う。

「・・・なるほど、そういうことが、アレイスター・・・お前でも予測出来ないわけだ」

「そうだ。アレは私でも予想外のイレギュラー・・・そこで君に相

談しようと考えていてな……」

アレイスター、と呼ばれた、罪人にも聖人にも男にも女にも若者にも老人にも見えない人物はそう言い放った。

それに対し、金髪にサングラスの少年は言う。

「とても相談とは思えないが……どちらかという力の誇示に見えるぞ」

「ほう……どういふことかな？」

妙にクリアに聞こえる声に、少年は続ける。

「自分はこんなカードを持ち合わせているぞ、ってな。偶然でも利用する。それがお前のやり方だろう」

「……それでも、とても利用できるものではないな……」

彼が起こすイレギュラーは、特殊すぎる魔力のせいでズレが大きくなる。……つまりプランに組み込めない……」

「・・・」

そこで少年は少し考え込んだ。

目の前の怪物は普通ならどんなことでも『プラン』とやらに組み込むだろう。

まず、一言一言を信用する気はない。

だが、もし、話の中心である例の少年の存在が強大、なだけならばアレイスターはすぐにプランに組み込めただろう。

そしてその存在が他にバレるまで隠しているはずだ。

アレイスターは今、その少年を間接的に、カードとして持っているように見せるのはそのためか？

金髪にサングラスの少年はそこで考えることを止めた。

これ以上考えても意味がないと思ったのだろう。

「なら、彼がもしお前の言うプランとやらに関わるうとすれば、ど

うなる?」

「……簡単な話だ……」

「消すのか?」

「必要とあらばな……」

アレイスターと呼ばれた人物はそう言い放った。

ある意味、肯定も否定もしていない。

舌打ちして金髪にサングラスの少年は振り返った。

相手の考えていることがわからない以上、様子を見るしかない。

(神落励……、か)

アレイスターのにとってイレギュラーな存在。

今の励を生み出した元凶が『プラン』の核である人物だということに、誰も気づいてはいない。

翌日。

久しぶりに事件も何も無い平和な朝なのだが、励は包帯姿のままであんぐりと口を開けたままだった。

「・・・・・・・・・・は？」

「いや、だから・・・」

御坂は呆れたように頭に手をやった。

ここは病室。そのベッドに励は腰をかけて座っていた。励の正面で御坂は立っている。

励は先日屋上で倒れたために入院させられていた。

正確には寝ているだけだったので目覚めたら即退院という形なのだが、  
全身が包帯でグルグル巻きにされていることに変わりはない。

そんな彼が何故朝からあんぐりと口を開けているかというところ。。。

「書類の……整理!!?……俺、昨日死にかけてたんだぞ!!」

「いやいや、これはアンタじゃないと出来ないらしいからね。」

一応、黒子にも私が少し怪我してるんじゃないの?って聞いたんだけど、ばっさり切り捨てられちゃったし……」

「白井……ッ!」

励は悔しそうに呟くが、これといった反論はしない。

反論しても意味はもたないと思っただけではなく、この状態で逃げ出すことは不可能だと悟ったからだろう。

「……で、どんな書類なの？二人は何でここに来ないの？」

「初春さんは久々の休養。黒子は休んでいた分の授業を受けに行ってるわ。そうね。書類の内容らしいんだけど……」

そう言いつつ御坂はどこからか書類の束を取り出した。

ざっと20枚といったところだろうか？

それに励は目を丸める。御坂は予想通りといった感じで続ける。

「奈落信哉ってやつに關しての調査結果をアンタ自身で書いてね。  
奈落ご本人曰く、恩人のアンタなら好きに書いてもらってかまわないらしいわよ」

「……」

好きに、というのは少し違つかもしれない。

奈落は励の『魔術』について調べ、それを取引材料にして罪科は問

われないようにしようとしていた。

しかし元々の奈落の目的

(呪術にかかった妹を助けること。

そのために二万人の演算能力を手に入れ、  
励の魔術を糸口に呪術を解析する)

が励によって別の形でかなえられた。

そのため奈落はおとなしく捕まった。

つまりは励の魔術に関して触れないようにする一番いい方法は使う本人がごまかしてしまうことだった。

「……(気を遣ってくれたみたいだな)」

「ちょっと、何黙り込んでるのよ、アンタ……」

「……ショック受けてたんだよ。初春のやつ、見舞いにも来ないくせに……」



考え込んでいた励を現実に戻すように、御坂が声をかけてきた。励はそれに軽く返事をする。書類を受け取ってパラパラとめくりながら目を通していく。

「意外とそういうの手馴れてるのね。こういったものってよく目を通すべきなんじゃない？」

「さっぱりだ。サボりなら慣れてるんだけど……。なあ、何で俺の反省文とか混じってんの？」

励は最後のほうに原稿用紙数枚を発見した。

その手前の書類に神落励、反省文と書かれていることから、励の反省文であることは間違いなさそうだ。

普段サボっている彼にとっては日常茶飯事だが、このタイミングでの反省文は全く理解できない。

「御坂、」

「な、何よ？」

突然名前を呼ばれた御坂は少し不意をつかれたといった表情をした。

励はそんなことも気にせず単刀直入にたずねる。

「・・・何で反省文？」

それに対し、御坂はあ、と声を上げた後、書類を指差していった。

「アンタがレベルアップを使用したことに対してのやつよ・・・  
奈落のやつは『すまないね』とか言ってたらしいけど・・・」

「なツツ!？」

冗談ではない、と励は思った。

自分は必死にレベルアップについて調査していたにも関わらず、レベルアップ使用者として処理されているのだ。

これは流石に白井や初春、固法先輩も納得するはずがない。

しかしそれでもこの書類が励まで届けられているということは庇いきれなかったのだろう。

「……め、面倒だー……」

横に居る御坂は苦笑いを浮かべることしか出来なかった。

さわやかな風が吹き抜ける病室の中に励の自虐的な笑い声が響き渡った。

「うん、じゃあ、まあ、頑張っつてね……」

御坂はそっと病室を後にする。

この後、半日で強引に全てを書き終えた励が再び

倒れ、また一日入院することを  
御坂は知る由もなかった。

第十七話：終結？（後書き）

．．．あの人たちが出てきましたが、そうシリアスな展開にはなりませんw

．．．よじやく落ち着ける．．．。

番外編？：続・とある少年の転校初日（前書き）

番外編の続き・・・といってもほぼ関係ないですw

番外編？：続・とある少年の転校初日

「……体中が痛い……」

神落励はうなだれるようにしてため息をはいた。

ここは常盤台中学の運動場。

常盤台中学の運動場は色々の種類があり、今励がいるのは地面が砂の運動場だ。

正確には、励一人ではない。

今は五時間目の授業中であり、他の生徒たちもいる。

ただ、運動場の中心に励と御坂美琴の二人が向かい合って立っていて、それを囲む形で他の生徒たちが佇んでいた。

さらにはその見ている生徒の数や身長からして全学年が見ているらしい。

ほぼ全員が励を注視、御坂に憧れの視線、を向けている。

「視線も・・・痛い・・・」

御坂は普段の体育の授業と同じように体操服を着ているが、励はなぜかブレザーを脱いでワイシャツになっただけである。

そんな彼の正面で腕を組んで立っていた御坂は呆れたように目を細めると

「・・・だからーさっきからずっと謝ってるでしょ？いい加減にしてくれないと電撃かますわよ」

「・・・あのな、俺を応援してくれてる奴がないのに、どう頑張れと?」

今は体育の時間で、励の実力を生徒全員の前で示す、というものだ。

つまり、御坂と能力を駆使した対決をするということだ。

ルールは二人から見て、相手のそれぞれ後方にある旗を先に破壊し



たほづが勝ち、というものなわけだが・・・。

「・・・」

ほぼ全員から御坂様ー頑張れー的な声が聞こえる。

「・・・センサー、俺腹が痛いのだ」駄・目・よ!」・・・だるいぜ」

御坂に退路を絶たれ、大きくため息をつく励。

(・・・ん?)

そこで名前を呼ばれた気がして、あたりを見回した。

運動場の隅にいる生徒の中で、昼間に知り合った二人  
保と泡浮万彬あわつきまみあやを見つけた。 湾内絹

その横にいる白井黒子は熱狂的に御坂を応援しているわけだが、二人は違った。

ちゃんと二人だけ励の応援もしている。

(……………今日はあの二人のために頑張ろう……………)

そんな決心をしつつ、励は静かに御坂に視線を戻した。

御坂は何故か眉毛をヒクヒクさせながら額から青白い火花を散らしている。

「……………何で怒ってんの？」

「怒ってなんかいないわ……………一度アンタとは戦ってみたかったのよね。さて、はじめましょ……………か!!」

御坂が腕を前に出した瞬間、バチツ、と音がした。

電撃を放つ予備動作と受け取った励は即座に右手を前に突き出した。

「っ!!」

それと同時にエメラルドグリーンの輝きを放つ直径三十センチほど

の魔法陣が彼の目の前に展開される。

刹那、電撃が炸裂した。

バチバチバチィッ！と青白い電撃が魔法陣によって受け止められる。

「！（何？アレ・・・電撃を弾いてる？）」

「ッ！！（ってアレ？俺どうする？どう反撃すれば・・・）」

電撃を弾きながら励は考える。

殴り飛ばすわけにはいかないし、蹴り飛ばすことなんて論外だ。

御坂をずっとあしらい続けることなど厳しいし、まず、危険だ。

かといって、逃げれば彼に明日はない。

ならば、本気で御坂をねじ伏せるしかない。

「・・・面倒だ」

励が何やら右手に力を入れるようになしぐさをした瞬間、ズバアツ！！と魔法陣が電撃を蹴散らした。

御坂が驚いて目を丸めた瞬間、左手にも魔法陣を出現させ右手を戻しながら左手を入れ替わるように前に突き出した。

その瞬間、炎が魔法陣から御坂に向かって一直線に放たれる。

「炎っ！？」

御坂は驚きながらも砂鉄を地面から出現させ、生き物のように自由自在に動かしながら炎を防ぐ。

ポアッ！と変な音がした。

炎がはじけとび、静かに消え去る。

「まったく、相変わらず無茶苦茶ね！」

御坂はどことなく楽しそうにどこからかコインを取り出した。

それを見た励の顔が強張る。

(殺す気かよ)

だが、御坂は励のことなど気に留めずにコインを真上に弾き飛ばした。

それと同時に、周りから歓声が沸き起こる。

御坂の代名詞の一撃。

そんなものを受けては一溜まりもない。

「これをどうにか出来るのは、あの馬鹿一人で十分だわ！私のこの攻撃を見られることに感謝しなさい！」

(・・・俺は一体何で怒らせたんだろう?)

「喰らいなさい!」

音というものを置いて、オレンジ色の物体が放たれた。

地面を抉り取りながら進むオレンジ色の物体に向かって、励は即座に、というよりはコインが御坂の手に当たる瞬間に

右手を前に突き出し先ほどよりも一回り大きな魔法陣を出現させた。

それぞれ鮮やかな光を放つ物同士が衝突する。

ドバアッ!!と。

凄まじい閃光と衝撃波があたりに拡散した。

励の腕にビリビリと右腕に少しの衝撃が伝わってくるが、励は平気  
そんな顔で超電磁砲レールガンを防ぎきった。

そのことに、一同は目を丸めて驚く。

だが、励の内心は……。

（死ぬ！死ぬ！？死ぬかと思ったッ！何であんな一撃が人に向かって撃てるんだ！？どういう神経してやがる！！）

アレを簡単に防ぎきるなんて・・・やはり噂は本当でしたのね、などと周りの観客（生徒たち）のヒソヒソ話が聞こえる。

噂？いつもの励ならば気がついて耳を傾けているはずだが、今の励では気づけなかった。

それから数秒ほどして、完全に砂埃が晴れたと同時に励は冷静さを取り戻す。

御坂は暫く励の様子を観察したあと、少し不機嫌そうな顔になり

「本気を出しなさい！！あの時みたいに！翼を出して！攻撃してきなさいよ！！！」

「美琴センサー・・・それは無理というかなんというか・・・」

「い・い・か・ら！本気できなさい！」

鬼気迫る迫力の御坂に言われ、思わず後ずさりしてしまっ助。

これ以上長引かせるわけにはいけない。

とりあえずこの状況をいち早く終わらせる策を考える。

そして、

「・・・わかった。翼は無理だが本気なら出してやる・・・」

「！」

「ただし、一発だけだ」

「どっぴいっことよ」

「俺はお前の後ろにある旗を狙う。」



だからその一発を防ぎきればお前の勝ち。出来なければ俺の攻撃が旗を破壊して勝ちってことでどうだ？一発勝負ってやつだ」

正面からの本気同士の戦いならば、どうなるか全く予想がつかない。

それほど御坂の力も強大なのだ。

先ほどまでの電撃も超電磁砲も、正面から、だつたために何とか防げた。

つまりこのルールを利用して勝つ、ことが正攻法である。

勝負好きの御坂ならば絶対に逃げない。

励の考えは当たった。

「いいわ！面白いじゃない！！」

「……よかったよかった流石は八方美人の美琴センサーだこと」

安心したようにふざけた口調に戻った励に御坂は若干顔を赤らめる。

それに気づかず励は言う。

「じゃあ構えろ」

「にゃ、にゃあ!? わ、わかったわよ!」

「じゃあいくぞ」

励は右手を後ろにもっていき、左手を前に突き出す。

対して御坂は地面から分厚い砂鉄の壁を出現させてそれを常時動かすことでチェーンソーのように触れたものを切り裂けるようにした。

ブワッ!!と空気が振動して音が聞こえてくる。

先ほどまで騒がしかったギャラリもすっかりおとなしくなった。

固唾を呑んで二人を見守る。

励は静かに呟く。

「AGNORIKSWL（真の正義のもとに敵を裁く光の槍を放て  
！！）」

と同時に彼の右手の掌の前に極小サイズの魔法陣が現れ、そこに白い光を放つ小さな球体が出現した。

励はさらに右腕を後方に弾くように、弓を撃つような仕草をする。

「……ジャッジメントランス裁きの槍！！」

と同時に撃ちだされたのは白い光だった。

真っ直ぐに進む白い光の槍は御坂の作った砂鉄の壁に激突した瞬間、轟音を立ててそれを弾き飛ばす。

ドパアッン！！と砂鉄の壁の穴が広がる前に、御坂の後方にある旗が粉々に碎け散った。

衝撃よりも先に驚愕が周囲にいきわたる。

あまりにもあつけない決着に、御坂本人でさえもポカンと口を開けたままだった。

(俺のこの攻撃は貫通力が超電磁砲レールガンよりも上だ。

・・・向こうが防御に徹してくれたら、こうなるわけだ・・・衝突時の爆発力は向こうのほうが上だけだな・・・。

まあ、でも、誰も文句は・・・  
・・・)

励はふう、とため息をついた後、周囲と御坂を見て苦笑いを浮かべながら頭に手をやり、こっぴどく。

・・・不味いな、と。

放課後。

「・・・ということがあって疲れているんですね・・・」

でもさっきまでの話だとボロボロになっていなかったような？」

佐天涙子は首をかしげながらストローに口をつけた。

ここはよく五人が集まるファミレス。

そのテーブルの一角で佐天、初春飾利、励が座っていた。

何故か励はボロボロになっていて、テーブルに身を投げ出してしまっている。

初春はパフェを淡々と食べていて、佐天は運ばれてきたジュースを飲んでいる。

ちょうど励と佐天が向かい合う形で座っていて、佐天の左隣に初春が座っている。

「……その後、他の奴は俺を見る目が変わったけど、し、し、白井が……」

「な、なるほど……」

御坂との勝負の後、白井が御坂を不意打ちのようにして負かした事に怒り、励をボコボコにしたのだろう。

ただそれだけとは佐天は思えなかったわけなのだが……。

「……で、逃げてきたんですか？よく白井さんから逃げられましたねー」

初春はパフェを食べる手を止めて言う。

確かにそのとおり、と佐天はうなづく。それに対し、励はどこか遠くを見ながら

「……だるいぜ」

「私も白井さんから逃げ切れる人、神落さん以外見たことないです」

「初春は？」

「不可能です」

「今度逃げ方を教えてやろうか？」

「そんなことをいいながら横から私のパフェを食べるの止めてください」

初春が気がついたときには励はすでに別のスプーンで横からパフェを食べていた。

これが白井さんから逃げ切るコツ！？と変に感心している佐天だったが、

そこで励はハッ！となったようにして顔を上げた。

「……嫌な予感がする」

「？」

「初春任せたッ！佐天！こい！！」

「ぎゃあッ！？」

励はとっさに佐天の腕を引っ張ってファミレスからそそくさと出て行ってしまった。

その意味を即座に初春は理解することになる。

突然彼女の正面に現れた人物はツカツカと近寄って言う。

「ここに神落さんは？」

「（アレが生存本能……）……………まだ来てませんね……」

---

---

「ぜえ、ぜえ、ぜえ、油断も隙もないぜ。アイツ……」

「そ、そこまで……ぜえ……はあ……ぜえ……げほっげほッ……」



どこかの路地裏で、励と佐天は息絶え絶えに会話していた。

どこか、というのは正確には第七学区のファミレスから半径500メートル以内の路地裏のどこかだ。

意外と整備は行き届いているらしく、落書きやゴミといったものはみあたらない。

ただ、道幅が3メートルない位で人一人走るのが限界だ。

「でも、・・・ぜえ、ぜえ、でも、・・・ここって！・・・バレやすく、ないですか？」

「だから、って・・・はあ、治安の、悪いところ、に行くと、いろいろ面倒なことになる！！！」

「な、るほど！でもそれなら、他に、もっと、場所が、」

「わかってないな佐天」

だんだん息が整ってきた二人。

佐天はほんの少し首をかしげて励を見る。

「アイツは空間移動テレポートを使う。

広い場所ならアイツはすぐに移動できる。それにアイツが思いつくような場所はだめだ」

「でも路地裏つてすぐに思いつきそうですけど……」

佐天はそう言いながら中腰になった。

結構走ったため疲れているのだろうと悟った励は路地裏の出口に少し目をやった。

人の数はまあまあ、時間帯的にもあたりはまだ明るい。

(……初春も強制的に……流石にそれはないか……)

一瞬最悪のパターンが思い浮かんだが、それはない、と自身で否定する。

「・・・何が飲みたい？佐天」

「えっ！？見つかったちゃうんじゃないですか？」

佐天の言葉を見無視して励は路地裏から出てあたりを見回した。

どうやらここからすぐ先に少し開けた場所があり、そこに自販機がポツンと立っているらしい。

足元の道路は途中から赤やオレンジといった色のレンガに変わっている。

無駄におしゃれだな・・・そう思いつつ励は路地裏を少しだけ振り向いてみる。

おそろおそろ歩いてても仕方がないので励は堂々と開けた場所に歩いていった。

佐天は何故か恐る恐るついてくる。

「・・・ロクなやつがねえぞ・・・」

自販機で売られているジュースを見てみるが、まともなものがない。  
った。

こういう時に限って、手頃なお茶などの普通の飲み物が売っていない。  
い。

「……仕方がないか……」

他のところに行くしかないな、そう思い自販機の前から立ち去ろう  
としたその時、後方から声がした。

「あれ？アンタ、何でここにいるの？それに佐天さんも？」

「あ、御坂さん！」

「げっ！……」

二人の後ろに立っていたのは、キョトンとした顔の御坂だった。

御坂はどこか不機嫌そうに腕を組んで言う。

「ほおー……勝者は余裕ねえ……こんな所を女の子を連れまわしてほっつき歩いているんだから」

「……怒ってる、よな？」

「いやー怒ってないわよ？あの条件も、私が呑んだものなんだしさ」

「そりゃよかった」

これ以上はやばい、と持ち前の勘を頼りにその場から避難しようとした。

とりあえず逃げよう、白井と御坂に合流されれば逃げ場はない。

だが、

「ねえ、ちょっと待ちなさいよ」

グイッ、と肩を引っ張られて肋は御坂の正面まで引き寄せられた。

優しい口調で、さらには笑顔にも関わらず励の顔にダラダラと冷や汗が流れる。

「アレは別に気にしてないからさー……今から私と！今度こそ！本気で勝負しなさい！！」

「  
あー……そ、それは、だな………  
……」

目を泳がせて必死に言い訳を探すが、このままでは白井に見つかると、まずうまく言い訳できない。

「……用事思い出した！！」

ほんの数回佐天を見た後、思い切り地面を蹴った。全速力でダッシュして御坂から遠ざかる。

「甘いわね！！私を誰だと思ってるのよ！！」

ダツ！と御坂が続いて駆け出した。普通ならば追いつかないだろうが、

ほんの一瞬、御坂の足にかすかに青白い火花が見えたことからして磁力でも駆使して高速で走っているのだろう。

「ちょっと！能力で追いかけてくるのは反則だろ！？」

「うるさい！！黙って私の相手をすればいいのよ！！！！」

「お前には怪我人をいたわる感情がねえのかぁーーーー！！！！」

「アンタが逃げるからよ！！」

バチバチィッ！！と向こうのほうから響いてくる声と音を聞いて佐天は思わず苦笑いを浮かべた。

おわー！？とか面倒だああああ！！などと叫び声が聞こえてくる中で佐天はため息をついた。

相変わらずだな、あの人も・・・そう思いどうしようかと考え始めた佐天の肩にポンツ、と手が置かれた。

それに反応して振り返るとそこには少し目を細めて呆れた様子の白井がいた。

おそらくこっちにきたということからして、追いかける気はないのだろう。

「あの二人・・・相変わらずですね・・・あはははは・・・」

「全くですの・・・」

遙か向こうに見える電撃を見ながら、白井は風紀委員ジャッジメントの腕章を取り出しつつゆっくり頷いた。

「面倒だあああああああああああああああああああああああああ  
ああああああああああああああっ!!！」

青白い電撃が飛び交う中から、切ない叫び声だけがきこえた。





番外編？：続・とある少年の転校初日（後書き）

励は自分のもつとも有利な状況、絶対に勝つ勝負、をしたわけです。御坂が弱いわけではないです。

主人公の強さを勘違いされないように調節するのが・・・難しいw

第十八話：びしょ濡れ服と寒い所って意外とキツイ（前書き）

相変わらずヒロインが安定しない作者。

まあ、期待を裏切らないようにほどほどにしたいと思いますw

・・・期待されてないですねw

主人公の通り名どうしようw

## 第十八話：びしょ濡れ服と寒い所って意外とキツイ

「えーっと、これはどういう状況？」

ジャッジメント  
風紀委員一のサボり野郎として有名なこの俺、

神落励は人生最大・・・正確には人生で5、6番目くらいの危機に直面していた。

財布を覗き込みながら言うことではないのだが、ここの所結構出費が多い気がする。

その理由というのも、常盤台中学などという通いたくもない学校に通わされ、

その道中にあるケーキ店やカフェ（学舎の園内の有名店なので馬鹿に出来ない金額）などに転校祝いとか、

そんな理由でクラスメイト達に連れて行かれたり、最近何かと怪我ばかりでその治療費に費やしたり、

ビリビリこと御坂美琴のご機嫌をとるためにゲコ太グッズを買ったりなどなど。

常盤台に行っている、といっても特殊な条件の上でなので無能力者レベル0

という肩書きは変わらない。

つまり、生活費が悲惨な状態であるということだ。

(……………ど、どうする？結構早く気づけたのはいいけど、不味いな…………)

このままでは生き残れない、と判断した励は打開策を考えるが何も思いつかない。

アルバイト、は風紀委員である以上厳しいし、彼の性格上まともに働けるとも思わない。

(……………ど、どうすれば……………)

フラフラと炎天下の中、街をほっつき歩いていると、いつの間にか人通りが多くビルが立ち並んでいる道路にいた。

巨大スクリーンが付けられていたり、人がたくさん入っていたりしているが励は目もくれないうで歩く。

そんな中、あるビルの前で声をかけられ、足を止めた。

「貴方、中学生ですよね？少しアルバイト、正確には試作品を着ていただけないでしょうか？」

一言で言うなら美人キャリアウーマン。そんな人物が励の横に立っていた。

試作品？と呟く励に対し、女性は続ける。

「女性のほうは水着のモデルを他の人をお願いしたんですけど、男性のほうのモデルを忘れてしまって・・・」

「水着を着るのか？」

どうでもいい、と励はポーツとした顔のまま言う。

それに対し、女性は告げる。

「『もし川なんかに落ちても重くならない』がウリの普通の服ですよ。」

ただ、生地到新素材を使っているだけです。着心地が悪いかどうか判断していただくだけです。」

「……ふーん……。」

興味なさそうに振り返り、手をヒラヒラさせて彼は他を当たってくれ、と言った。

そのまま立ち去ろうとした瞬間に女性が慌てて補足を加えた。

「急な話ですから、アルバイト料ぐらいは出しますよ。」

「……。」

ピタリ、とその言葉に反応したかのように力は足を止めた。

器用にクルリと体を回転させ、女性のほうに振り返った。

少し困ったように頭をかくと、彼はキョトンとした顔のままの女性にこう問いかけた。

「それって……いくらですかね？」

---

---

さんさんと照りつける太陽の下、彼は海の上で浮かぶようにして空を仰いでいた。

この表現からは外にいるようにしか思えないのだが、実はここはあるビルの一室だ。

学園都市の最新技術らしく、水以外のほぼ全ては偽者である。

気持ちよさそうに目を細め、水の上で静かに怠ける励。

砂浜のほうからは何やらワーキヤーと叫び声が聞こえる。



・・・だるいぜ、とそれらを耳にした励は心の中で呟ていた。

女性に連れられ、ビルの中に入ると、

そこで御坂、白井黒子、佐天涙子、初春飾利、湾内絹保、泡浮万彬、婚后光子、固法美偉の七人と出くわした。

そのまま一緒に仕事を任されることになり、現在、同じこの空間にいるわけだが自分以外は皆水着である。

もちろん、自分も黒をベースにした一見普通の服を着ているのだが、相手は水着ということもあり、声をかけ辛い。

(それにしても、この服、楽だな・・・)

しばらくはこうしていよう、と考えた励は水上で一眠りしようと思いを閉じた。

だが、その次の瞬間、

「いつまでポーっとしているんですの？」

声とともに彼は背中から砂浜に叩きつけられた。

「ぐほオッ!？」

ドサアツと砂が宙に舞い、ぐったりとしている励の上に降り注いだ。

海で浮かんでいたはずの彼を砂浜に突如叩きつけるということを出来る人物は、あの人物しかない。

テレポート空間移動の能力を持つ人物、白井黒子の仕業だろう。

「・・・・・・・・ぐッ・・・・・・・・」

顔についた砂を手で払いながらゆっくりと身を起こす励。

白井は向こうのほうで御坂を追いかけていることからすると、泳いで御坂を追いかけるのに励が邪魔だったのだろう。

とりあえずくつろぐのを邪魔された励はどうしようかとあたりを見回す。

「……大丈夫でしょうか？神落様」

「ん？」

声をかけられたことに気がついた励は声のした方向に振り返る。

そこにいたのは水着姿の湾内絹保だった。

「まあ、慣れてるからな……」

適当に言いつつ、首を鳴らす。

ほんのりと頬を赤く染めた湾内は、キョトンとした顔の励に対し湾内は言う。

「殿方に水着を見てもらうことなどないので、

あの、その、……少し意見をいただいてもよろしいでしょうか？」

「……は？」

どう返事をしていいかわからなくなった。

何を言っているんだ？と頭の中で状況を整理し、とりあえず意見を言うべきか考える。

(え？どう言えば……というか、言えることが一つしかないような……)

とりあえずほめるしかない。そう考え、彼は人差し指をピンと立てて言う。

「ああ、可愛いぜ。似合ってる！」

爽やかな表情でさらっと言った彼だが、実は少し心の中で罪悪感を感じていた。

……普通すぎるだろ、と後悔しつつもう一言加えようとしたとき、

「私の後輩口説いてんじゃないわよ!!!このサボリ野郎————  
————!!!」

バリバリバリバリイッツ!!と青白い電撃が遙か後方から彼に炸裂した。

「俺・・・何にも、悪くないの、に・・・」

ドサツ!!と真っ黒に焦がされて再び崩れ落ちる励。

湾内はどうしていいかわからずに目の前でおろおろしていたが、

白井に手を持たれ、そそくさと向こうに連れて行かれてしまう。

「全く、油断も隙もないやつね・・・ほら、立ちなさい」

「.....」

ピクリとも動かない励の襟首を持って引きずって歩く御坂。

白目をむいていますよ？と泡浮が言っているが大丈夫、と軽くいなしてパラソルの下の影に放り投げた。

「いや〜それにしても見事に死に掛けてますね〜」

佐天はどこか楽しそうに、覗き込むようにして二人に声をかける。

横にいる初春は苦笑いそのまま、婚后に関しては永遠とカメラ目線にポーズを決めていた。

いつの間にか目を覚ました励はどうしていいかわからずにあたりを見回した。

それと同時に周囲の景色が一瞬にして南国の砂浜からプールに変わる。

「喜ぶな佐天、お前がそんなに酷いとは思わなかった・・・」

呆れたように頭を抑える励。

それに対し、佐天は首をぶんぶん横に振りながら否定する。

「いやいやいやっ!!そ、そんなわけないじゃないですか!!  
ただ、いつもどおりのことだな、って感傷に浸ってただけですよ  
!!!」

「いつも?」

(いつか、御坂は知らず知らずのうちに人を殺しそうだな……  
……)

御坂が首をかしげて呟いた瞬間、後ろから声とともに何者かに抱き  
つかれたことに気づく。

「おっねえさま——————ん!!ようやく捕まえました  
の!!」

さあ、この黒子が入れたこの飲み物をいただいでくださいまし!  
!ハアハア……。

現地から取り寄せたこの100パーセントの特別ジュースを!!  
「いい加減にしろお!!」おふウツ!!!??」

御坂の肘打ちをまともに喰らい、変な声を発しつつ崩れ落ちる白井。

その手から飲み物の入った水筒がコロコロと佐天の足元まで転がっていく。

全く・・・、と腕を組んで呆れている御坂がそれに気づくことはない。

ロクでもないものが入っているんだろうな、と倒れている白井を見ていると、目の前の佐天が突如予想外の行動に出た。

足元に転がった水筒を拾い上げると

「へー、なんだか、興味深いですねー。ちょっと私が飲んでみてもいいですかあー？」

「ッ！ちょっとまって佐て『ゴクリ！』んッ！！？」

励の静止も虚しく、佐天は水筒に入っている飲み物に口をつけた。

飲んでから少したった後、固まったままの励の前にいる佐天の頬が赤く染まり、目がトロンとした状態になる。



そして真横に居る初春飾利に抱きつき、ベタベタと手で体に触れていく。

「ういはうるーんーん！今日のパンツは、何色かなあーん？」

「ささささささささ佐天さんっ！！？なななななな、何を！！？ひゃうあっ！？」

(・・・エロいな・・・・・・媚薬、か)

初春は佐天の名前を呼びながら必死に止めるように訴えかけるが、佐天は一向に止めようとしない。

巻き込まれるのだけは絶対に避けたい励は、初春と佐天から離れようと少しずつ動く。

初春が喘ぎ声を出しながら若干涙目になっているが、佐天をどうとめていいかわからない。

御坂は元凶である白井(すでに媚薬を飲んでいる)を追いかけてまわしてどうにかさせようとしているが、

白井を捕まえられる気がしない。

「ちょッ!? 佐ッ!? さんっ!! ツぁ!!」

「よいではないかーよいではないかー」

(どこの悪徳代官様だ!!)

心の中で突っ込んだ励はそのまま佐天の足元にある水筒を取り上げた。

とりあえず第二、第三の被害者が出ないようにするためにそれを隠そうと思ったのだ。

だが、励の存在に気がついた佐天が、そそくさと体勢を立て直そうとする彼の肩に手をかけた。

「あれ〜? 神落さぁーん」

「ぐほッ!?!?」

そのまま体重をかけ、励を押し倒す佐天。

押し倒された励は背中を勢いよくレンガに変わっている床に打ち付けられ、息を吐き出す。

「痛……って佐天……さん？……近い近いッ！」

気がつけば佐天が励に馬乗りをしている状態であった。

トロンとした目をこちらに向けながら、佐天は荒い息で励を見ている。

あれ？これって死亡フラグじゃね？とおいしい展開なのに関わらず、命の危機を感じる励。

「神落さん〜楽しいことしませんかあ？」

「……いや、遠慮しておくぜ(クソ)、言葉が通じない。とりあえずどっにかしないと……」

奈落信哉との戦闘の時と同じように、魔法陣で拘束することも出来

るのだが、それだけはしたくない。

と、そこで励は冷静になって首だけで周囲を見回した。

レンガで出来た床をに横になっている彼から見て、プールのふちまでおよそ2メートル。

(・・・いけるか?)

と、そこで佐天は励が持っている水筒をひったくるようにして奪い取った。

それに気づいた励が思わず、声が出してしまう。

「それぞれ」

「しまッ!」  
「ッッ!?!」

水筒の蓋をあけた佐天は励の口に強引に中の液体を励の口に注ぎこんだ。

冷静さを失う前に、励は行動を起こすべく励は佐天の腕を掴んだ。

そのまま佐天を強引に横に避けると、跳ね起き、再び佐天の腕を掴んでプールサイドを蹴った。

「ふえ！！？」

「頭を冷やせつてな」

ドボンッ！！と大きく水の柱があがった。

水に入った衝撃を利用して佐天と離れる励。

水面から同時に顔を出す二人。顔を出した励は少し疲れたようにため息をついた。

「・・・なんでこんな目に・・・」

二人とも少量だったためか、そこまで状況は深刻ではなかった。

白井も御坂によりお仕置きされた後らしく、水の上で水死体のようにブカブカと浮かんでいる。

「アンタ、大丈夫なの？」

と問いかけてきたのはプールサイドに居る御坂だ。

いまさらだが、何故か一人だけスクール水着である御坂に励は怪訝な顔で言う。

「白井よりも先にこっちに来てもらいたかった・・・」

「ごめんごめん。そっち構い辛かったからアンタに丸投げじゃなくてアンタを信用してたのよ！！」

一瞬本音が聞こえたな、と思ったがあえて口には出さない励。

「本当なの！！アンタを信用してたからよ！！」

必死になって言う御坂に呆れた励は自分の頭に手を置いて呟く。

「……だるいぜ」

「ぐすん……ぐすッ……ひぐッ!……」

「ごめん……何も覚えてないんだけど……まあ、ちょっとした貞操の危機だったね……」

「お前もだがな、佐天」

泣きじゃくる初春に佐天は申し訳なさそうに謝るが、初春は顔を合わせようとしなかった。

周囲の景色はすでに海のご真ん中に変わっており、船の上に居る励も佐天の横で額に手を当てため息をつく。

「全く、俺じゃなかったら、今頃お前も泣いてたぞ？」

「まあ、神落さんだったら・・・は？」  
いつまで泣いてるのー？

って初春！！

初春は未だ泣きながらうずくまっている。

それに対して佐天は困ったように声をかけるが、やはり恥ずかしさがあるのか、佐天のほうを見ない。

「・・・いつまでそうしてるつもりだよ初春・・・」

助け舟を出すつもりで言ったのだが初春は少し頬を膨らませると顔だけで振り返り

「神落さんがもっと早く助けてくれてれば良かったのに・・・見ているだけでしたよね？」

「うっ！？」

ジーン、とこちらを見る初春に思わず目をそらしてしまっ助。



逃がす気がないのか、

「自分が良ければいいんですか？」

「そうでも・・・ない」

「じゃあなんでしばらく私を助けようとしなかったんですか？」

「すいませんでした・・・・・・・・・・」

何故か励が初春に謝る形となって一応この騒動は終わりを告げた。

当の元凶はというと、相変わらず御坂にサンオイルを塗ろうと追い掛け回している。

「面倒だ・・・」

そつ彼が呟いた途端に周りの風景がガラリと変わった。

それと同時に皆の表情が一変する。

「何で雪山何だよ!！」

「な、なぜこのようなの……」

「何で雪山なのよ……」

「お姉さま! ! ! このような時は人肌で温めあ、少し黙りなさい」  
「げほッ! !」

吹雪の飛び交う真っ只中に放り出された一同は、両肩を手で押さえ一箇所に集まる。

励だけ服を着ているのだが、逆に布の部分が多い分、水を多く吸い取っているためすぐに凍えてしまいそうになる。

御坂は手で白井を押さえながら愚痴を吐くのだが、励には届いていない。

本当に俺死ぬかもしれない、と走馬灯のように今までの出来事を思い返す。

「おーっほっほほ！！わ、私はモデル！！ふえ、ふえーっくし  
よんッ！！」

「・・・無茶するからですわ」

白井は目を細めて婚後を見ていた。

婚後は水着姿であるにも関わらず、真っ白な雪の上に寝転がってセ  
クシーな決めポーズをとっている。

馬鹿って・・・・凄いな・・・・俺も馬鹿だけど・・・

励の意識はそこで途絶えることになる。

---

---

---

ここは第七学区のとある路地裏。

その路地裏を、ゴミ箱などを蹴り飛ばしながら走る少年がいた。

何度か殴られたのか、その顔にはいくつか痣がある。

息は絶え絶えで、表情や慌てようから、普通の事態ではないことぐらいはわかる。

畜生！俺が何だっただ！俺が何をしたって言うんだ！？俺はただ  
！！

「がッ！！？」

次の瞬間に少年の視界は大きく揺らいだ。

ほんの一秒ほど遅れて、少年は自分が何かに突き飛ばされたのだと理解した。

「よっくも俺たちを馬鹿にしてくれたな。どうしたー？前みたいな余裕はないのかな？」

それと同時にどこからか現れる大量の影。

自分が何者かに囲まれているのはわかるが、勝てるわけがないことを少年は知っている。

のどが干上がった。どうすればいい？と必死に逃げ道を探すがここは路地裏だ。逃げ道は封じられている。

それにもし人通りが多い所に出られても、ほとんどの人物は見えて見ぬふりをするだろう。

「どうしたー？やっぱりアレがないと君たちは何にも出来ないじゃないか？」

「ッ！！」

少年に迫る複数の影。

ヒーローなど現れない。自分にも落ち度があったのも少年は認めていた。

だが、ここまですることはないだろう？

少年は悔しそうに顔をゆがめて歯を食いしばった。拳がくる。

いた。

それからしばらくの間、路地裏では鈍い音が何度も鳴り響



## 第十九話：昼過ぎ

常盤台の寮内で、御坂美琴はある扉の前で立ち尽くしていた。

正確には彼女の借りている部屋のすぐ隣の部屋の扉の前、である。

その部屋を借りている人物は神落励

女子校である常

盤台中学に特例として転校してきた唯一の男子生徒である。

御坂達とは違い、彼の部屋には彼しかいない。

二人分の部屋を与えられた代わりに、

男子用の大浴場がないので、各自与えられているシャワールームしか使えなかったりなどと制限はあるもの

普通の学校に通い、普通の寮に住んでいた彼からすれば十分に贅沢らしい。

そんな彼は常盤台の授業の進みように少し途方に暮れていた様子だった。常盤台中学が名門であるが故のことだろう。



つまりは勉強を教えようと足を運んだわけだが……。

(……べ、別にたいした用があるわけでもないしっ！ど、動揺することないわよね!?)

寝てるのを起こすことになるかもしれないけど……流石にこんな昼間まで寝てる奴じゃあないよ……ね?

って！なんで私がこんなに遠慮してんのよー!)

という感じにどう入っていくべきかわからない御坂。

いくら第三位の超能力者<sup>レベル5</sup>でもそういうことは難しいらしい。

(……でも実際……どう声をかけて入るべきなの?……頼まれてもないし……)

木製の扉の前でドアノブに手をかけたり離したりする御坂。

彼女のルームメイトで後輩の白井黒子は今日、<sup>シャッジメント</sup>風紀委員の仕事のために出かけている。

励<sup>シャッジメント</sup>も風紀委員なのだが、今日は非番らしい(白井黒子談)。

(えーい!!!迷うなんて私らしくないわ!!!)

そう決断した御坂は勢いよくドアノブに手をかけた。

そのまま扉を開けようと体重をかけた。

その時、不意に扉が内側から開けられ、体のバランスを失う。

「うええッ!?!」

ドサァッ!?!と部屋の中に倒れこむ形で入った御坂。

といつても床は板ではないので怪我はしなかった。

それよりも御坂が倒れこんできたことに驚いてあとずさりした人物が居た。

部屋を借りている人物にして、黒色をベースとした私服を着ている黒髪の少年はキョトンとした顔で床に倒れている御坂を見る。

どう声をかけていいかわからないといった感じで頭に手をやりながら

「…………どうした？御坂？」

「……………」

「それで……はさつき言ったパターンで」

「ふむふむ……………」

ベッドも机も椅子も他の部屋のように二つずつあり、御坂はその片方の椅子を持ってきて励の横にすわり、教えている。

普段サボりがちな彼も、流石にこればかりはサボるべきでないとかかっているのか、いつになく真面目だ。

それ感心しつつ、御坂は自分の持っているシャーペンの芯を補給すると

「次は能力に関する問題ね・・・これは脳の機能に関してで・・・」

「・・・じゃあこれは？」

と、励が指差したのは教科書の隅に書かれてあることだった。

例外としては『原石』、などと書かれた一文だった。

その文の中の、『原石』という部分を指差し問う。

「意外と普通の教科書には載ってないけど・・・『原石』ってのは具体的にはどういったものなんだ？」

「・・・私も、詳しくはわからないんだけど」

励の問いに御坂は少し考え込むように、人差し指を額に当てた。

ほんの数秒間を置いた後、

「理論上では、学園都市で開発される能力者を人工のダイヤとした

場合、

自然界でも同じ環境が整えば天然のダイヤがとれるでしょ？」

「でも、『アイツ』はめちゃくちやだつたぞ？」

何の能力かもわからないし、聞けば本人も『わからん、根性だ』とか言うし……」

と、呆れたようにため息をつく励に、御坂は腕を組んでドカツ！と椅子に座りなおした。

「まあ、ちょうどキリもいいし、今日はここらで止めましょ？」

今度は足も組んでいて、完全に勉強を教える体勢ではない。

「ああ、そうだな……俺も疲れた」

実は励が勉強を始めてからおよそ二時間は経過していた。

励のほうも教えられたことを呑み込むのも普通ぐらいで、大体は理解したらしく、ひとまず安心という所までは終えた。

とは言っても、やはり御坂の教え方が上手なのだろう。

励は木製の椅子を机から離し、ふー、と息をはきながら背伸びをする。

「全く、黒子のやつがいたら、アンタ勉強どころじゃあなかったわよ……」

「確かに……な。二時間も俺の部屋にお前がいたことを知られても、俺が酷い目にあうことにかわりはないだろうけど……」

思わず冷や汗が流れる励。

御坂も苦笑いを浮かべることしか出来ない。

しばしの沈黙。

「じゃあ、暇だし外の空気でも吸いに行かない？」

沈黙を破ったのは御坂だった。

立ち上がりながらそう言う御坂に対し、励も立ち上がると

「ああ、そうだな」

そう返事し、部屋の出口の扉の前まで歩いていく。

御坂は励を見て、今更という感じで尋ねる。

「ちょっとアンタ・・・そのまま出かける気なの？」

「ん？そうだけど・・・」

それがどうした、といったげな目で御坂を見る励。

「校則では制服じゃなきゃだめだから、着替えなさい・・・」

励はしばらく考え込むような仕草をしたが、制服に着替えなおすのは面倒だと考え

「少しくらいなら大丈夫だろ」

扉を開け、御坂を手招きした。

後でどうなっても知らないわよ、と呟きつつ御坂は彼の後を追う。

---

---

「ハッ！！何やらわたくしのいない間にお姉さまが誰かとお出かけしている予感ッッ！！」

ジャッジメント  
風紀委員第一七七支部。

そこでパソコンの前に座り作業をしている初春の横で白井が妙に低い声で叫んだ。

一瞬ビクッ！となる周りの者たちだが、初春は特に驚きもせず冷静に返す。



「随分と細かい予感ですね……。考えすぎなんじゃないですかー？」

画面から目を離さずに作業を続ける初春。そんなことより、と話を切り替える。

「つい前に起きた暴行事件の意図がまだまだわからないことばかりなんですから、しつかり調べてください」

ほんの少し不機嫌そうな顔をした後、白井は話をあわせる。

彼女の中ではお姉さま、が最優先事項だったのだろう。

「わかってますの……。今の所、被害者は二人、ですよね？」

「はい……」

「それについてだけどね、初春さん」

と、初春が相槌をうつた所に横から

彼女らの先輩である固法美偉が初春のパソコンの画面を指差すようにして現れる。

「ここ、見てもらえる？」

固法が指差しているのは、画面に表示された被害者二名の情報だった。

「……無能力者<sup>レベル0</sup>……確かに、二人とも一致してますけど……」

「偶然ではありませんの？被害者本人たちはカツアゲだとか証言してますし……」

「でも、それなら何故この人たちはここまでボコボコにされてるわけ？」

と固法の問いかけに一瞬白井と初春は黙り込んでしまった。

確かに、何かがおかしい。

被害者二人の共通点は、無能力者というだけで、他に共通点も接点も全くない。

「犯人の目的は金目当てではない・・・？」

呟くように言う白井に固法は頷く。

「そういうことになるわね・・・それに、こっちの資料を見て」

そう言いながら固法はすぐそこにあつた机の引き出しから、「一、三枚の資料を取り出す。

何故別の事件の資料を？と首を傾げる白井と初春の前にその資料を置く。

「・・・最近被害者が増えているという、能力者狩りじゃあないですか・・・これがどうにかしたんですか？」

少し険しい表情に変わり、たずねる初春に冷静な表情のまま固法は返す。

「共通点は二つの事件とも犯人は集団ということ。

変だと思わない？こういった似たような事件が同じ時期に起きるだなんて・・・」

「確かに・・・そういわれてみれば変ですの・・・無関係かどうか、同時に調べて確認してみる価値はありますわね」

第七学区のとある喫茶店の、外に配置された椅子に腰をかけながら、  
励はぐでー、としていた。

「事件？いきなり物騒な話をするなよ。面倒だー」

「・・・アンタ、ジャツメン風紀委員じゃなかったっけ？」

と呆れた様子でジューズを手に取り、口にもっていく御坂。

どうせこんな暑い日もパンツの上から短パンを履いているんだろうな、と思う励に対し目を細める。

「アンタ、今余計なこと考えてたでしょ・・・」

「面倒だ」「ってうおい……」「」

相変わらず無気力な励に電撃を飛ばしそうになるが、何とか頭から青白い火花を散らすだけで抑える御坂。

外用の素材のテーブルの上に飲み終えたジュースの入れ物を置くと、両腕を上突き上げて少し気持ちよさそうに背筋を伸ばす。

昼過ぎということもあって人通りは少ない。

やはり暑い、というのが大きいのかもしれぬ。

「いや、黒子たちが今調べてるらしいの……暴行事件らしいけど……」

「暴行事件……か」

復唱するようにして呟く励。

その目はどこか遠くを見ていた。

少し間を置いた後、ポケットから携帯電話を取り出し、呟く。

「……今日の朝、それに関するデータが送られてきた。多分、報告みたいなものだと思う……」

「！」

「俺はサボり癖があるから、携帯のメモ機能で独自にまとめてあった、解決済みの事件のリストってのを消去してなかった」

とそのリストを開いてしばし眺めた後、懐にしまう。

何のリストか気になった御坂だが、励の不機嫌そうな顔を見て触れないことにする。

「それにも載ってた二人が被害者なんだけど……ってまあ、ただの予感みたいなものだ」

「……自分で話の腰を折るんかい……」

がっくりとうなだれる御坂。

ジューズはもう飲み終えたし、事件について聞いたつもりだったが、はぐらかされた。

一応周囲に比べて涼しいとはいえ暑い場所に留まり続ける理由はない。

席を立ち、御坂は励のほうを見て言う。

「さっさと行くわよ」

「どっどこ？」

「楽しくくつろげるところを探すの……ゲーセンとか」

とポケットからゲームセンターのコインを取り出した御坂に思わず、励は歩きながら驚く。

彼女がコインを使うよ言えば、レールガン超電磁砲しか思い浮かばないからだ。

ゲームセンターの話の最中なのだから、コインを出したところで普通は驚かないものなのだが

励はとっさに反応してしまったようだ。

それに気づいた御坂が眉をひそめる。

「いつも私がアンタに見境もなく超電磁砲撃<sup>レールガン</sup>つてるみたいじゃない・  
」

「・・・  
・自覚、ないのか？ビリビリ」

電撃だけではない。ここ最近、転校してから幾度となく殺されかけたことだろうか？

若干機嫌を損ねた励は、最後は呟くように、聞こえないように言っていた・・・はずだった。

ぶちっ、と何かが引きちぎられるような、または引きちぎられたような、そんな音が聞こえた気がした。

(あ・・・)

同時に聞こえるのは、バチバチという青白い火花が散る音。



「アンタねえ・・・いい加減にその性格治さないと、  
目に遭うわよ!!」

酷い

バチバチバチバチイッツ!!と青白い電撃が御坂からあふれ出んばかりに周囲に飛び散る。

おそらくこれだけでも数万ボルトは超えているのだろうとギリギリ当たっていない励は息を呑む。

暑いせいか今いる場所が人ごみの中ではないことが幸いしたのか、  
誰一人喰らうことはなかったようだ・・・。

「逃がすかあつ!!!!!!」

ズバアツ!!と電撃が励に向かって放たれる。

「ッ!!!!」

とっさに右手を前に突き出し、エメラルドグリーンの輝きを放つ魔法陣を展開して、電撃を弾く励。

鮮やかな輝きを放つ光がぶつかる様は夜見れば綺麗なモノなのだろうが、本人からすれば命がけなので笑えない。

「だからそーいつのをやめろって!！」

「アンタが悪いんでしょーが!！」

「例えそうだとしても、電撃を放つのはどうかと思いますけ」うるさいっっ!！」どお!？」

御坂が叫ぶようにして放った電撃を今度は何とか避けて、体勢を立て直す。

動きやすい私服でよかった、と心の底から安堵する励に対して御坂はようやくここで目立っていることに気づいた。

周囲にいた通行人が御坂と励を驚いた目で見ている。

突然御坂が叫びながら電撃をはなつたわけなので、当然の反応なのだが御坂は我に返った後で顔を真っ赤にする。

「~~~~~っっ！い、行くわよ！！」

御坂は一人でスタスタ歩き始めると、励とすれ違いざまに彼の襟首を掴んでいく。

「おい、ちよっ……死、ぬ……」

とりあえず人目のつかない場所に逃げ込むように、御坂は路地裏に足を踏み入れた。

「おい、アレ……」

「ん？」

コンビニエンスストアから、飲料水を片手に出てきた制服姿の少年は、レジで金を支払い終わった背の高い少年に声をかけた。

二人とも別に髪を染めているわけでもなく、どこにでも居そうな普通の学生だ。

御坂に引きずられて路地裏に入っていく励のほうに視線をやりながら  
呟くように言う。

「……アレが『噂』の無能力者の風紀委員……」

「あつちの女は超電磁砲か……有名人だな」

背の高いほうの少年は携帯電話を取り出す。

見たところ普通の携帯だが、彼の制服ズボンの後ろのポケットに携帯が見えることから複数携帯を持っていることがわかる。

「……任せるよ」

振り返りもせず飲料水を片手に持った少年は呟いた。

それに対し、背の高いほうの少年はとくに反応を示さずに携帯電話の通話ボタンを押した。

そのまま耳に当てて、話し始めた。





☐ スキルアウト  
武装集団 × オリジナル  
☐ 編。

第二十話：路地裏（前書き）

うう……主人公の通り名が未だに思い浮かばない……。



## 第二十話：路地裏

「……三途の川が見えたぜ」

「だからごめんって……」

路地裏に少し入ったところで御坂美琴は眉をひそめて神落励と話していた。

少し申し訳なさそうに肩をすくめている御坂に対し、励はいつもどおりの無気力な目でボーツと空を眺めている。

道幅は2、3メートルといった所で高いビルに挟まれている場所のため、日影となっている。

たまに吹くビル風が気持ちよかつたりするのだが、

道の隅にいつ使われたのかもわからない角材が放置されていたりとあまりいい印象はない。

「……舞夏の指導はどうなのよ？」

こここのところ、励はある人物に盛夏祭の指導を（個人で）徹底的に

されていた。

話を変えるためにとりあえずその調子を尋ねる。

「……やめろ、思い出させないでくれ……」

「ねえ、ねえ、一体どんなこと教えてもらってるの？」

励のテンションの下がりように気になった御坂は楽しそうに問いかける。

それに対し、励はため息をついた後、頭をかきながら答える。

「料理や掃除や礼儀作法系統を完璧になるまでさせられた……、  
が礼儀作法だけはどうにも……な」

「へ……やっぱりね。アンタの性格が良く出てるわー。その調子じゃ、一生この美琴様には敵わないわよん」

「……だるいぜ」

鉄筋コンクリートのビルを横目で見ながらだるそうに呟く励。

彼としてももつと涼しい場所に移動したいのか、歩き始めるそぶりを見せた。

御坂もそれに反応しようとした瞬間、御坂の背後  
つまりは励の向いている方向からカラン、と音が聞こえた。

「！」

「空き缶だ、空き缶」

思わず振り返ろうとした御坂に励は右手をヒラヒラさせながら言う。

御坂が背にしていた（励と向き合う形でいたので、励の正面にあたる）ほうは路地裏の出口で、

励の背にしているほうは路地裏の奥に続く曲がり角となっている。

表のほうから路地裏のほうにポイ捨てでもしたのだろう。

そう結論付けた励は路地裏から出ようと足を動かす。

御坂もつられて振り返り、歩き出そうとした。

その時、だった。

パチ、とほんの少し音がした。

「がッ!？」

突然励の体から力が抜け、いきおいよく膝から崩れ落ちた。

「っ!!ちよつと大丈夫!？」

「あつ……!!！」

体が痺れているのか、口をパクパクと開くだけで声を出せない励を見て、御坂は音がした方向に振り返る。

(……手!!!今は、電撃!!……電撃エレクトロマスター使いね!!!)

少し奥に見えている手も、曲がり角から出ているものであるため、犯人の姿は確認できない。

だが、その前にフツ、と手は角の奥に消えていった。

おそらく御坂に気づかれたと思ったのだろう。

「逃がすかあッ!！」

御坂は足に力を込め、全力で走りだそうとした。

だが、

「ま、てっ!!!…み、坂ッ!!!…」

「え、でも!!犯人が逃げちゃうわよ!?!」

無理やり声をひねり出すように言う励の呼びかけに思わず立ち止まる御坂。

しかし、犯人はその間にも逃げていくことがわかっているのも駆け出そうという体勢になってしまっている。

「……追う……な、相手、は……電撃使い一人……だけ……  
ど、  
ど、」

仲間が、……待ち伏せしている可能性も、ある。行方をくらませられ……るかもしれないし、追わないほうがいい……」

「でも……」

戸惑う御坂の手首を起き上がりながら掴み、ヨロヨロと立ち上がりながら励は曲がり角のほうに視線をやる。

電撃はかなりの威力を持っていた。

さらにはその高圧電流を最小限の規模で首筋に威力を集中させた。

つまりは一時的に励の全身の神経を麻痺させ、気絶一步手前まで追いつくほどの電撃と化したのだ。

そんなことが出来るとなると、相手が高位の能力者であることがわかる。

だが、そこまでだ。

エレクトロマスター  
電撃使いなんて、ありふれた能力者、この学園都市ではそう珍しくない。

だが、逆に電撃使いエレクトロマスターならば御坂を知らない者はいないだろう。

さらには簡単に逃げ切れないことも、わかっているなければおかしい。

つまり、絶対的な策を持っている可能性が高い。

「くッ!? (力が思うように入らない・・・面倒だな・・・) とにかく、逃げるぞ」

励は横にかさばっている木材の束の中から、ちょうどいい大きさの角材を杖代わりにして右手に持つ。

それに体重を預け、何も持っていない左手で御坂の手を掴むと、頼りない足取りで歩き出す。

電撃が影響して一時的に神経系統または筋肉に影響したのだろう。

治療するにしても、一旦ここから離れたほうがよさそうだ。

「逃がすんじゃない。今は泳がせるだけだ……支部に行くぞ。ちゃんとした杖もほしいな……」

---

---

励たちがいた路地裏を形成するビルの一つ。その屋上に二人の少年は居た。

一人はどこにでもいそうな、ごくごく普通の大人しそうな少年。

もう一人は背高く、スポーツなどが出来そうな茶髪の少年だ。

見た目からするに高校生だろう。大人しそうな少年は持っていた双眼鏡を目から遠ざけ、

ほんの少し笑みを見せると、



「へえ……なるほど」

「思ったよりも弱いな。これなら警戒するまでもないんじゃないか？」

と、横から茶髪の少年が言うことに反応して、振り返ることもなく答える。

「……いや、あの電撃は意識を確実に奪うレベルだと命令したんだ。

でも、膝から崩れ落ちた時に地面を思いっきり殴りつけて意識を手放さなかった……」

「……なるほど」

何がわかったのか、背の高いほうの少年はうなずいた。

あくまでこの二人はただの学生に過ぎないはずだ。

つまり、二人の話している様子も、一見ただの学生の会話にしか見えない。

）  
それでいいんだ。木を隠すなら森・・・絶対に  
見つけれない・・・誰も・・・）

おとなしそうな少年は屋上の出口まで歩いて移動すると茶髪の少年  
を手招きして扉を開けた。

---

---

「なるほど・・・そういうことですよ・・・」

「まさか神落さんがそんな状態になるなんて、思いませんでした・・・」

「全くよ、注意力がなさ過ぎるの・・・」

ジャッジメント  
風紀委員第一七七支部で、白井黒子と初春飾利の前で御坂と励は困  
ったようにして立っていた。  
ちなみに、励は右手に現代的なデザインの杖を持っていて、それに  
体を預ける形で立っている。

例のカエル顔の医者の話だと、運動能力が低下していて、一週間程度このままの状態が続くらしい。

御坂の力で治せないかと考えてみたらしいのだが、相手は手加減していなかったらしく、

後遺症がないだけでも幸いな状態、だそうだ。無茶は出来ない。

しかし、杖をついているから、といっても彼が弱そうに見えるわけではない。

杖が妙に彼のサボりがちの性格と合い、全くといってもいいほど杖をついていても違和感がない。

むしろこれが普段の励と思えても仕方がないくらいだった。

「……そっちのほうはどうなんだ？」

自分の話から話題をそらしたかったのか、不機嫌そうにちらりと初春の前にあるパソコンに目をやる。

資料ばかりが散らばっているデスクの真ん中にある少し大きめのパソコンのモニターには、

つい最近の事件に巻き込まれた被害者の一覧がある。

初春は画面と再び向き合おう、

「今のところ・・・能力者狩りの犯人グループが武装集団スキルアウトってわかつたところまでですかね・・・

ビッグスパイダー・・・ってチームらしいですけど」

「ふーん・・・」

励は少し興味なさそうに返事した。

こういった事件で彼が興味なさそうな反応を示すのは極めて珍しいことだ。

それに疑問を隠せない初春と白井だったのだが、彼女らが反応を示すことは出来なかった。

その前に、御坂がいきおいよく初春の言葉に反応したからだった。

「初春さん!!その話もつと詳しく聞かせて!!」「いや、じ、これは「いいから教えて!!」「あわわわわわ」「

「お姉さま……」

「……だるいぜ」

「婚后さんが襲われたあ!?!?」

御坂は勢いよくテーブルに手を叩きつけて身を乗り出した。

テーブルの上に置かれていたグラスが傾き、ジュースがこぼれそうになるが、

かろうじてその場にいた全員が自分のジュースに手を伸ばすことによりこぼすことはなかった。

相変わらず、初春一人だけはパフェであるのだが、もはや誰も気にしては居ない。

「まあまあ、お姉さま落ち着いて」

白井は手で制しながら御坂をなだめる。

ここは第七学区のとある喫茶店。

おしゃれな内装で、入り口には観葉植物が置かれていたり、窓際には花がたくさん入った花瓶が等間隔でおかれていたりして、窓の枠や椅子やテーブル、さらには床にまで木を使っているらしく、高級感がどこことなく感じられる店である。

その店の窓側の一角に、御坂、白井、励、初春、佐天の五人は座っていた。

木製の茶色いテーブルを前でどうやら怒りを隠せないでいる御坂は言い放つ。

「大勢で女の子を襲うとか！男として最低じゃない！！」

「・・・不良の心配をしたほうが良さそうだ・・・」

「御坂さん、えらくテンション高いですね・・・」

それに対し、若干困りながら佐天は御坂に尋ねた。

御坂は一瞬ハッ！と我に返ったかと思うと、テーブルに右ひざをついて、顔を支えるような姿勢になる。

「い、いや、私は自分の出来ることをやろうともしないで、現実から逃げてるだけのやつが許せないってどうか・・・」

「あゝ・・・なんか自分のこと言われてるみたいー・・・」

御坂の言葉を受けた佐天は、少し自嘲気味でそう言い放った後、顔を下に向け沈んだ。

「え？佐天さんは違うよ」

「え？」

以外にも、声を出して驚いたのは佐天のほうで、横から腕を組んだままの白井がそうです。と付け加える。

「赤信号、皆でわたれば、なのがスキルアウト。一人で渡りきった佐天さんとは肝の据わり方が根本的に違」

「う……」

「し、白井さん、フォローになってないです……」

苦笑いで身を乗り出す初春にすつとんきよな声をあげて、頭の上に  
？マークを浮かべる白井。

彼女たちの中では、おそらくスキルアウトと佐天の決定的な差がわ  
かっているようなのだが、言葉には出来ないらしい。

「ま、一生御坂や白井にはわからないことは確かだな……」

「「「「え？」「」「」」

今度は全員がすつとんきよな声を上げたと同時に励のほうを見た。

「な、何よそれ」

「わたくしはともかく、お姉さまは元々レベル1だったのでですよ？  
わかる部分があるではと……」

「……でも、0じゃあ、無能力者じゃあなかったんだろ？」



励の口調がいつにもまして真剣な調子だった。

思わず、ひるんでしまいそうになる白井だったが、ここは話を聞くべきだと判断する。

かまわず励は続ける。

「スキルアウト、っていつても、

ただ楽しく馬鹿やってるやつもいれば、別に不良でも何でも無い無能力者のサボリの集まりだったりする。

まあ、確かに逃げてる、ってのは正しいけど、正論ばかりじゃあどうにもならない」

「でも、だからって人様に迷惑かけて許されるものじゃないわ」

「確かに。面倒なくらい正し過ぎるんだよ、お前は。……だから理解出来ないんだよ、白井もな」

励はそれだけ言うと、窓の外に視線をやりながら少し考え込んだ後、話を切り替えることにしたらしく、別の話を切り出す。

「で、そのビッグスパイダーって組織はどうして突然能力者狩りなんか始めたんだ？」

「そちらについてはまだ・・・」

「そういえば、」

ビッグスパイダーという組織は闇ルートから非合法的な武器を手に入れている、という情報もあります」

「へー・・・」

窓の外を眺めていた御坂は少し楽しそうな、好戦的な笑みを浮かべると呟くように言う。

「・・・そいつら、いつそ私に絡んできてくれないかな」

(駄目だ・・・スイッチ入ったら面倒過ぎる。コイツ・・・)

「お姉さま」

カラン、とジュースに入っている氷がぶつかり合う音がした。

「絡んでほしいなら黒子がいつでも絡みます!」

「ちよ、そういってじゃないわよ!」

と同時に抱きついてくる白井。

いつも通りのほほえましい二人のやり取りを前に、励は考え込む。

(じゃあ、俺を襲ったやつらは何なんだ?)

一日後。

「またビッグスパイダーが？」

「今週だけでもう三件目・・・連中、ピッチを上げてきてますわ・・・」

白井はノートパソコンが置かれたデスクの前の椅子に座り、横目で御坂を見ながら被害者の一覧を見ていた。

ここは風紀委員第一七七支部で、ジャッジメント 励、固法美偉、白井はそれぞれデスクの上に置かれたパソコンと向き合って座っていた。

励は画面を見ながら悔しそうに言う。

「俺を襲ったほうもピッチを上げてるみたいだ。正反対で、無能力者ばかりだ」

「やっぱここは一発ドカンとー！」

「お姉さま。お姉さまのドカンは被害が大きくなりすぎますの」

呆れた調子で注意する白井をよそにチラリと励は固法のほうを見る。

「一見画面を見ているようだが、違う。何か思いつめるようにどこか遠くを見ている。」

( ..... )

小型の通信端末を持って一人突っ立っていた初春は情報入手したのか、報告するように話し出す。

「ビッグスパイダーが勢力を伸ばしてきたのは、今から二年くらい前からだそうですね。」

武器を手にとって犯罪行為を繰り返すのも、ちょうどそのころ「

二年前、という言葉に、固法の肩がかすかに動いた。

それを見ていた励の表情がかすかに曇る。

(・・・)

「なるほど。武器を手に入れ、調子付いたってわけね」

でも、と腕を組みながら御坂は少し疑問を持った感じで言う。

「そんな物を学園都市の外から、どうやってもちこむんだろっ。  
物資の流通は、厳重に管理されてるし、非合法な物なんて当然シ  
ャットアウトされてるはずじゃない？」

「じゃあ学園都市の中で作ってるだろ？」

「流石にそれはないんじゃない？学園都市といっても都市なわけだ  
し、国に知れたら一大事よ？」

マウスを動かし、画面を事件現場の地図に変え、目を画面からそら

さず励は続ける。

「情報も管理して外に出ないようにすればいい話だろ。科学技術もそうだし、閉鎖空間なんだ」

「つまり、この街に連中のバツクがいると……。なるほど、調べてみる価値はありそうですね。」

「って何でそんなに詳しいんですの？」

「あの、それからもう一つ。ビッグスパイダーのリーダーがわかりました。名前は黒妻綿流くろつまわたる。かなりあくどい男のようです。仲間も平気で裏切るようなやつらしいですね……。」

グループから抜けるなんて言おうものなら背中から撃ちかねない男だといわれています」

(……………)

「つまり、最低の男というわけですね」

再び固法がかすかに反応したように見えたが、その後はとくに変わった様子は見られなかった。

拳を握り締めて感情を押し殺してでもいるように見えた励だったの  
だが、彼女の変化に他の三人は気づいては居ない。

「背中といえば、その人、背中に蜘蛛の刺青をしているらしいです」

「！」

（・・・ったく、面倒なことになりそうだぜ・・・）





## 第二十一話：二つの事件（前書き）

アニメを見てから読んでいただくと時間軸がどういったものなのか  
わかっていただけるかと・・・ってややこしいですねw

## 第二十一話：二つの事件

ストレンジ、と呼ばれる第十学区の地域に神落励、御坂美琴、白井黒子の三人は調査に来ていた。

ストレンジとは、廃ビル街と化している地域で、落書きが道や壁のいたる所にあるのは当たり前で、

ガラの悪そうな不良たちが何人も道でたむろって居る姿も見られる。

そんな街の道の真ん中で、励は疲れたようにため息をつきながら呆れていた。

彼は右手で現代的なデザインの杖をついていて、若干体が右に傾いている。

「・・・面倒だー・・・」

それが彼の正面に大量に集まってきた不良に対しての言葉なのか、

彼の横に居るこの事態を招いた御坂と白井に対してかはわからない。

「ほら、やっぱりアンタがその腕章取らないからじゃない」

「それはお姉さまが強引に・・・」

御坂と白井は不良に絡まれている、という状態にも関わらず、取り乱すことも逃げようとしてもしないで平然と会話をしている。

励はつい最近までは何の力も持たない無能力者レベル0であったため、やはりこういう状況には

御坂たちのような態度をとることが出来ないでいる。

(・・・何だかんだ言って、コイツらって凄いよな)

変な所に感心している励をよそに、不良の一人は『で？お嬢ちゃんたち、俺らになんか用？』的な感じで歩み寄ってくる。

(俺はスルーですかい・・・まあ、杖持ってるし、やる気なさそうにしか見えんのだろうなあ・・・)

なんか悲しいな)

そろそろ割って入ったほうがいいのか？などということも励が考えていたその時、不意に後方から追い抜きながら話し出す人物が現れた。

(・・・なッ!?)

「待ちな」

「「へ?」「」

「あ？」

流石に想定外だったのか、御坂や白井も目を丸めて驚く。

「女の子にちよっかい出すのは、いただけねえな」

「何だデメエ？」

その人物は髪を赤く染めていて、革ジャンを着ているが、服の上から見てもわかるくらいガツチリとしている。

背の高さからして高校生だろうことはわかるが、何故その人物の右手には紙パックの牛乳があるかまではわからない。

その人物は御坂と白井の横を通るときに『ちよっと待ってる』と軽く声をかけると不良たちの目前まで歩いていく。

「女の前だからって調子のんじゃねえぞこら！」

「まあまあ、」

なだめるように柔和な笑みで話しかけるその人物だが、やはり異様に目立つ牛乳が、挑発としか思えない。

不良たちを前に、笑顔で牛乳を差し出す不良っぽい人物。

(シユールな光景だ・・・)

と、励が思ったことを口に出す前にパン、と乾いた音が聞こえた。

不良の一人が軽い仕草で目の前の人物の右手を叩いたからだ。

「・・・！」

髪を赤く染めた人物は地面に落ち、牛乳が流れ出す光景に目を見開く。

「いいからとつとと失せろ」

不良の一人がそう呟いた瞬間、髪を赤く染めた人物は表情を険しいものにする、不良のほうに向き直り、

軽く舌打ちした。

チッ！という音がやけに大きく聞こえた。

「……」

(……)

「こ、こちらの牛乳でよろしいでしょーか……！」

「ハハ、悪いな」

顔中、体中痣だらけの、ボロボロの不良が牛乳を片手に申し訳なさそうに赤い髪の人物にこびへつらっていた。

赤い髪の人物は牛乳を柔和な笑みで受け取っているが、  
実のところこの人物が犯人なわけでそれを目撃していた励たちからすればなんともいえない状況である。

「鬼、だな」

「そうね」

「そうですの」

呆れた様子で呟く三人の前に、赤い髪の人物は不良たちに手を振って笑顔でさようならする。

何故牛乳を持っているのか、そして何故買いに行かせたのか、まず何者なのか。

色々と尋ねたいことがありすぎて困っている昴の前に、御坂は無愛想な感じに声をかけた。

「助けてくれなんて、頼んでないわよ」

「ん？」

赤い髪の人物は文句を言う御坂のほうに振り返るが、特にこれといった関心はなさそうに軽い調子で笑う。

「ハハ、そりゃあ悪かった。知り合いにその君たち二人ぐらいの胸の女の子がいてな、ほっとけなかったんだ」

「殿方に胸の話を書かれたのに、」

「自然と、いやらしくない・・・」

自分たちの視線を少し下、つまりは体のほうに向けながら不思議そうな感じでそう呟いた。

再び視線を赤い髪の人物のほうにやると、その人物は三人に背を向けてその場を去ろうとする。

「……ちよつと待て」

「ん？君は怪我してるんじゃないのか？」

呼び止めた励に対し、赤い髪の人物は気がついたように励の右手にある杖に目をやる。

現代的なデザインの杖で体を支えていることから、怪我をしているとでも判断したのだろうか。

話をそらすためかもしれなかったが、励は真剣そうに言う。

「俺もそのツインテールと同じ風紀委員シャジメントなんですね……」  
辺の話を聞かせて欲しい。

『名前までは』尋ねない」

しばらく励と赤い髪の人物は探りあうようにして黙っていたが、赤い髪の人物は何かを理解したのか



再び三人に背を向けて歩き出すと、

「……ついてきな」

軽くそう言って手で合図を出した。

---

---

「……（杖で階段はキツイな）」

「……」

ここはストレンジのとある廃ビルの屋上。

その中でもこのビルは周囲のものよりも高いらしく、あたりを見渡せるようになっていた。

下の灰色の廃ビルのジャングルのせいか、青空がやけに爽やかで綺麗なものに見える。

顔の横を通り抜ける風に少し力を抜きながら、脇は屋上の入り口の扉に背中を預けた。

赤い髪の人物は屋上の策に肘を置いて、向こう側を見るようにして気持ちよさそうに目をつむる。

「いいだろ、ちょっとした秘密の場所、ってやつさ・・・下じゃあ息が詰まる。それに、ここは風が気持ちいいんだ」

「ふーん」

適当に相槌をうつ御坂に、赤い髪の人物は呟くように言う。

「ここから見るストレンジは、二年前とかわからねえなあ・・・」

「二年前？」

ふと赤い髪の人物が言い放った言葉に聞き覚えがあり、首をかしげ尋ねようとする御坂だったが

ま、色々とな、とはぐらかされる。

思わず怪訝な表情になる御坂をよそに、白井は尋ねる。

「それにしても、何故スキルアウトの方々はこの地区に集中して・・・」

それに対し、赤い髪の人物はほんの少しだけ呆れたようにわらった。

「アンタたちにはわからないさ。  
出しちまったんだよ、俺たちは。」

何もかも投げ

全てが能力で判断される学園都市を捨てたのさ」

「・・・」

その言葉に、少し離れた入り口の扉にもたれたまま、目を細める。

二万人もの負の思念の中に飛び込んだ励にとっては、嫌というほどそれが理解出来ていた。

どういったものなのかも、その苦しみも。

今考えるだけで背筋が凍りそうになる。

「俺たちには、能力は手の届かない青空なのさ・・・。このせまい路地から見上げるように・・・」

「でも、スキルアウトはスキルアウトでしょ？群れてやることは口くでもないことばっか」

御坂は不満げに両腕を組みながらそう言い放った。

これにはすっかり話の腰を折られてしまったらしく、苦笑しながら御坂と白井のほうに視線を移した。

「ところで、アンタたちはここに何しにきたんだ？」

「あ、そうですのー！」

と、突然思い出したかのように声を出したのは御坂ではなく白井のほうだった。

すっかり今まで忘れていたらしく、呆れたように肋は頭を抑える。

彼女は赤い髪の人物の横まで駆け寄り、話しかける。

「私たち、ビッグスパイダーという組織を追って」

「！　　ここでその名前、あんまり出さないほうが懸命だぜ」

一瞬眉をひそめたかと思うと、赤い髪の人物は二人のほうに振り返った。

「その名前、あんまりここで出さないほうが懸命だぜ」

「？」

意味がわからず首を傾げる白井は、もう一つの情報を提示する。

「でしたら、黒妻綿流、という名前に心当たりは？」

「・・・知らないなあ」

半分とぼけたように視線を横にやり、二人に背を向けて歩き出すと、赤い髪の人物は告げる。

「まあ、気いつけて帰りなよ」

屋上から去るために階段へ向かう赤い髪の人物。

その人物の後姿を見ながら、御坂は眉をひそめる。

そんな御坂に気づいたのか、白井は尋ねた。すると

「何かね、あの人、気になるのよね」

「ま、まー！！お姉さまが殿方などに関心をもたれるなんて、黒子！黒子！！」

ドガンツ！！と御坂の拳が白井の頭部に炸裂した。

頭を抑える白井に小声で話す御坂たちを見ていた励は赤い髪の人物が通れるように横へずれる。

風もやみ、コツコツと足音だけが聞こえる。

赤い髪の人物が軽い挨拶だけして屋上から出て行くこととしたその時、励は目を瞑ったまま問いかけた。

「言わなくていいのか？」

「何だよ、少年」

ほんの少し足を止め、振り返りもせず赤い髪の人物は反応する。

「とぼけるなよ。俺は約束を守って伝えてない。けどな、一度死んだと思わせて悲しませてんだ。

このまま隠し通す気かよ？」

「……アイツにとってはな、俺はいないほうがいいんだ。今のアイツを邪魔したくはないのさ。」

「事がすんだら、また隠れるさ。ありがとっな、今まで隠してくれてよ……」

「……」

「じゃあな、と言うと赤い髪の毛の人物は屋上の扉を開けて、そのまま屋上を後にした。」

「ボタン、と鉄製の若干古びた扉がきしむ音が聞こえる。」

「不機嫌そうに舌打ちをして、」

「スキルアウトについて不満そうに話す御坂と白井のほうに視線をやりながら、励は呟いた。」

「……どいつもコイツも、面倒臭え……」

そんなこんなで、御坂と白井は能力者狩りの現行犯を捕まえてビツグスパイダーのアジトに乗り込むと言っただけに行ってしまった。

残された励はとりあえず、ジャッジメント風紀委員第一七七支部に不本意ながらも戻り、初春飾利とともにもう一つの事件について調べていた。

無機質な色のデスクに腰をかけてコーヒーを飲んでいた励に、パソコンの前に座っていた初春が声をかけた。

今、支部には二人以外の風紀委員はいない。

「神落さんの関わっていると思われる事件について、他の支部から報告がきてますよ」

「！」

励は急いでコーヒーが入ったままのカップをデスクの上に置き、杖を手にとって初春のそばまで歩く。

「報告の一つはどうかやら犯人グループは金目的ではないこと」

「……じゃあ、何なんだ？犯人の目的って？」



初春はほんの数回キーボードを叩くと、椅子を回転させて励のほうに振り返る。

「無能力者の襲撃、だそうです。何を基準に狙っているのかがわかりませんが……」

そう言っただけで初春は再びパソコンに向き合つと、被害者のリストを画面に表示させ、画面を励に見せながら

「これが今までの襲われた人たちですね。……正直、何故襲われたかのもわかりません……」

二つ目の報告は中々その集団が尻尾を出さないことくらいです」

「尻尾を出さない……か……」

静かに考えながら画面を見つめる励。

画面を見て、最初に励の目にとまったのは数人のレベル0。

(……レベルアップー使用者?)

深淵の中に飛び込んだ経験もあつてか、つい最近の事件に巻き込まれたはずの人物がリストの中に大勢いた。

「……」

一瞬、偶然かと考えた励だったが、即座にそれを否定する。

流石にそれはありえない、と。

励の考えに初春は気が付いたのか、声を上げて驚いたように目を見開く。

ビクッ！と身を引いて思わず驚いた励だったが、そんなことも気にせずに初春は告げる。

「レベルアップ使用者を狙っているのではないのでしょうか？」

「じゃあ関係ないやつが何故襲われているんだ？」

「これはきつとフェイクですよ！極力尻尾を出さない気みしたいですね……」

「なるほど、じゃあ俺が狙われた理由も一応理解出来るな……。  
しかしこう事件が重なると御坂まで忙しく……！」

励は愚痴を呟こうとした瞬間、急に顔を青ざめさせるとガタリ、とデスクから勢いよく離れて資料をデスクの上に放り出した。

「急ぐぞ、初春！！」

「！？」

その行動に驚く初春を前に、励は早口で説明する。

「普段俺たちといるはずの人物でレベルアップの使用者！！俺なら、今このタイミングで襲う！！」

いつも励たちと居た人物は、励や初春、白井が風紀委員シャッジメントでも御坂との交流があったりする。

しかし、今回は御坂と白井の二人は能力者狩りの事件のほうに、励と初春は無能力者襲撃事件のほうにそれぞれ関わっている。

犯人グループがレベルアップ使用者を知っていることからしても、御坂と白井の動向についても情報を入手しているに違いない。

つまり、彼女を狙うなら、今。

「急ぐぞ！！佐天が危ない！！」

そう言いつつ二人は支部を後にした。



## 第二十二話：フードの集団（前書き）

アニメ見ていただくと、やはり時系列がよくわか・・・る？かな？w

## 第二十二話：フードの集団

「ここから先、

数十メートルの所で佐天さんと思える人物が走っていった映像があります！」

第七学区のとある通学路を走りながら、初春飾利は横を走っている神落励にそう言った。

彼女は手に小型の携帯端末を持っており、それを両手で操作しながら走っている。

「それ以降は！？」

焦った調子で励はそう初春に向かって尋ねた。

彼は杖無しでは一週間は歩くこともままならないはずだが、魔術で身体能力を強化することでようやく普段どおりの動きを出来るようになっていた。

彼の若干辛そうな表情と、今まで彼がこの方法を使用していないことから相当体に負荷がかかることがわかる。

そんな励のことを心配そうに見ながらも初春は答える。

「無し、です！！おそらく犯人も監視カメラがある場所をさけたんでしょう！！」

「クソツ！！じゃあどこを探せば！？」

悔しそうに舌打ちする励に対し、初春は黙って周囲を見渡した。

綺麗に整備された道路に、道にそう形で並ぶ店。人が多く居て、とても何かを出来そうではない。

だが路地裏への入り口などは街路樹の陰になってしまいがちである。

「路地裏です！！神落さん！！一般の道なら、通行人が通報するでしょうし、路地裏で見失うのが一番危ないです！！」

路地裏を手分けして探しましょう！！」

「ああ！！」

そう言いながら励は真っ先に路地裏に飛び込みそうな勢いで入っていく。



(いない！？・・・クソ、急がないといけないのに！！)

路地裏で励は佐天を見つけられずに、ひたすら走り回っていた。

一向に分かれた初春からも連絡が来ない。おそらく見つかってないのだろう。

灰色の壁が、心のおくまで灰色に変えてしまいそんな感覚に陥った。

不安が、こみ上げる。

(すでに誰かに捕まった？それにしちゃあ静か過ぎる！！悲鳴一つ聞こえてもいいんだけどな・・・)

焦っても見つからないと自分を落ち着かせつつ、彼はあたりを見回そうと立ち止まる。

呼吸は荒く、相当走ったものと見てもいいだろう。

「クソッたれ・・・」

悔しそうに呟き、道幅4メートルほどの通路に出たとき、彼はふと背後から足音が聞こえた気がした。

逃げ惑うような忙しい音ではない。気配を殺すかのような、背筋が凍りそうな足音。

「ッ！！」

とっさに前に飛び出し、前転しながら距離をとる。

刹那、バチィッ！と電撃らしきものが励の先ほどいた場所を射抜く。

「ツツ！！？」

すぐに振り返り、立ち上がるとそこにはフードを被った人物が驚いた様子で立ち尽くしていた。

フードで顔がよく見えないが、体つきやはみ出ている綺麗で茶色い髪から、その人物が女ということはある。

「っ……」

「さっきの一発で決めるつもりだったんだろ？佐天はどこだ？」

嘲るように笑い情報を聞き出そうと試みる励だが、相手は口元を少しゆがませると

「残念ー 私の狙いはね。元々貴方だけなの」

「！……？」

フードの女が楽しそうにそう言い放つと、

どこに隠れていたのかゾロゾロとフードを被った集団が励を囲むようにして現れた。

ザッと見て20人といったところだろうか？

励は眼球だけ動かして周囲の状況を確認する。

(・・・くそ、足止めか・・・不味いな)

路地裏の狭い空間に大量の能力者。さらには半ば無理矢理動いている励。

一斉に能力を使用されれば、耐え切れる自信がない。

仮に防げたとしても、確実に励の限界が来る。

それほど彼は魔術で体を強引に動かしているのだ。

普通の魔力とは違う特殊な魔力を使用しているために、彼自身に負担がかかる。

さらにはその状態を今はずっと維持し続けた、魔力を常に出している状態だ。

嫌な汗をかきつつも、彼はフードの女に向かって力強く問う。

「・・・何が目的だ？」

佐天や他の被害者といった、レベルアップ使用者が狙われる意味がわからない。

「答える！！！」

「殺っちゃえ」

フードの女は、そう言い放つ。

と、同時にドオッ！！と突如、励を爆発が襲った。

周囲の能力者達が一斉に能力を使用したのだろう。

励の居た場所だけでなく、周囲の壁さえも開通しない程度に砕け散る。

パラパラと音を立てて降り注ぐコンクリートの破片を手で払いながらフードの女は粉塵で見えなくなっている、励のいる場所に目をやった。

アレは避けられない。確実に直撃したはずだ。

周囲の能力者たちも手ごたえから確信したのか、肩の力を抜く。

その瞬間だった。

「・・・面倒だよ、本当に」

「つつつ!!」

粉塵が晴れた中から、声が聞こえた。

虚を突かれたために一瞬体を動かしてフードの女は驚いた。

粉塵が晴れた中から現れる筋を見て、ありえない、と周りの者も絶句する。

無傷なわけではない。

無事でもない。

ただ、あれだけの爆発の割にはかすり傷程度の傷しかないというのは、あまりにもおかしい。

(・・・全方位からの様々な能力による攻撃を受けて、あの怪我?)

「何を企んでるかは知らない。好き勝手にやればいいさ。でもな、それで誰かが傷つくのなら見過ごせない。」

俺が止めてやる!!」

「面白いこと言うね。でも私には知ったことじゃあないの」

フードの女はそう言い切ると、右手を前に出し、ニヤリと笑った。

能力に相当自信が、あるためだろう。

「そんなこと言われても、私は止めないわ  
よっ!!!!!!」

バチィッ!と電撃が炸裂した。

青白い電撃が周囲を照らし出し、ほんの一瞬だが周囲の者は突然雷が振ってきたかと錯覚した。

もちろん、電撃は音よりも速いのでこの時点ではもう目標に届いている、はずだった。

「効くかよ!!」

電撃は励が手を振り払う仕草とともに、ボロボロになった地面に直撃する。

正確には極小サイズの魔法陣を掌で作成し、電撃を逸らしたのだが、励以外の者がそれを知るはずがない。

「!?!?」

目を見開いて驚く敵の前に、励は脳裏に男勝りな性格の電撃使いエレクトロマスターを思い浮かべる。

(あつちはあつちで大変そうだが、まあ、心配には及ばないだろう。・アイツに頼んどいたしな。・。)

それより、とエメラルドグリーンの魔法陣を足元に出現させた。佐天や初春のほうが心配だ。

早く向こうに向かうべきだろう。

「……………そこをどいてもらおうぞ!!--」

「どうなってるの？」

佐天は路地裏を駆けながらそう呟いた。

通学路を一人で歩いていたら不良っぽい人物数名に絡まれ、それから逃げていたら路地裏に逃げ込むしかなかった。

そこまでは理解できる。しかしそれから後が問題だった。

路地裏に入った瞬間から、急激に追っ手が増え、

明らかに圧倒的に敵意を向けられた能力による攻撃が彼女を襲ったのだ。

普通の不良ならば、人目は一応気にするにしろ、ここまで人目など気にしないだろう。

女子中学生の小柄な体を利用して何とか一時的に撒くことに成功したのだが、油断は出来ない。

(・・・初春・・・)

ポケットの中にある携帯電話を意識する。



先ほどから警備員アンチスキルに通報しようとしたが、何故か携帯電話が繋がらない。

自分の友人を巻き込む心配もない、と考え方を変えて再びどの方向に逃げるか考える。

普通に逃げても、先ほど路地裏まで誘導されたように嵌められては、意味がない。

(・・・)

とりあえず動こう、と足を進めだした時、不意に正面の曲がり角から人影が出現した。

「ッ!!!?」

向こうの勢いと追っつかという考えから驚き、一瞬すさまじい冷や汗が出たわけだがその人影は小柄で、かといって襲ってくる気配もない。

見覚えがあると人物だったために目を丸めて驚く佐天に、人影は声をかける。

「佐天さん!!!」

「!!!?」

状況がよくわからない佐天だったが、初春の表情から自分を探していたことくらいは見当がつく。

「大丈夫ですか！？怪我はしてないですか！？ああっ！？足から血が！！ま、待ってくださいね。

今すぐ手当てしますから！！」

足のかすり傷を見て、騒ぎ立てる親友を前に呆れる佐天。

今までの緊張から少しだが開放されたのが自分でも理解できた。

クスツ、と思わず笑ってしまった佐天に初春は不機嫌そうに頬を膨らませると

「佐天さん、どうしてこの状況でわらっていられるんですかー？」

「いやーごめんごめん。何だか初春の反応が面白くってさ・・・」

手で制しながら謝る佐天。

この二人のやりとりを見る限り、今異常事態が起きているとはわからない。

いつも通りの光景。

しかし、それもある声とともにすぐに消え去ることとなる。

「残念。これでチェックメイトだな」

フードを被った集団が、二人を取り囲むようにして現れた。

「ふわぁああ……何だよ……遅いな……」

路地裏への入り口で見張っているフードの男数人たちの内の一人は、  
疲れたようにだるそうにあくびをして  
路地裏のほうに目をやった。

一応一般の道だが、街路樹の陰にあることと周りのビルが高いため  
にどことなく薄暗い。

先ほどの二人は予定外だったといえ、計画に支障は出ないらしい。

と、言っても計画事態そこまではつきりとは知らないので、何を心配していいかわからないわけだが……。

暇な彼はとりあえず見張ることに集中しようと周りを見渡した。

何の変哲もない一般的な通学路、通行人。

その中に浮かび上がる、不自然なまでの白。

(……研究者か何か?)

白衣を着た人物が目の前を通り過ぎていくのに気が付いたのか、何人かの仲間もその人物を不審そうにみた。

研究者が何故こんな昼間から、道をぶらついているのか理解できない。

(……?何でこっちに?)

不意に目が合ったかと思うと、白衣の男は笑顔でこちらに歩み寄ってくる。

どうなっているか理解できないフード数人は、とりあえず視線をその男からはずし、

携帯電話を取り出し、いじることにした。

しかし、白衣の男はフードの集団の前まで来ると、柔和な表情のままで話し出した。

「僕、ちよつと道に迷っちゃってさ。よかったら、道案内してくれないかな？」

「君たち、ちよつと暇そうだしね」

---

---

赤い髪の人物の正体は、本物の黒妻綿流だった。

ビッグスパイダーの隠れ家で、キャパシティダウンという奇妙な装置を使われ、能力が一時的に使えなくなった

御坂美琴と白井黒子は赤い髪の人物により助けられた。

その際、蛇谷、と赤い髪の人物に呼ばれた黒妻（偽）が、赤い髪の人物のことを黒妻と呼んでいたことから

発覚したわけなのだが・・・。

「……頼まれてきたんだよ」

「誰によ?」

黒妻は不機嫌そうに尋ねる御坂に呆れたような視線を向けた。

ストレンジの中の、先ほどまではビッグスパイダーの隠れ家の一つだった場所に黒妻、御坂、白井黒子の

三人はいるわけだが、何故か二人の窮地を救った黒妻が疑われているらしい。

沈みかけている目を見ながら

「お前さんたちと前一緒に居た少年にだよ。偶然会ったからな」

「神落さんですか?」

「確かそう名乗ってたなあ……」

と、黒妻は目をそらし、どこか遠くを見る。

嘘をつくことが苦手なのか、それともそこまで嘘を付く気がないだけなのかはわからない。

御坂はさらに不機嫌そうになると、低い声で呟く。

「アンタ、アイツと知り合いなの？」

「……」

「神落さんとはどういった経緯で知り合ったんですの？彼は風紀委員ジャッジメンですし……」

首をかしげながら御坂と同じように問いかける白井。

やはり、不可解な点が多いらしい。

その様子から何かを悟った黒妻は適當そうに

「ま、ちょっとした知り合いってやつだ」

そう言いつつ、黒妻は二人に背を向けて歩き出そうとした。

そこで、持っていた紙パックの牛乳を口に含みつつ

「やっぱり牛乳は」

「ムサシノ牛乳」

ある一つの声とともに黒妻の足がピタリと止まる。

虚をつかれたようにも見えた。

ほんの少し、誰にも悟られないようにかすかにため息を呆れるように吐いた黒妻は

ゆっくりと振り返る。

その声の主を、黒妻は知っている。

下手をすれば、同じ風紀委員ジャッジメントであるツインテールの少女よりも。

「久しぶりだな、美偉」

「へ？」

「え？」

どことなく切なげな表情の固法美偉が、黒妻の背後に居た。

状況が全く理解出来ない御坂と白井はもう一度状況を整理しなおす。

久しぶり？

美、偉？・・・呼び捨て！？下の名前で！？







## 第二十三話：訪問者

「……っ!!」

初春飾利と佐天涙子はどうすればいいか悩んでいた。

日は沈みかけていて、あたりは薄暗い。

周りには、フードの集団。

携帯電話は繋がらない。

「……諦めろ、助けは来ない」

フードを被った集団の一人の男は、そう言い放った。

追い討ちをかけるような一言と、薄暗い明るさと、路地裏の狭さが、恐怖を煽る。

（ど、どうすれば、ここは路地裏、一か八かって考えでも逃げられない。

腕でも掴まれれば本当にもう!!……）

ジリジリと歩み寄ってくる集団を前に、思わず座り込んで目をつぶる二人。

足は恐怖で動かない。

絶望。

まさに、その時、やけに爽やかな青年の声がした。

「うわー・・・スッゴイ場面に遭遇しちゃったなあ・・・。

駄目だよ駄目、君たち。女の子を集団で襲うのは感心できないなあ」

声に驚き、目を開いて初春と佐天は声のしたほうを見た。

そこにいるのは、柔らかな笑みを浮かべた白衣の青年。

フードの集団も予想外の訪問者には驚いたらしく、一斉に警戒心を強めてそちらを見る。

「ほらほら、そう怖い顔しないでさあ。アメ、いるかい？」

青年は白衣のポケットに手を突っ込んだかと思うと、そこから棒っきのアメを取り出し、一番近くに居たフードの男に渡した。

流石にその人を小ばかにしたような態度に、むかついたのだろう。

一人のフードの男はズカズカと青年の前まで歩み寄ると低い声で

「テメエ、うざったらしいんだよ……。何もんだ。あ？ヒーローごっこならよそでやれ」

その言葉が終わると同時に、複数のフードの男が一斉に能力を使用し、白衣の青年に攻撃を叩き込んだ。

炎やら電撃やら氷やら水やら、光線やら様々なものが青年の居る場所に叩き込まれた。

だが、

「おお、怖い。この娘たちももう少しであんな目にあうところだったのかぁ……」

いつの間にか青年はフードの集団のど真ん中　　つまりは  
初春と佐天のいる場所まで移動していた。

先ほどまで自分がいた場所を見ながら、青年は続ける。

「確かに、犯罪者である僕がヒーローみたいに振舞うのは無理だなあ……」

「「っ!？」」

犯罪者という言葉に一瞬身をすくめた佐天と初春だったが、初春はこの人物の顔をはっきりと見た瞬間、思い出した。

確か、レベルアップ事件で暗躍した……。

名前までははっきり覚えていない。

だが、わかる。

この人物は、やはり危ない部分がある。

人間として、狂っている部分が……。

「僕はさ、ただ通りかかったただけなんだ。だから事情も何も知らないし、通報するつもりもない。」

だからひいてもらえないかな？」

「ああ？舐めてんじゃねえぞ！この人数を前にかてると思ってるのか？全員高レベルの能力者だ！！！」

「それなら、いいんだよ」

ぞぞぞぞぞぞぞぞぞぞぞぞぞぞぞぞ！！！！！！

青年が不適な笑みを見せた瞬間、周囲の人間全員が恐怖を感じた。

不気味さ、と言ってもいいかもしれない。

（な、何だコイツ・・・）

フードの男は思わず後ずさりする。

目の前に居るのはただの青年のはずだ。

だが、違う。

自分たちもある程度問題になるようなことをしているにしても、桁が違う。

平気で人に嘘をつけるタイプ、が近いかもしれない。

もっと細かく言えば、嘘をついてるといふ自覚さえないレベルの人物。

だが、自分たちは知っている。

この青年に近い、いや、それすら超える人間を。

そして、自分たちの目的も。

「・・・舐めてんじゃねえぞお！！！！やっちまえ！！！！」

おおおおお！！、と一斉に周囲のフードの集団は能力を使用し始める。

それに不安があふれかえる初春と佐天に、白衣の青年はわかりきったように言い放つ。

「大丈夫。二十秒で終わるさ」

ゴオッ！！と一陣の風が白衣の青年の周囲に吸い込まれるようにして現れる。

髪が風によって乱れ、思わず目をつぶる初春と佐天。

そうしてる内にどんどん風は強くなり、突風と化す。

周りの能力者の集団は体が吹き飛ばされないように踏ん張っているところを見る限り、

初春と佐天の周辺だけは風が弱くなっているらしい。

「ハハハハ、ハハハハハハハッ！！反撃するなら今の内だよ？

僕の力は、あまり風を操ることには長けていないんだけどさ。



この場所が路地裏だからね。僕にとっては有難いことさ。」

スツ、と青年の右腕が前に差し出されたかと思うと、青年はその腕を大きく右へ払った。

軽い仕草から巻き起こされるは、災害クラスの烈風。

ブォッ！！と吹き荒れる烈風を前に、フードの集団の半分が吹き飛ばされ、壁に叩きつけられる。

ほんのかすかに肉や骨が砕ける音が複数聞こえたが、吹き荒れる風のせいで初春や佐天の耳には届かない。

その光景に震え上がるフードの集団の残り半分が、思わず叫びながら青年に背を向ける。

明らかに少女を守る、という目的であったならばこれだけでも十分だろう。

しかし、青年は先ほど自分で言ったように、ヒーローではない。

「背を向けるとは、良い判断とは言い難いね」

いきおいよく振り返ると同時に今度は左手を振るう。

グオツ！！と二撃目の嵐が炸裂した。

コンクリートの地面がボロボロになり、残り半分のフートの集団が吹き飛ばされる。

ある者は上空へ吹き飛ばされてから落ち、ある者は直線方向に勢いよく飛び、曲がり角で壁に激突、

またある者は吹き飛ばされると同時に壁に背を打ちつけ、ズルズルと崩れ落ちる。

青年が攻撃を終えた瞬間、吹き荒れていた嵐は消え去る。

ドサツ、と人の体が地面に崩れ落ちる音だけがやけに鮮明に聞こえた。

青年はほんのしばらく周囲を見回した後、二人の少女の下に歩み寄る。

その瞬間だった。

タツタツタツ、という足音が向こうのほうから聞こえてきた。

(・・・)

増援かと一瞬警戒した青年だったが、足音の急ぎ方からそうでない  
と判断する。

その足音は青年の正面の曲がり角まで来たかと思うと、すぐにこちらに声をかけながら顔を出す。

「無事か！？二人と

！！？」

足音の主である神落励は信じられないとばかりに目を丸めて驚く。

周囲には倒れているフードの集団。

その中央にいる座り込んだままの初春と佐天。

そして、

「な、奈落・・・・・・・・・・信哉？」

以前敵対したはずの、奈落信哉という人物が、二人の傍にいたからだ。

「……いやー。まさかこんな事態に遭遇するとは夢にも思わなかったなあ」

「いや、そろそろくるかとは思ってたけど……支部に何故来なかったんだ？」

ジャケット  
風紀委員第一七七支部で、銀色のデスクに腰をかけながら励は奈落に話しかけていた。

すぐ近くのソファには、佐天と初春が疲れきった様子で腰を下ろしている。

アレから励は自分が倒したフードの集団と、奈落が倒したフードの集団を警備員アシスキルに引き渡したが、

持ち物、名前などを調べても、特に得られることはなかった。

「いやー道がわからなくてさ。迷ってたんだよ」

真剣なのか、本気なのかわからないような物言いをする奈落に励は眉をひそめる。

「まったく、で？任せたいことって何だ？」

呆れたように問いかける励に、奈落はニヤリと笑う。

「それはまあ、後でわかるさ。後宅配便もあるんだけど、今はそんな雰囲気じゃないし……」

よくわからないことを口にした奈落だったが、話の方向が真剣な方向に向かったので後で聞くことにした。

励は今、現代的なデザインの杖を右手に持っている。

あの後から励は全身が軋んでいた。

やはり、先ほど魔術で身体補強しつつ動き回った上に、別の魔術を重ねて使ったツケがきてるのだろう。

流石にこれ以上の無茶は出来ない。

面倒だが、杖を使うことが一番体に負担をかけない。

「……アイツらの上……つまりは指示してるやつがわかればないんだけどな……」

ボソツ、と呟くように言う励を前に、初春と佐天は顔を曇らせる。

見つかるかどうかわからないくらい、相手は慎重なのだ。

おそらく、主犯格と今まで捕まえた人物たちに交友関係はない。

ネットか何かで収集したのだろうか、そのサイト自体どう処理されたのか、見つからない。

(・・・)

部屋内に広がる沈黙。

「ねえ、」

その沈黙を破ったのは、何故か笑みを浮かべたままの奈落だった。

「被害者のリストを見て気になったんだけどさ」

と、デスクの上のパソコンを勝手にいじりだしたかと思うと被害者のリストを表示する。

「正確には、スキルアウトのほう、能力者狩りのほうなんだけど・・・」

カタツツ、とキーボードを弾いてある一名の詳細を画面に拡大する。

「レベル0が、たった二名いる」

「・・・」

「それだけじゃない。レベルアップ使用者だ」

「・・・いつの間に・・・」

見落としていた、とばかりに励は目を丸めるが、それも敵の策略だったのかもしれない。

襲われた人数が肥大化している中、一名一名を探し出すのは困難だ。

「ここから僕が弾き出した結論なんだけどね」

ここで奈落はパソコンのモニターの電源を切った。

白衣のポケットに手を突っ込み、アメを取り出すと、口にそれを含む。

慣れた手つきだった。

「主犯格は二人・・・何れもある組織、に深く関わってる」

ある組織、に気づいたのか一同の顔が一層険しいものとなった。

唾を飲み込む音だけが聞こえる中、強張った表情で初春は尋ねた。

「……その組織、とは？」

奈落はデスクから飛び降りると、かすかに含み笑いを見せ、そして言う。

「もちろん、決まってるじゃあないか。」

『ビッグスパイダー』だよ」

翌日。

昨日の奈落の推理の確証を得るために片っ端からデータをまとめていった初春と励（そして佐天も）。

奈落の推理はほぼ間違いないものと結論付けた三人は、とりあえずビッグスパイダーについての情報を得るために

御坂美琴と白井黒子の二人と合流し、いつもと同じ第七学区のとあるファミレスに五人はいた。



と、御坂の話した話に、佐天が大声を上げて驚く。

「固法先輩と黒妻が知り合いーーーーー!?」

「ビッグスパイダーのボスですよね？」

すかさず尋ねる初春に、ほんの少し戸惑ってどう説明すべきか考える。

えーっと?どこから話せばいいのやら……。

黒妻は黒妻じゃあなくって、本物の黒妻が……ってややこしいわね!!

「その黒妻と、固法先輩がどうして!？」

「そんな寄ってたかって女の子を襲うようなやつと!？」

「うえ……あー、だからね!その黒妻じゃないの。そうじゃないの……ええっーと?」

二人の当然とも言える反応に、思わずどう説明すべきか再び考え直す。そうとする御坂。

先ほどまでドリンクを混ぜていたストローが、より勢いよくまわされる。

初春と佐天と励は何も知らないはずなのでこう質問攻めになるのは半分わかっていたが、やはりうまく説明できない。

と、そこで御坂は気づいた。

異様なまでに静かな励と白井に。

「ちよつと黒子！アンタからも説明しなさいよー！」

落ち着いた様子でコーヒーを飲んでいた白井は、ゆっくりとした動きで口からカップを離すと

「縁はいなもの味なもの。この件に関しては、わたくし静観させていただきますわ。」

それよりも、わたくし的には何故、神落さんと黒妻が知り合いたったのか気になりますけど・・・」

ギロリ、と一同から視線が集中し、励はうっ！とつめき声を上げて、精神的に二、三步後ずさりした。

疑心に満ちたものもあつたが、半分以上はどこか好奇に満ちている目だった。

(・・・黒妻のやつ・・・何ばらしてんだ・・・)

心の中で愚痴つても、この状況は切り抜けられない。

ならば、方法は一つしかない。

「そういえば、固法先輩、今日も支部に来てないよな・・・」

「・・・結局、逸らすんですの?」

「ああーもう!? 気になるーっ!! もやもやするーっ!!」

ついにしびれを切らした佐天が大きく頭を抑える仕草をし、

「こうなったら!! 先輩に直接聞いてみよう!!」

固法美偉の借りている部屋に直接訪ねることになった。

「・・・だるいぜ」



## 第二十三話：訪問者（後書き）

禁書のほうのストーリーに、励を絡ませるか迷っています。

出来れば感想をいただきたいです。

第二十四話・過去（前書き）

更新遅れました！すいません！

## 第二十四話：過去

とある寮の部屋のドアの前で、チャイムなどによく使われる電子音が響いた。

時間帯的には、昼過ぎでまだあたりも明るい中、神落励、御坂美琴、白井黒子、初春飾利、佐天涙子の

五人はドアを前に佇んでいた。

五人の目的は固法美偉に、黒妻綿流のことをたずねることだった。

どことなく不機嫌な励が、玄関の呼び鈴を鳴らした直後だった。

ドタバタとほんのしばらく足音が聞こえてから、ドアの前で鍵を開ける音がした。

そして、ドアが開く。

固法が出るのかと思っていた一同は、思わずどう反応すべきか戸惑った。

出てきた長髪エプロン姿の人物は、

柳迫 碧美あすみという人物で固法のルームメイトなのだが、当然御坂た

ちが知る由もない。

だが、励は平然とした態度で優しいお姉さん像の柳迫に話しかける。

「……お久しぶりです。碧美先輩」

その言葉にしばらく励たちがきた理由を考えた柳迫は目を突然輝かせると

「あ、励くん！どうしたの？　　ハっ！？ついに恋愛の相談に！？」

「……何でそうなるんですか……固法先輩はいますか？」

何故か励とその後ろの少女たちに興味深々の柳迫を見て、呆れた様子でため息をつく励。

慣れた様子で励が話している理由は、よくこの先輩を知っているからだ。

関係は先輩と後輩というものよりも、どちらかというところサボリ仲間に近い。

青春を楽しむ、などといったふざけた理由があっても、この先輩は何故か怒られない。

「後ろの人たちは美偉の後輩？……美偉なら今いないわよ？」



「……わかりました。じゃあ、今日はこれで……」

励を含めた五人は軽く柳迫に頭を下げ、玄関を後にしようとした。

そこで、ふと佐天は悔しそうに呟いた。

「……あーあ、先輩に黒妻のこと聞きたかったのになあ……」

( ……! )

「ちょっとまって!」

何か思い当たる節があったのか、柳迫は玄関から飛び出し、その場から去るうとして五人を呼び止める。

?、と全員が首を傾げた。

「そっか……」

とりあえず部屋の中に入れてもらった五人は、リビングのテーブルに腰をかけ、

出されたジュースを飲み終え、柳迫に事情を話した。

黒妻と固法がお互いのことをよく知っていそうなことや、固法が支部に顔を出さないこと。

黒妻がビッグスパイダーを撃退していたこと。

柳迫はほんの少しため息をついた後、懐かしそうに目を細めてこう言った。

「通りでね・・・」

同僚の違和感から、思い当たる節があったのだろうか？

柳迫が固法と黒妻の関係をよく知っているのは確からしい。

「あの、黒妻と固法先輩はどうして知り合いなんですか？ひょっとして、昔に先輩が黒妻を捕まえた、とか・・・」

ガタリ、と勢いよく御坂は席を立って柳迫に尋ねる。

だが、柳迫は軽い感じで笑いながら手を振ってそれを否定する。

「違う違う。・・・美偉はね、昔、ビッグスパイダーのメンバーだったの」

「「「「ええええええええッ！！？」「」「」」」」

さらっと言い放たれた真実を前に、励以外の四人は驚いて思わず席を立て顔色を変える。

嘘をついている様子はないのだが、やはり冗談としか思えない。

「ありえないっ！！いくら何でもそれはないっ！！」

席を立て佐天は勢いよく否定する。

今の固法を知っているなら、当然と言っていい行動だった。

それほど、固法美偉という人間は頼りになる先輩なのだ。

佐天の言葉に続いて、初春は言う。

「だって、先輩は風紀委員ジャッジメンですよ！！？」

初春の言葉に、クスツと柳迫はおかしそうに笑うと、励のほうを見ていじわるそうに告げる。

柳迫が何を言おうとしているか、励は気づくのに遅れたため、彼が気づいたときには彼女はすでに言葉を発していた。



「もしかして！？実は！！？金髪だったとかツー！？」

異様なテンションの二人につめよられる励。

助けを求めるように励は柳迫のほうに目をやるが、彼女は楽しそうに笑みを浮かべたままこちらを見ているだけだ。

励は二人の迫力に押され、焦りながら説明する。

「おいおい！確かにそうだったけどな！！お前らのスキルアウトのイメージとは全然違うからなっ！！」

「って先輩ッ！！何さらっと言ってるんだよ！？」

途中に秘密、とまでいかないにしろ、人の過去を軽く言い放った柳迫に青筋を立てながら励は叫ぶ。

しかし、柳迫はそれとなく初春や白井と何か話し始め、励を華麗に無視する。

「・・・」

「ちょっと！？ビッグスパイダーじゃあないなら、どうしてアンタは黒妻と知り合いなのよ！！」

ビッグスパイダーである黒妻を知っていることと、

励がスキルアウトであったことは関係あるか無いかぐらいのもので、事情を知らない御坂たちには到底わかるはずがない。

もつとも、励がスキルアウトだったのは、ジャッジメント風紀委員になる前の  
ここ最近の話だということも。

そんなことを頭の隅で考えている励に佐天は続ける。

「っていつか神落さんは最初から黒妻と固法先輩の関係も知っていたんじゃあ!？」

「・・・ぐツ!？」

「じゃあ私たちのあの悩みようは何だったのよ!!最初から知ってるなら言いなさいよ!!!」

御坂はそう言い放ちながら、励の襟首を掴んでジト目のままブンブン前後に揺さぶる。

突然の上、かなり激しかったので、励は思わず目を回す。

彼の座っている椅子がギシギシといやな音を立てながらゆれる。

「ミサ・・・おちつ・・・し、ぬ・・・」

口から泡を吹きそうな状態になっている励を見て、慌てたように佐天が励の後ろからフォローに入ろうとする。

「まあまあ、人の過去を言いふらさない、口の堅い男、ってことで

いいじゃないですか？

ね？御坂さん？」

「まあ、そうとれなくもないわね……………」

佐天の言葉に、御坂は納得したようにうなずいた。

怒りが収まったのか、ただ落ち着いただけなのか、励の襟首を握っていた手をパツと放す。

勢いよく頭を揺さぶられていたのに、突然放された衝撃で、励は椅子ごと後ろにひっくりかえった。

「うおおッ!？」

がッ!!？」

「きゃッ!？」

頭を打つことをさけるため、体を捻り横にこけた励だったのだが、彼はあるものにひっかかり額から床に落ちる。

「痛つつつ……………」

額を抑えながらも起き上がる励。

彼の今の体勢は四つんばいの状態で、体を起こすために右手を動かした瞬間だった。

「ひゃづつ!?!？」

「……ん？」

柔らかな感触がしたと思い、視線を手のほうにやった。

そこにあるのはセーラー服の胸にあたる部分。服のそこだけが干切れるなどということはない。

そして、励の目の前には、仰向けになって倒れている佐天。

つまり、励が今触れているのは……。

(……)

思考が一瞬停止し、思わずこの場から逃げたくなる励だが、その考えを否定し、とりあえず

かなりの速度でそそくさと佐天から離れ、床に転がった現代的なデザインのリックを拾う。

頬を赤らめ目を逸らす佐天にどう謝ろうかと、普段はそこまで働かない脳で考える。

こんなときだけは以上に早く動いたらしい。

「う、ごめん！！佐天！！！！！！悪かった！！その、うん、……  
本当にごめん……」

たどたどした調子で話していた励のだが、途中から先ほどの感触を思い出し、沈みながら謝る。

佐天もとりあえずどう声をかければいいのかわからず、考え、謝ろう



とした瞬間だった。

そこに、鬼神みまがが降臨する。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「み、御坂・・・・・・・・さん？」

バチッ、とほんの少しだが何だか嫌な予感がする音が聞こえた。

顔を青ざめ、御坂のほうに振り返ると、

そこには先ほどなどは比べ物にならないほどの殺気を放つ御坂の姿が。

流石に白井も呆れたのか、ため息をついていて、初春は何故か顔を真っ赤にしたままである。

佐天はやはり恥ずかしいのか、励から目を背けていて、柳迫はずっとニヤニヤ笑っている。

「ア・・・・・・・・ン・・・・タ・・・・ねえ・・・・・・・・」

バチバチッ！、っと御坂の頭から青い火花が飛び散るのが見えた。

「いや、これは、ですね？事故というかその・・・・ってかお前のせいだろ！！？」

「……つるさいわよ」

「理不尽だ!!何でお前がそれで怒」

「……死ぬ覚悟は出来てるわよね?」

完全に殺る気満々の御坂に、言葉は通じない。

周りの電化製品は、幸いある程度距離をとっているために大丈夫だろうが、

励が電撃をガードすればどうなるかは目に見えている。

励は今度こそ、俺死んだかな、と悟る。

「こんのお……スケベ野郎おおおおおおおおおおお  
おおおおおっ!!」

青白い電撃とともに、あたりに一人の人間の悲鳴が響いた。

そんな中、初春は苦笑いのまま思い出したように言う。

「……って固法先輩の話をお忘れていませんか……?」

「……わからない」

「……面倒だ」

日の傾き始めた帰り道にて、御坂は不機嫌そうに呟いた。

励もその様子を見て、現代的な杖を突きながらもため息をつく。

五人は支部への道を歩いていった。

あその後、柳迫に固法の黒妻と知り合った話、それから今までの話を聞いた。

なるほど、と納得したのか、励たち四人は固法の心情を考え込むような表情でいるが

御坂だけは不機嫌そうな顔で先ほどからわからないと呟いているだけである。

先ほどの励の言葉を前に、御坂は自然と足を止めた。

横の車道を車が通り過ぎていき、その風で髪がなびく。

「固法先輩がスキルアウトだったのもシヨックだけど、  
ジャツジメント  
だからって何で風紀委員を休んでるわけ？

何か関係あるわけ？」

「ですから、それは」

白井は御坂をなだめるように説明を始めようとした。

しかし、御坂は勢いよく振り返り、反論する。

「昔は昔じゃない！！今は先輩、ジャッジメント風紀委員で頑張ってるわけじゃない？

私たちにも優しくくて、たまに厳しくて、頼りになって、そんな先輩が好きなのに、何でいまさら・・・」

「そんな簡単に、割り切れないんじゃないかな？」

ふと、口を開いた佐天の前に、皆が黙った。

励は目をつぶって話に集中する。

「過去の自分があって、今の自分があるわけだし、  
それに」

そうだ。

簡単に捨てられないモノが、過去でもあるのだ。

どんなに捨てたくても、捨てられない時だってある。  
過去を乗り越えなきゃならないこともある。

少女は、知っている。

過去の事件が、自分に教えてくれたことを。

本当に大切なものを。

「その過去が特別なものだとしたら、尚更……ってっえ!？」

四人から注目されていることに今更気づいた佐天は、驚いて声を上げた。

そんな佐天の話を聞いた励は、御坂に微笑みながら言う。

「人には過去と向き合う時があるってことだよ。俺たちはまだまだだからな。

今は、御坂みたいにわからなくても、いいんじゃないか……？」

ニカッ、と無邪気に微笑む励から、思わず御坂は目を逸らした。

少し話を逸らすように、呟く。

「あぁー！もう……わからないわよ……」

「ま、御坂らしいな」

誰にも聞かれないように励がそう呟いた瞬間、励の懐にある携帯電話が鳴りだした。

突然の着信にその場にいた全員が肩を動かして盛大に驚く。

「誰からですか？」

白井は励の手元を覗き込みながら尋ねた。

励は適当に返事しながら、携帯電話を取り出し、画面を見る。

奈落からメールが送られてきたようだったのだが、励が注目したのはそこではない。

メールの内容に目を通すや否や、真剣な表情になると、覗きこんでいた白井に画面を見せた。

白井も、その内容に目を見開いて驚く。

From: 奈落信哉

Sub: 事件に対抗して……

本文: おそらくだけど、

ビッグスパイダーに無能力者狩りの主犯格が

潜り込んでると言ったよね？

そこで警備員アンチスキルに交渉して、

明日にストレンジの一斉摘発を行ってもらうことにしたんだ。情報が極力漏れないようにしたいから、初春さん？ だっけ？

ちよつと力を貸してくれないかな？

簡単に言おう。

明日で両方片付ける。

黒妻の運命を左右する問題だった。

第二十四話・過去（後書き）

本当にこの小説はアニメを見なきゃわけがわからないですねw

わかるようにしたいんですけどねw



## 追加 主人公の魔術説明

主人公：神落励の魔術説明

### ・術式の変化

特殊な魔力を直接体から

放出すると、魔術自体が安定しないので、エメラルドグリーンで描かれた魔方陣（大きさは術者次第）

魔術自体の特性としては

魔方陣を介して魔力を純粹に炎や水に変化させることができる。

### ・魔術の持つ意味

天使は神の人形であり、

勝手に『裁く』ことは出来ないが、墮天使は自ら掲げた理念を元に裁く。

術式自体が『裁き』に入る

炎で悪を焼き払う。

水で罪人を清める。

相手の反撃を拒絶すべく魔方陣を盾に（限度あり）

正義の象徴たる光の槍で射ぬく。  
など

どれが『悪』でどれが『正義』かは『術者の価値観』に委ねられる。

そのため、歪んだ思想の持ち主が『裁き』を下すことも可能。

神や天使との交戦の末、

墮天使は地獄へ逃れることとなり、悪魔と呼ばれるようになったが、地域によっては神としてすら扱われることがある。

つまり、

『神聖』と『邪悪』の両面を色濃く持っている。

励の使用している霊装が『禁断の霊装』と呼ばれる理由の一つ。

ちなみに、励が奈落信哉の妹を助けた方法は

呪い、という邪悪な異物を魔力によって浄化したため

そのあとに特殊な魔力を生命力に還元し、弱っていた体力も回復させた。

## 第二十五話：ビッグスパイダー崩壊

「・・・状況は？」

薄暗い夜、先ほどまでビッグスパイダーのメンバーがいた場所に、フードを被った二人の少年が居た。

ここはストレンジのとある廃屋で、広さは運動場を少し縮めたくらい  
の広さだ。

廃屋、というよりは工場跡という表現のほうが正しいかもしれない。  
足元のコンクリートは、そこまでこの場所を使っていなかったのか、  
大事に使われてきたのか  
あまり汚れてはいない。

また、建物の隅には廃材が綺麗に並べられてあり、武器が何かを上  
に置くために使っているらしい。

二人の灰色のフードを被った少年の一人、背の高くないほうの少年  
は背の高いほうの少年に話しかける。

対して、背の高いほうの少年は

「・・・情報が完全に遮断されていてよくわからないが、どうやら  
アンチスキル警備員が騒がしい」

「そつか、」

「……余裕だな」

余裕そうな少年を見て、背の高いほうの少年は何故か不安を感じた。

この少年だけは、読めない。

この少年と自分は、主犯格だ。

この少年とも長い付き合いのために、それなりのことは知っているが、そんなことは関係ない。

どこかが、壊れている。

下っ端の報告にあつた奈落信哉という人間と同類らしいが、もうその部下すらこの少年は全て切り捨てた。

スキルアウトに潜り込み、キャパシティダウンの効果を打ち消す効果の極小サイズの機器まで、学園都市の得体のしれない部分と交渉して手に入れていた。

彼のフードからはみ出している茶色い髪が、隙間風によってなびく。

少年が答えるまで、少し間があつた。

「策なら、すでにあるさ。僕一人でも実行できる策がね……蛇谷を利用するのは飽きた。」

キャパシティダウンのデータさえ後は上に渡せば、もしもの時の

保険になる」

ただの一学生に過ぎない少年が、ここまでするなら、普通はそれなりの理由がある。

だが、それが歪んだ考えだとしたら？

(・・・やっぱり、相当狂ってるな・・・)

自分も同じように狂っている部分があると自覚しつつ、茶髪のフード少年はため息をつく。

「何にせよ、奈落って奴の登場は予想外だったな。神落励って奴の体調もある程度回復したし・・・」

「・・・君の望みどおり、強い奴と戦えるチャンスが出来たってことだよ」

おそらく、自分も使い捨てにされるであろうことは茶髪のフード少年にもわかっていた。

だが、知ったことではない。

(奈落信哉、神落励、御坂美琴、黒妻綿流・・・いいね)

口角を吊り上げて笑う茶髪のフード少年に、呆れたようにフードの少年は頭に手をやった。

ヤレヤレ、本当に狂ってるよな、コイツも。

「まあ、好きなだけ暴れるといいさ、雑賀隆二」

い）（ぶん。どれが相手でもかまわねえさ。強い奴と戦えればそれでいい）

クッククク、と笑いつつ雑賀、と呼ばれた茶髪のフード少年はフードをとる。

その仕草はまるで、運動会を楽しみにする子供のようにも見えた。

「お前こそ、計画しくじんじゃねえぞ。焰火九十九ほむたいひつくも!!」

お互い邪悪な笑みを浮かべながら、少年たちは外に出て、夜の闇に消えていく。

「……先輩……」

とある寮の中、一人机に固法美偉は向かっていた。

彼女の肘を置いている机は、よく整理されていて机の上には何も置かれていない。

部屋は暗く、窓から差し込む月明かりが、彼女の手元を照らしていた。

彼女の悲しげな瞳の先にあるのは、黒妻と自分の写った、携帯電話の写真。

夕方に御坂に言われたこと、その後に黒妻は一人でまた乗り込むつもりらしきこと。

今の自分の居場所を気にする黒妻は、どう言おうとも一人で乗り込む気だ。

ならば、ジャケット風紀委員を捨てても……。

しかし、それで黒妻が喜ぶだろうか？

納得するはずがないことくらい、冷静でない自分でもわかっていた。

しかし、どうすればいいというのであるのか？

「……………先輩……………」

静かに静かに、頬の下を光るモノが流れ落ちる。

「……はあ……」

「何よ？」

常盤台の寮の中の、唯一男子が住んでいる部屋 　 励の部屋で励は不機嫌そうに自分のベッドに腰をかけていた。

寝るにはまだ早すぎる時間だが、門限はもうとっくにすぎている。

とりあえず早く寝る準備が終わった御坂は暇つぶしに隣の部屋の励の部屋にきたわけだが、

先ほどから目の前に居る少年はため息しつかない。

そんな励に呆れつつ、御坂は励が使っていないほうの、空きのベッドに腰をかける。

誰も使っていないはずのベッドなのに、埃は全くついていなかった。

「いや、まあ、な。固法先輩だよ。悩みまくってんじゃねえのかなってさ」

「……そういや、アンタ、黒妻が生きてること知ってて、固法先輩にも言っただけでなかったんでしょ？」

思い出したように言う御坂は、ゲコ太というファンシーキャラクターの柄のついたパジャマを着ている。



対して励は、黒をベースにしてある涼しそうなシャツを着ていた。

おそらく、寝巻きとして使っているのだろう。

そして、右手には現代的なデザインの杖を持っている。

そんな彼はだるそうに御坂から視線を逸らすと

「……暇だからここにきたんじゃないのかよ……？」

「そうよ。文句あるの？」

「……ありません」

昼過ぎのことを思い出し、苦笑いを浮かべる励。

御坂は思い出したのか、顔を背けて不機嫌そうになる。

「だいたい、この美琴様が部屋に来ることをもっと喜びなさいよ。

普通ならもっと喜ぶわ」

「……なんとという自画自賛……」

励はそつと御坂に聞こえないくらいの声でそつと呟く。

対して御坂も気づかなかつたらしく、そつと自身のさらさらとした肩にかかるくらいの髪を指で弄ぶ。

「アンタはともかく、黒子がどうして固法先輩の気持ちかわかるのかがわからないわよ。」

何で私だけわからないのよ・・・腹立つ・・・」

「夕方、固法先輩にあつたんだろ？」

「それでもよ」

ムスツ、と頬を膨らませて腕を組む御坂を見て、励はホツとしたように微笑む。

「だからすぐに答えを求めるなって。いつか『こういつことなのか』って理解できる日がくるはずじゃねえのか？

実際問題、俺もそこまで理解できてるわけじゃない。気長に待とうぜ」

そう言いつつ、彼はベッドにゴロンと寝転んだ。

ポフツ、という音とともに枕が少し浮かんでは落ちた。

「アンタは気楽過ぎんのよ、と御坂が呟いているがそんなことは気にしない。」

「ま、固法先輩については俺の心配はいらないみたいだ」

彼は目をつぶり、寝る姿勢になって続ける。

片目だけ開けて、ニヤリと笑いつつ御坂のほうを見た。

「？と首を傾げる御坂を見据えつつ、気づかれないようにそっと囁い

た。

「いい後輩を持ったもんだなあ。あの人も」

---

---

翌朝。

朝日がさしこむとある寮の一室。

その中で、固法はクローゼットの前に制服姿でたたずんでいた。

部屋は整理整頓されていて、散らかっている様子はない。

朝日が眩しいのか、固法は再びカーテンを閉めてクローゼットの中を見つめた。

クローゼットの中にくっつか紛れ込んでいるブランド物の衣服やバッグは彼女の趣味である。

そんな中、奇抜な赤い色をした革ジャンがやけに目立つ。

「・・・」

それはかつての自分の居場所、ビッグスパイダーにいた時のモノ。  
手放せない思い出と同じくらい大切な物。

黒妻から貰った、思い出の物だった。

「……」

固法は静かに右手に持っていたジャケット風紀委員の腕章を横の机の上に置く。

後悔はない。

ないはずなのに、どこかためらっている自分がいた。

「……」

ルームメイトは寝ている。

アンチスキル警備員の行動よりも先に、黒妻が動く可能性は100パーセントに近い。

黒妻はアンチスキル警備員のことを知らないが、すぐに終わらせると言ってる事から推測するに  
時間はない。

（私は……私は!!）

手を伸ばし、いきおいよく赤い革ジャンを手にとって羽織る。

「・・・」

無言で固法はビッグスパイダーのアジトに向かって足を進めていた。

固法の今いる場所はストレンジの大通りから、少し路地裏に入ったところで、

まだ朝方であることも含み、不良は見当たらない。

路地裏から見上げる空は、やけにすがすがしいほど青かった。

人気がない灰色の空間で固法は周囲を警戒しながら歩く。

一斉摘発はまだ行われていないことを確認しつつ、ため息をついた瞬間だった。

トン、と靴が地面を踏みつける音とともに、何もなかった正面に白井黒子と御坂と励が現れる。

おそらく白井の能力でここまでできたのだろう。

虚空に突然現れたことから紙芝居の絵を、一枚めくったような印象を受けた。

「どっしり・・・？」

何故この二人がここに来たのか理解出来ない固法は首を傾げて考えをめぐらせようとすする。

しかし、白井は御坂の肩に手を乗せた瞬間、御坂の姿が消えた。

「!」

と、自分の右隣に御坂が現れた。

彼女は固法が何か考え出す前に固法の赤いジャケットの上から何かをつける。

「ちよ、ちよっと!?!」

なれない手つきで付けられたのは、ジャケット風紀委員の腕章。

それも、赤い革ジャンの上から、だ。

「うん、やっぱりこうでなくちゃ!」

と、御坂はどこか自慢げな顔で腰に手を当てる。

その光景を見て、白井と励は微笑む。

赤い革ジャンの上から、ジャケット風紀委員の腕章。

つまりそういうことなのだ。

過去があるから、今の自分がある。

過去のために、今を捨てることなんて必要ないし、今のために過去を捨てる必要もない。

過去と今が重なって、自分がここにいる。

(・・・悩むこと、なかったわね・・・)

固法が悟ったことを知ってか知らずか、御坂は告げる。

「固法先輩                    カッコいいですよ」

固法はほんの少しクスッ、と笑うと顔を上げて迷いなき瞳を三人に向けた。

それを見て、励はだるそうに頭に手をやる。

「さて、面倒だけと行きますか」

---

---

---

---

同時刻、ビッグスパイダーのアジトの入り口で一人の不良が見張りをしていた。

工場跡のような建物の唯一の入り口を背にして、この場所に通じる

複数の路地裏を見つめる。

彼はまだ眠いのか、大きくあくびした。

その瞬間だった。

ボゴオツ！という凄まじい音とともに不良の男の腹部に衝撃が走った。

「ツ・・・あツ！!?」

声すら出ないまま彼はそのまま扉に叩きつけられ、扉ごと建物の中に吹っ飛ばされた。

さび付いていたためか、開閉式のドアは壊れる。

勢いよく扉が開けられた（壊された）ため、中にいたビッグスパイダーのメンバー全員が突然の訪問者に注目する。

殴り飛ばされたということも理解出来ないまま、不良の男は意識を失った。

そんな不良の様子も気にせず、訪問者である黒妻綿流は笑みを浮かべて、一番奥にいるリーゼントの男に告げる。

「朝っぱらから忙しそうだな　終わらせにきたぜ。蛇谷・・・」

「テ、テメエ！」



一番奥のフカフカそうな椅子に座っていた蛇谷は立ち上がると同時に表情を険しくする。

一斉にビッグスパイダーの全員が黒妻に警戒して身構えた。

「わかってるだろうけど、」

不適な笑みを浮かべると、彼は言う。

「俺は強えーぞ？」

その宣言とともに、二、三人の不良が黒妻に横から殴りかかった。

完全な死角からの奇襲。

確実に攻撃が通るはずだった。

だが、

「手厚い歓迎だなッ！！」

ドゴッ！！ゴッ！ボッ！！という三つの音と同時に襲い掛かった不良が殴り飛ばされる。

黒妻のすばやい反撃が炸裂したのだろうが、簡単には真似できないことだった。

蛇谷は悔しそうに黒妻をにらみつけると

「ああ！確かにアンタは強え！だがな、そんなのは能力者と一緒だ  
あ！！数と武器には敵いつこねえんだ！！」

蛇谷の声と同時に一斉に不良たちはポケットから拳銃を取り出した。

そのまま銃口を黒妻のほうに向ける。

その時、入り口のほうから聞こえたのは、声だった。

「待ちなさい！！」

不良たちが声に反応してそちらに気をとられた、ほんの一瞬の間。

その間に奇妙な音が炸裂した。

白い金属の矢が、拳銃の一部を押しつけた音なのだが、そんなことに不良たちが気づくことはない。

白い金属の矢がいつの間にか、拳銃を串刺しにしてただのガラクタと化している事実だけに驚く。

黒妻はその光景と声に驚いて後ろに振り返った。

朝日を背にして立っている人物に、黒妻は見覚えがある。

「・・・美偉・・・」

そして、気づく。

昨日会った時とは違い、今の固法の目には迷いが無いことを。

そして、赤い革ジャンと風紀委員ジャツジメントの腕章の両方を着ていることを。

それが意味することを。

「カツコいいじゃねえか」

ほんの一瞬だけ、固法の口元が緩んだが彼女はすぐに真剣な顔になる。

「これでまあ、銃は使えませんの」

固法の後ろに、白井が現れる。

白井と固法の風紀委員ジャツジメントの腕章を見て、動揺する不良たちを前に、蛇谷は固法のほうをみて慌てたように叫ぶ。

「固法さんッ!?!」

「蛇谷くん。貴方、随分下衆な男に成り下がったわね。数に物を言わせて、その上、武器？」

反論でしないのか、怒りが脳を支配して冷静に反論出来ないのか、蛇谷は言う。

「うるせえ!!!俺たちを裏切って風紀委員ジャツジメントなんかになったやつに何がわかる!!!」

おら！！今だやっちまえ！！こいつらに俺たちの力を見せてやれ」

蛇谷が右手を振ったかと思った瞬間、どこからか機械音が聞こえた。音のしたほうを見ると、この建物の二階の通路のような部分にある設置式のガトリングが起動した音だった。

いつの間にか、不良の一人が回り込んでいたのだろう。ガトリングを操作しようとしている。

「くツ！？まずいですの！？」

アレから弾が発射されれば、こちらはひとたまりもない。

銃弾の雨が降ってくる事態はさげようと白井は身構えたが、その必要はなかった。

「邪魔だ」

ゴオッ！！と烈風とともに不良が吹き飛ばされ、烈風をまともに受けたガトリングが横向きになり、

そのまま自身の重さに負け、一階に落ちる。下には誰も居なかった。のでガトリングがバラバラになるだけですんだ。

烈風の発生源を注視すると、二階の通路には現代的なデザインの杖をついた励が立っている。

蛇谷は励の姿を見ると、目を丸めて驚く。

「お、お前は！！『アイツ』の所にいた！！」

「久しぶり。なるほど、『あの人』結構有名なんだな。ま、ビッグスパイダーは終わりだよ」

励の言葉に蛇谷は自分に言い聞かせるように言う。

「だが俺たちには『アレ』が・・・」

「『アレ』って何？」

「っ！？」

声とともにチャリン、とコインの弾かれたような音がした。

いつの間にか、ツインテールの横に茶色い短髪の少女がいることに、蛇谷は気づく。

直後、建物の壁の一部が、音を立てて爆発した。

音速の三倍で飛ぶコインが、建物の外に止めてある車を、壁ごと、中の装置ごと破壊する。

「これのこと？まさか、同じ罠に二度引っかかるなんて、思っ  
つてないわよねえ？」

御坂の存在に気づき、動揺する中で蛇谷は声を上げて命令する。

「やれえ！！やっちなえ！！お前らがやらないと、俺がお前らを殺  
つちまうぞお！！！」

ファイティングポーズを決める御坂と白井の前に、励は現れては手  
で制する。

何故？と首を傾げる二人に、励はこう言う。

「たまには先輩を立てるってことだよ」

## 第二十五話：ビッグスパイダー崩壊（後書き）

以下の蛇谷が伸されるまではアニメどおりでカット・・・w

続きは蛇谷が伸された所からです！！

読んでいただき、ありがとうございます！！

第二十六話・黒幕（前書き）

タイトルのセンスが・・・w

アニメの蛇谷をのした所からです。



## 第二十六話：黒幕

「自分の居場所ってのは、自分が自分で居られる場所のことを言うんだよ……」

工場後のような建物の中で、鈍い音とともに赤い液体が飛び散った。

それらと同時に地面に叩きつけられるのは、蛇谷という、ビッグスパイダーのボス。

その場所は窓一つない空間で、開いたままの扉から差す朝日と、この隙間からか入ってくる朝日だった。

そんな空間で、決着は着いた。

自分が何をしたいかすらわからなくなった蛇谷の顔面に、黒妻綿流の右拳が炸裂して、だ。

変わり果てた友に、黒妻は諭すように先ほどの言葉を言い放った。

あの時と同じ、また一緒に笑える日を願って。

「……終わったな……」

黒妻は肩を鳴らしながら、近くに立っていた固法美偉の横まで歩いていった。

足を進めるとともにコツコツと鳴るコンクリートの地面。

周囲に倒れている不良たちの大半は、すでに白井黒子によって外に運び出されたのだろう。

これで、ビッグスパイダーは壊滅した。

この件に関しては全てが終わったようはず、だった。

「そうね。これで・・・」

しかし、それは後輩の声によってさえぎられる。

「まだだ、肝心な部分がまだ、解決していない」

突然二人の前に現れた励の言葉に、黒妻は眉をひそめる。

励の言葉をどこから聞いていたのか、御坂美琴と白井が三人の左側から現れた。

二人は励の言葉に同意するようにコクリ、と頷く。

すると、黒妻と同じように眉をひそめたままの固法は励に尋ねた。

「・・・どういうこと？能力者狩りの犯人はビッグスパイダーで、蛇谷が自分の居場所を守るために」

力を誇示したかったんじゃないの？」

「……多分、勢力を広げたいだけなら、能力者なんか襲わないと思う。」

それに、あのキャパシティダウンとかいう装置の交渉なんか、ただの不良たちにはまともに来ない」

「……そうね。でも、どうやって利用しようっていうの？」

「能力者にビッグスパイダーのメンバーがやられたようにみせれば、簡単な話だ」

励はそこまで説明すると、建物の中に振り返り、誰も居ないはずの空間に向きあう。

現代的なデザインの杖を右手でついている割には、かなり普通の動き方だった。

怪我はもう治りかけているのだろう。

「……そろそろ出てきたらどうだ？ 奈落の奴の調べ（違法）で証拠にはならないけど、」

名前ならわかってる。

焰火……九十九！」

励がそう呼んだ瞬間に、建物の奥の階段への通路から、炎が勢いよく噴出した。

二回の通路に繋がる階段へ続く通路は、二つあり、一つは入り口付近に。

入り口に向かって階段を隠す形で柱があった。

もう一つは蛇谷が倒れている場所よりもさらに奥にある。

ゴォッ！と突然現れた業火は、うねりをあげながら、倒れている蛇谷に向かっていく。

鮮やかな赤、はあまりにもすばやく、白井でも反応が遅れた。

(不味いですわ！！このままでは蛇谷がッ！！?)

だが、白井の懸念は無意味だった。

「させるかよ！！」『Satana013』！！」

脇が右腕を振るうとともに現れたエメラルドグリーンの魔法陣から、水流が発生し、高速で物理法則を無視したような動きで炎に激突する。

その動きは、生き物で例えるならば蛇のようにも、オカルト的に例えるなら竜のようにも見えた。

炎と激突した水流は、莫大な量の水蒸気となり、火とともに消え去

る。

ジユワアツ、と後から音だけが聞こえた。

「蛇谷の組織に潜り込み、蛇谷に無能力者襲撃によって危機感を与え、利用する。」

「……目的は何だ？」

「言うわけないだろ……やりすぎせると思ったんだけどな。」

「あーあ、残念。ま、いいか。全員消すけど」

と、声とともに奥の階段から降りてきたのは、フードを被った少年だった。

焰火、と励に呼ばれた少年の後ろから、フードを脱ぎ捨てた状態の茶髪の背の高い少年と一緒に現れる。

一瞬の周囲の沈黙の間に、白井は空間移動して倒れている蛇谷を担いで一同の下に戻る。

周囲に、もう倒れている不良はいない。

それを確認した御坂は、額から青白い火花を散らすと好戦的な笑みを浮かべた。

彼女はそのまま、一同よりも前に出ると、手に青白い電撃を帯電させながら言う。

「一応、つかまる気はないのね？」

「そつちが逃がしてくれ、って言うべきじゃないの？  
わざわざ前が出るなんて、人質にしてくれって言うてるようなも  
のだよ？」

焰火がそう言った瞬間、御坂は突然苦しそうに頭を抑えながらうず  
くまった。

突然の出来事に攻撃されたのかと焦った励だが、違った。

御坂、だけではない。

白井と固法の二人も、頭を抑えて膝をつく。

黒妻と、励はなんともなかった。黒妻はその奇妙な光景に驚き、目  
を丸めて驚いている。

だが、黒妻は即座にこの状況を生み出しているものを分析し、

「この音！・・・キャパシティダウンとかいうやつか！！」

「！！！」

キャパシティダウンを探そうと周囲を見渡す励だがそんなものはど  
こにも見当たらないし、  
まず、能力者であろう焰火とその後ろにいる茶髪の男は何故かなん  
ともない様子だ。

と、その次の瞬間、前に出ている御坂と励たちの間を炎で寸断する  
ように業火が放たれた。

それと同時に、向こう側からドン、と鈍い音が聞こえた。

「ぐっ!!!?」

腹を殴られたようだ。

向こう側がはつきりとは見えないために、不安がこみ上げる。

「御坂ツ!!!!!!?」

「正面から超能力者レベル5とやりあう気はないし、まあ、何より、このまま逃がす気もない。

宣言したとおり、人質としても使わせてもらうよ」

「ッ!!!」

励はそこで左手を振るい、魔法陣を展開し、突風を放った。

ブオッ!と突風は空気ごと目の前の炎を切り裂き、励と焰火の間に道を作る。

状況を確認して、励は思わず歯軋りをして拳を力強く握り締めた。

焰火の横には御坂が倒れている。

御坂は意識はあるようだが、手足が縛られている上にキャパシティダウンによる作用で苦しみ続けていた。

何とか意識を手放さないようにしているのが、こちらまで伝わる。

「……テメエ……」

「いい配置だ」

と、咳くと同時に懐から拳銃を取り出した。

その仕草に、一瞬身構える励だったが、焰火はその銃口を励からはずし、そのまま真横に右腕を伸ばす。

励は慌てたようにその銃の向けられた先を見て、目を丸くする。

今までは気づかなかつたのだが、灰色の色を塗られ、上から布をかぶせられているドラム缶がある。

近くには布をかぶせられたままの木材などがあり、今まで気づかなかつたこともうなずける。

うまく隠されていたものだったのだ。

「ッ！！？」

ドラム缶の中に何が入っているか瞬時に予想できた励は焰火を止めようと動きだす。

しかし焰火はそれを鼻で笑うと、

そのままともに狙いをつけずに引き金を引いた。



パンツ！！と乾いた音が炸裂する。

見事にドラム缶に着弾した弾は、ドラム缶の表面に穴を空ける。

カツン、とあまり聞きなれない音が聞こえた。

そのコンマ一秒後、ドラム缶は内側から破裂する。

一瞬、ドラム缶に空いた穴から何か液体らしきものが見えたことから、

やはり何か爆薬になりえる液体が入っていたのだろう。

炎は真上に伸びながらも、周りの木材を伝って建物壁をも燃やしていく。

爆発の方向がどうやってか調整されていたのか、爆風が励を襲った。

「がッ！！？」

最初は全身を叩くような勢いの突風に体勢を崩した励だが、すぐに立ち上がるうと足に力を入れた。

しかし、その直後に来る全身を焼くような熱風を受け、苦痛のあまり励は地面に転がり、うめき声を上げる。

「がああ！？あああああああああああああああああああああああ  
ああああああっ！！？」

転げまわる励に、焰火は手から炎を出現させそれを放ち、追撃する。

「くツ!？」

すぐに起き上がり、それをかわす。

起き上がり、すぐに周囲を見渡した彼の目に飛び込んできた光景は真っ赤に燃え盛る建物だった。

(不味い!このままじゃあ出られなくなる・・・)

どンドン広がっていく赤色を前に、励は勢いよく振り返ると黒妻に向かつて告げた。

「黒妻!!二人を担いでここから脱出してくれ!!」

その言葉に、黒妻は二人を熱風から覆いかぶさる形で守りながら返事をする。

「お前さんはどうするんだ!!??この炎の海に残るのか!？」

そう言われた励は現代的なデザインの杖を横に放り投げ、拳を握り締めて正面の焰火を見据える。

魔術で体を補強したのだが、やはり持続時間は短い。

前回よりも体調が回復しているため、そこまでの負荷はかからないが状況が状況で、厳しいようだ。

だが、励の頭には今、可能か不可能かなどの考えは全くなかった。

「御坂を助ける。二人は任せた！」

黒妻はしばらくの間どうすればいいのか考えた。

怪我人である励を一人残すというのは少し気が引けるが、頭を抑えて苦しそうにしている固法と白井をここに置いておくわけにもいかない。

「……………わかった。無茶するんじゃないぞ！」

黒妻はそう言い放つと二人を肩に抱え、勢いよく走り出し、建物から出る。

直後、先ほどまで黒妻たちがいた部分に炎をまとった鉄骨が落下した。

これで入り口は完全に防がれた。

燃え盛る炎の向こう側の状況を心配しながら、黒妻は

(……………アイツ、やっぱり無茶ばかりしやがるな……………)

そう思い、さらにここから離れようとしたとき、不意に建物の二階の窓が割れた。

炎の影響かとおもい、すぐに建物から二人を連れて離れる黒妻の前に先ほど焰火といった茶髪の男が飛び出してきた。

ちょうど黒妻と建物の上に立ちふさがるように。

二階から飛び出してきた男は、黒妻のほうを見てニヤリと笑うと、勢いよく地面を蹴り、高速で黒妻の懐に入った。

「なッ!？」

明らかに人としての限界を超えたスピードに、二人を担いだままの黒妻は当然反応できない。

ドン、と思い衝撃が腹部に走る。

「ッ!？」

黒妻は勢いよく建物から遠ざけられるように殴り飛ばされた。

黒妻が殴り飛ばされた瞬間に、黒妻が思わず手放した白井と固法が黒妻の真横の地面に転がる。

幸い、黒妻の手の離すタイミングがよかったのか、二人ともどこかを強く打った様子はない。

背中から地面に落ちた黒妻はすぐに起き上がり、警戒しながら茶髪の男を見た。

すると、茶髪の男は不適な笑みを浮かべると

「俺の名は雑賀隆二……。逃げられると思うなよ、黒妻綿流。きつちり俺の相手してもらおうぜ！」

「自己紹介とは、余裕じゃねえか……」

雑賀と名乗った男に、黒妻は好戦的な笑みを浮かべ、拳をパキパキと鳴らした。

黒妻には直感的にわかったことがある。

この人物は、ただ強い奴と戦いたいだけで動くタイプだと。

犯罪を犯してまで、とここまで狂っているのは初めて見るが、やはり路地裏にいるようなタイプだ。

つまり、戦う以外には興味がない。

「ここまで騒ぎを大きくして、アンチスキル警備員から逃げ切れるとでも思っているのか？」

黒妻は今更ながら、思ったことを口にした。

事件に関して詳しいことは黒妻も知らない。

だが、ここまで表に出なかった事件のなら、それなりの隠蔽工作はされてきたのだろう。

そんな努力を自ら壊す意味がわからなかった。

「簡単さ。お前らの誰かを人質にして一旦逃走。

その後にキャパシティダウンと俺たち二人が使った『キャパシティダウンの無効化ソフト』に関するデータ。

それを持ち帰ればこの街の上に守ってもらえる……とか焰火は言ってたな」

俺はどうでもいいけど、と雑賀は付け加える。

黒妻にとって、話に少し理解出来ない部分があったのだが、考えても仕方ないため、臨戦態勢に入る。いつでも仕掛けられた時に反応できるように。

そんな黒妻を見て、雑賀はうれしそうにファイティングポーズをとると

「お！そんじゃそろそろ、はじめるか」

ドッ！！と勢いよく地面を蹴った。

---

---

燃えさかるビッグスパイダーのアジトだった建物の前で、黒妻は能力者らしき人物と戦っていた。

目の前の建物から出る火が、周囲をオレンジに染める。

最初に来た攻撃は、右から左に打ち抜くように放たれた拳だった。

黒妻はそれを後ろに上半身を少し後ろに反らしてギリギリでかわす。

普通の拳よりもはるかに速い一撃だったが、黒妻は何とか反応できたようだ。

「まだだあ！！」

「！」

気づけば雑賀は体勢をわざと前のめりに崩し、砲弾のように突っ込んでできていた。

反応できない黒妻の体に肩からタツクルする形で、雑賀は黒妻に突進した。

メシリツ！！と嫌な音がする。

「かつ・・・はッ！！」

何らかの能力を使った上での一撃に、くの字に折れ曲がった黒妻の体は勢いよく後方に吹っ飛んだ。

そのまま廃墟ビルの鉄筋コンクリートで出来た壁に叩きつけられる。

黒妻でなければ、すぐに気を失っていたはずの一撃だった。

ボロくなっていたのか、鉄筋コンクリートの表面の粉が飛び散る。

「　　ッは・・・かッはッ！！・・・ぜえぜえ・・・ゲホッ！」

パラパラと崩れる薄いコンクリートの破片が未だ息が出来ず苦しむ黒妻の上に降りかかる。

(・・・クソ。肉体を強化できる能力者・・・？ッ！)

相手の動きを見るからにして、能力者にしては一般人となんらかわらない動作しかしていない。

しかし、その動作の一つ一つが明らかに人の域を超えている。

そして、黒妻は喧嘩がかなり強い。

だが、それも鍛錬された人、と同じようなもので、明らかに雑賀との相性は最悪だ。

それでも黒妻は起き上がりながら不適な笑みを浮かべる。

こちらに追撃を加えるべく向かってくる雑賀を見て、正面から向かい合う。



「上等じゃねえか・・・」

一発でも気絶しかねない攻撃。

連続で喰らえば命はないかもしれない。

さらには相手は高速で動いてくる。

「今度はこっちの番だ!!」

地面を勢いよく蹴って黒妻も雑賀に向かって飛び出した。

## 第二十七話：正面衝突

第十学区のストレンジと呼ばれる地域。

見たままはただの廃ビル街なのだが、ここはスキルアウトのような不良たちが集まる場所だった。

学園都市という一つの枠の中で自然とはみ出したものや、どうすればいいかわからなくなった者の逃げ込む場所。

そんな者たちにとっては隠れ家としてすら機能するこの場所も、平穩ではなくなっていた。

警備員アンチスキルの一斉摘発があったのだが、そんなものはもはや関係なかった。

ビッグスパイダー、という組織のアジトが燃えている。

工場跡のような建物から突然発火した火を消そうと、

警備員アンチスキルは消化活動に向かおうとするが、その瞬間に、燃えている建物に向かうための通路の側の廃ビルが次々と爆破され、

瓦礫の山が完全に通路を防いでしまっている。

何故か火事の一歩に、連絡出来ない。

完全に孤島のように取り残された地域には、ある特定の人物しか居なかつた。

アンチスキル  
警備員にされた最後の報告にはこうあつた。

気絶している者たちは不良たちと、ビッグスパイダーのリーダー、蛇谷次雄。

意識のある者は、ジャッジメント 風紀委員とその手伝いの次の五名。

一人目はビッグスパイダーの創始者、黒妻綿流。

二人目は、第一七七支部のジャッジメント 風紀委員、固法美偉。

三人目は超能力者レベル5の第三位、超電磁砲レールガンこと御坂美琴。

四人目は先ほどと同じ、第一七七支部のジャッジメント 風紀委員、白井黒子。

五人目は、スキルアウトと別の事件を担当していたジャッジメント 風紀委員、  
神落励。

この五人がどういう状況下、どういう危機に陥っているのかなどは、この五人とある二人の人物以外、誰も知ることは出来ない。

そんな五人の一人の励は、燃え盛る炎の中、気絶していないが動くこともままならない

御坂の真横に立っている焰火九十九という人間と正面からにらみ合っていた。

現代的なデザインの杖は、脇の横に投げ捨てられている。

彼は魔術により体を補強している。

怪我の完治まで一週間といった怪我はもう治りかけているため、この状況下

魔術による体の補強はそこまで負荷はかからない。

だが、実際問題脇は一步も動くことが出来なかった。

身体的な問題ではない。

御坂が人質に取られている以上、どう動けばいいかわからない。

高速で突っ込むにしても、相手の虚をつくか、それなりの勢いが必要である。

まず、御坂を助ける。

それを第一目標にしたのはいいが、相手は隙を見せなかった。

音とともに煙を上げながら燃え盛る建物。

赤一面の景色。

煙が中に充満していないだけでも幸이었다。

焦る励を見て、炎の海でも焰火は笑う。

「随分と焦っているみたいだ。本当に風紀委員<sup>ジャッジメント</sup>？

ま、元スキルアウトじゃ『正義』もないね」

どことなく不機嫌そうにそう呟く焰火。

スキルアウトを嫌悪しているのか？と首をかしげながらも、励は答える。

正確には、相手が口にしたある単語に引っかかってだが・・・。

「『正義』？それが今回の事件の動機か？」

「そうさ。それがどうかしたの？」

あっさりと認めた焰火を前に、励は齒軋りする。

「ふっざけんな！！そんな理由で次々と人を襲撃したのかよ！！」

「じゃあ君は、どれだけ人を守れた！！？君のその緩い『正義』で！

事件が解決するまでにいままでに何人の犠牲者を出したんだ！！？」

初めて、焰火という人間から感情があふれ出した気がした。

しかし、感じ取れる感情の中には、明らかに狂気が混じっている。

「・・・どうして、どうしてレベルアップー使用者を襲った！！あいつ等は何にもしてねえだろ！！」

「学園都市にたくさんいる無能力者<sup>レベル0</sup>・・・。そいつらは何にも出来ないくせに問題はかり起こす！！

能力者の足を引つ張るだけじゃない！！犯罪すら起こす！僕はそういうた因子を見逃せなかった！！

しかも前回犯罪まがいのことをした連中が、またチマチマ努力し始めた！！

目障りなんだ。・・・どうせすぐに犯罪に走るようなやつらを、僕は見過ごさない。

緩い『正義』は所詮何も守れちゃいない！！この街は能力者の街だ！！

そんなレベルアップー使用者らの希望がお前なんだよ。

神落励！！」

頭がおかしくなりそうだった。

こんな奴から、今回の被害者を守れなかったのか・・・。

思わず、拳をつぶしてしまいそうなぐらい力強く握っていた。

ガシャーン！！と彼の真横に炎に覆われた瓦礫が落下する。

ポアッ！！と炎が彼の横で勢いよく音を立てて燃え上がった。

彼の皮膚が、オレンジ色に染められる。

「……『正義』って言葉に全く同じ価値観を持つやつがいるはずがないのはわかってる……」

そんなことは何度も直面してきたつもりだし、乗り越えてきた。

「でも、『正義』なんて言葉、俺は語るつもりはない。

だから俺がお前の『正義』にどうこう言う権利はない」

だがな、と励は焰火をにらみつけて、言い放つ。

「人がその『正義』で傷つかなければならないなら、例え神が創つた法則ルルでも

俺が『正義』を裁く！」

直後、励はすぐに前かがみになり、勢いよく地面を蹴った。

ドバンアッ！！と地面が蹴られ、励は高速でミサイルのように真っ直ぐ焰火のほうに飛んでいく。

彼が地面を蹴る時に足元に魔法陣が展開されていたのだが、焰火は反応できなかったようだ。

目の前に迫った励を前に炎を出し対抗しようとするが、勢いよく殴り飛ばされる。

2、3メートルほど後方まで殴り飛ばされるが、すぐに起き上がる。

励は先ほど焰火がいた場所、つまりは御坂の真横に降り立つ。

「・・・うぬぼれてるね。君みたいなのが僕は一番嫌いだ」

不機嫌そうにそう呟く焰火に、励は正面から向かい合う。

対して焰火は掌に炎を作り出し、それを勢いよく励に向かって振るう。

業火が、御坂ごと励を飲み込んだ。

---

---

励と焰火が交戦している建物の外で、黒妻と雑賀隆二は同時に駆け出した。

廃ビルが周囲にいくつもあがあるが、火事の建物のご構造上、ここだけは少し開けてる。

雑賀は能力で肉体を強化しているため、かなりの速度だ。

対して、黒妻は迷いもなく突っ込む。

二人の距離が一気に詰められる。

自然と二人は右手で拳を作る。



先に仕掛けたのは黒妻だった。

走りながら右ストレートを繰り出し、雑賀の顔を狙う。

しかし、雑賀は首を右に振ることによってそれを避け、前のめりになっている黒妻にカウンターの右ストレートを顔面めがけて振るう。

ビュンツッ！と凄まじい勢いで振られる拳を、黒妻は体の軸足を右に移動させ体を右に傾け、かわす。

さらに左手をその拳に押されるように受け止め、左足を右足の後方に移動させる。

「ッ！？」

雑賀の体勢が、ほんの少し崩れた。

最後に右足で地面を蹴り、左足を軸にして勢いよく回転する。

最初から狙っていたような動きだった。

キュッ！と彼の靴底から地面とこすれた音がする。

そのまま回転した黒妻は勢いと体重を乗せた右ストレートを雑賀の顔面にぶつけた。

自分の勢いを利用され、体勢がまだ立て直せていない雑賀に、それ

を防ぐ術はなかった。

ドゴオツツ！！と凄まじい音が炸裂した。

「がぁっツ！！？ はっ！！？かっ！！」

それと同時に雑賀の体は大きく、4、5メートル後方に飛ぶ。

背中から落ちて、肺の中の空気を全て吐き出す。

流石に今の一撃は大きかったらしく、起き上がるのに体をふらつかせながら起き上がっている。

（・・・やっぱりな・・・。身体能力が向上しても、反射神経までは上げられないみたいだな）

作戦が成功したことにとりあえず手ごたえを感じる黒妻だが、ズキリと激しい痛みが走る右手を見て眉をひそめる。

（・・・アイツにかなりのダメージを与えたのはいいが・・・。長期戦は避けないとな・・・）

皮膚の硬さや筋肉の硬さとはいったものはさほど変わっていないらしいが、

それでも一般人よりもはるかに雑賀は頑丈だ。

黒妻の拳を、普段の何倍もの威力で受けておきながら気絶すらしていない。

(・・・)

彼はゆっくりと起き上がる雑賀から目を離し、倒れている固法と白井のほうをチラリと見る。

(・・・あのキャパシテイダウンとかいう装置の音がまだ聞こえる。どこにあの装置があるんだ・・・?)

と、彼は建物のほうに振り向いた。

未だ激しく炎を上げて燃えている建物の中から、音は聞こえている。だが、明らかに建物の中に装置があり、火事の影響を受けていないなどということはありえない。

(・・・アイツに任せるしかないのか!?)

黒妻が悔しさのあまり、顔をしかめた瞬間、彼の真横から声がした。先ほど殴り飛ばしたはずの人物の声。

「よそ見すんじゃねえよ!!」

「ッ!? (しまッ!)」

黒妻が振り返り、攻撃を防ごうと動くが、当然、雑賀の拳のほうがるかに速かった。

音にならないくらい鈍い音が黒妻の体の中で聞こえた気がした。

「ッ！！？」

黒妻は大きく体をくの字に曲げながら真っ直ぐ後方へ飛ぶ。

「ッ！！！！」

「がああああああああッ！？」

背中をさつきとは違う廃ビルの柱にぶつけ、今度こそ意識を失いそうになる。

そこに向かって雑賀は勢いよく走りこむ。

（ッ！？来っ！るッ！？）

だが、直後に高速で叩き込まれる蹴りに反応した黒妻は動かない体を転がすようにして何とかわした。

雑賀の蹴りの威力を物語るように、廃ビルの柱が白い粉を撒き散らしながら折れる。

折れた柱の破片を黒妻はさらに転がるようにして避け、その勢いを利用して起き上がると拳を作り、雑賀の横顔に叩き込む。

ボゴオッ！！という音とともに今度は雑賀の体が別の廃ビルの壁に叩きつけられる。

「ぐッ!?」

さらに追撃するように殴りに突っ込む黒妻を、体勢を崩しながらも雑賀は殴りつける。

「ッう!?!」

しかし黒妻も殴られながらも拳を相手の顔面に直撃させた。

雑賀もそれを振り払うような仕草で黒妻の腹部に拳を叩き込む。

だが黒妻は自分の体が殴り飛ばされることを利用してアッパーを雑賀の顎に叩き込む。

「なッ!? (コイツッッ!?!?)」

黒妻の体が大きく後方に飛び、背中からコンクリートの地面に落ちる。

雑賀も追撃できなかったのか、よろけながら後ろに倒れこむ。

二人とも、限界を超えた殴り合いだった。

黒妻はヨロヨロと体勢を立て直しながら口元を手で拭う。

赤いベツトリとした液体が手についてることから、やはりこれ以上は不味いと危機感を持つ。

何とか黒妻は殴りあいの経験値で、身体能力の差を埋めようとして

いるが、それでも相手も

相当喧嘩慣れしているのだろう。まず隙が見えない。

しかし、今回だけは何が何でも負けられない。

固法や白井といった、守るべきものが彼にはある。

対して、雑賀も黒妻の喧嘩慣れの異常さにほんの少しだけ危機感を  
感じていた。

(まさかここまでやるとはな・・・)

いや、違う。危機感などではない。

心の底からにじみ出る、死闘への渴望。

(いいね！いいね！楽しすぎる！！黒妻綿流！面白え！！)

正面からにらみ合う黒妻と雑賀。

二人はどちらからとなく、地面を蹴り、走り出す。

拳を作り、互いの顔面を狙い、構える。

「勝つのは俺だぜ！！黒妻あッ！！！」

「悪いが女の子が居る前では負けられないんでな！！！」

そつだ。負けられない、とさらに拳に力を込める。

二つの影が、燃え盛る建物の前をかなりの速度で駆ける。

片方は自身の欲望のために、もう片方は守るべきもののため。

まともに喰らえばお互いきっと無事ではすまない。

ドゴオツ！！！！！！！と轟音とともに二つの影が衝突した。

両者とも無事ではすまない一撃を顔面に受けながら、片方は笑った。

崩れていく目の前の影を見据えながら、ヨロヨロとした足取りで倒れている二人の下に向かうその影は  
安心したようにため息をつくと微笑んだ。

「・・・俺も楽しかったよ。今度はお互い何もなしで殴りあおうじやねえか」

## 第二十八話：炎の中

例えるなら、地獄。

真っ赤な炎が照らす空間で、足元のコンクリートがオレンジ色に染め上げられる。

熱風が後からゆっくりと周囲に逃げるように広がっていく。

表面が少し焦げ付いたのか、ほんの少し黒っぽくなっている。

周囲にあった鉄骨が放たれた業火の温度でドロドロと溶けていく。

そんな場所を見据えながらも、焰火九十九は不機嫌そうに眉をピクリと動かした。

彼のしている場所は、正確には炎の中。

その中に二本の足で立っている神落励を見て、だった。

彼は炎の海の中、

キャパシテイダウンの効果により動けなくなっている御坂美琴を両手でお姫様だっこをした状態で立っている。

業火を放たれた時にとっさに御坂を抱き上げ、自分ごと攻撃から守ったのだろう。

「ぜえッ!!!?ぜえッ!!!.....ッ!!!」



見間違いなのかどうかは定かではないが、  
一瞬、この時の励の瞳が赤く怪しげな光を放っていた気がした。

ダメージはあったのか、体はフラフラしているのにも関わらず、闘  
志は増している。

「・・・死に底ないが!!」

焰火の声とともに再び炎が放たれる。

だが励はそれを右手を前に突き出すことでエメラルドグリーンの魔  
法陣で防いだ。

(何故だ・・・?)

焰火はそこで平然と突っ立て居る励に疑問を持つ。

先ほどからの炎には火の粉を散らすようにも細工したはずだ。

気管がやられているはずだ。息をするのも厳しいはずなのに  
。

しかし、励の目は真っ直ぐこちらを見据えている。

「・・・」

黙ったままこちらを見据える励に、焰火は両手を動かす。

「手から出した炎だけが使えるってわけじゃないんだよ!!」

瞬時にゴォッ！と励の周囲の炎が一斉に励目掛けて波のように襲い掛かってきた。

これは、魔法陣は一方からの攻撃にしか対応できないため、励には防ぐことが出来ない。

しかし励は炎にも目をくれずに足元に魔法陣を展開する。

「ここだッ！！！」

一気に右足でコンクリートの地面を蹴りつけた。

そこから周囲に突風が広がるが、炎を完全に防ぐことは出来ない。

励はすぐに魔法陣を正面　　つまりは御坂を守るように出現させ、  
覆いかぶさるようにして御坂を完全に守る体勢に入る。

焰火はその行動に首を傾げる中、励は炎の波に吞まれた。

背中が焼ける。肉が焼ける感じがする。

痛み、とはいえないレベルの激痛が全身を駆け巡る。

目がかすむくらい、火の粉も自分に降りかかっているのがわかった。

(ッ！！！？)

それでも御坂だけは守りたい。その思いが彼の意識を体にとどめる。

(ッ!!) あの時と同じッ!!--感覚.....ッ!!--?ぐッ!!--?)

励はあたりを包み込む真紅の炎が、何故か懐かしく思えた。

それだけではない。

この危機的状況も、自分が炎の中にいることも、何故か当たり前のように思えてしまう。

自分が自分であるという概念をなくしそうになる感覚。

そこからヨロヨロと足を前に進め、勢いの弱まった炎の中から抜け出す。

前に倒れこみそうになるが、彼は左足を前に踏み出すことで何とか踏みとどまる。

後方から視界に入る赤色から、建物の火事の規模がわかる。

身体的にも精神的にも意識が飛びそうなか中、

彼は抱きかかえている御坂の苦しそうな顔が和らぐのを確認すると、安心したようにため息をつく。

「.....やっぱり気に食わないな」

それを見ていた焰火はさらに不機嫌そうになると、右手をふるって炎を放った。

励と御坂に、ではない。

二人の上にある、燃え盛る屋根に向けて、だ。

ゴオッ！と音を立てて屋根にあたる業火が、屋根の一部を完全に溶かし、炎をまとった鉄骨の雨を降らせる。

「！（クソッ！？動けな　　ッ！）」

御坂を抱えたままの励は、すぐに動けるはずもなく、鉄骨の雨に埋もれた。

ボゴオッ！！と彼の居た場所のコンクリートがはがれ、瓦礫が炎や熱風とともに飛び散った。

地面に突き刺さった鉄骨を眺め、その手ごたえを感じながら焰火は懐の中にある拳銃を意識する。

（・・・これで終わり）

そう焰火が思い、振り返った瞬間だった。

「まだよ」

励のものではない声が聞こえた。

（・・・！？）

バチイッ！！と電撃が炸裂し、鉄骨全てが宙を舞う。

幼い子供に投げ飛ばされた積み木のような、力強くも軽い動きだった。

と同時に今起きている事柄の全てを理解した焰火は足元のコンクリートに注目する。

自分のいる所まで亀裂が届いているその地面。

それが意味するもの。

(さっきの踏みつけはッ！？地中にしかけたキャパシティダウンの本体を破壊するためだった！？)

そもそも励がその存在に気づいていたことにも予想出来なかった。

地中に本体が隠れていることを悟らせぬように、この建物のあらゆる部分に本体からのコードを伸ばし、壁や屋根からも音を出させていた。

しかし、励はそれを見破った。

「・・・お前の策はお見通しだぜ。正義の味方さん」

立ち込める粉塵の中から、全身傷だらけの状態で出てきた励は口元

の血を拭いながらそう言い放った。

その言葉に、眉をひそめる焰火に向かって先ほどの声の主は励の後ろから姿を現す。

煙のようにも見える粉塵の中から出てきた人物は、頬や腕に若干煤がついてしまっている御坂だった。

彼女は好戦的な笑みを浮かべながら額で青白い火花を散らしている。

そんな彼女を励は右腕で制する。

「……何よ？」

不機嫌そうに尋ねる御坂に、励は息を整えてから言う。

「お前は先にここから脱出しろ。まだ完全回復してないからこれ以上ここに残るのは危険だ」

「何言ってるのよ！！アンタのほうが怪我してるじゃない！それに！アンタは元々怪我人でしょうが！！」

「退くのはアンタよ！！自分の体のことくらい、考えていいなさい  
！！！」

「……それでも……」

励は御坂よりさらに二、三步前に出ながら言い放つ。

「それでも俺は、お前に怪我して欲しくないんだ。

それに、  
アイツは俺に任せてくれ」

その言葉に、御坂は戸惑った。

このまま励を置いて行くことは彼女自身が許さない。

だが、励自身はそれを望んではない。

励は黙り込む御坂に向かって振り返ると、入り口のほうを指差し微笑んでこう告げた。

「建物の外の通路がおそらく瓦礫で塞がってる。お前の一撃で避難通路を確保しといて欲しいんだ。

俺なら、大丈夫信じてくれ……。必ず戻る！」

「……」

その言葉に、御坂は少しだけうなずくと励に背を向けて建物の出口に向かう。

御坂は振り返ることをしなかった。それが励への信頼の強さを表しているのかもしれない。

一方、励も御坂のほうに目を向けずに焰火に向かい合う。

体の重心がどこか傾いているが、それでも物怖じさせない迫力で焰火を睨む励。

「さてっと。これで一対一だぜ……。焰火九十九！」

御坂の能力により、建物周辺の通路の瓦礫は取り除かれた。

しかし、救援は来ない。

正確には警備員アンチスキルは駆けつけたのだが、消火用の施設や設備の場所と通信できない。

通信の方法を変えて何度も行つたが、通じない。

このままでは、建物の内側に居るはずの励や犯人を救出できない可能性が高い。

装備の充実した警備員アンチスキルが乗り込めば何とかかなりそうだが、建物の入り口付近が特に炎の勢いが強く、建物が崩れやすくなっているため強行突破は出来ない。

そんな中、訓練され、あらゆる事件に関わってきた警備員アンチスキルは一人考える。

この規模は、どれだけ策を練ろうが、学生一人に出来るものではない。

しかし、通信を遮断しているのが犯人でもないならば、一体どこの誰が通信を遮断しているのだろうか？



声に出さない問いに、答える者はいない。

炎の燃え盛る音だけが、問いと関係なく鳴き続ける。

対して、建物の中。

赤く燃え上がっている炎の海とは対照的に、エメラルドグリーンの魔法陣が浮かび上がる。

次の瞬間、炎を巻き込んだ烈風が建物の中を吹き荒れた。

「ちツ!？」

舌打ちしながら背中を壁に打ち付ける焰火は、先ほどよりも体中に傷が出来ていた。

対して烈風を放った励のほうも体中傷だらけで、今までの戦闘の激しさを表していた。

背中を壁に打ち付けた焰火だが、幸いその壁には火がついていなかったらしく、背中を打ち付けるだけで済んだらしい。

焰火がそのまま倒れることはなく、壁から前のめりに踏み出す形でいきなり両腕を振るい業火を放った。

励はそれを右腕を前に出し魔法陣で防ぎつつ、前に一歩一歩踏み出す。

体を補強する魔術と他の魔術の組み合わせを使用してかなりの時間が経過していた。

建物もいつ崩壊してもおかしくない状況だ。

これ以上、時間をかけるわけにはいかない。

（いつきに接近戦に持ち込む！）

炎を蹴散らし、足に力を入れる。

対して焰火も右手に炎を浮かばせ、構える。

（近づいてくる間に攻撃を叩き込む！）

ダツ！！と励の地面を蹴る音が聞こえた。

焰火は炎を放ち、正面から向かえ撃つが、

励はそれを右手を前に突き出し魔法陣で防ぎながら足を進める。

（甘い！）

と同時に焰火は右手で業火を放ちつつ、励の真上の天井に向かって左手で炎を放った。

先ほど放たれた業火のために、視界が狭くなっている励には反応できなかつた。

励の真上に放たれた炎は、屋根の部分を燃やしつくし、火をまとった屋根の破片

つまりは火の雨が、励の頭上から降り注ぐ。

「ッ！！？」

ほんのコンマ数秒遅れて励は自分に降り注ぐ火の雨に気が付く。

しかし、範囲は広く、魔法陣をもう一つ展開しても避けられそうにない。

前は業火、上は火の雨、後ろ火の海。

「クソッ！！？」

いちかばちか励は業火を防いでいる魔法陣を解除すると同時に真横に飛んだ。

だが、そんなことで火の雨を完全に避けきることは出来ない。

二、三粒火の雨が彼の肩や左腕に直撃し、肉をえぐる。

ブジュツ、と聞いたこともない音が聞こえた。

「ガッ！！？あああああああああああああああああああああああ  
っッ！！！！！！！」

刺さった痛みの直後にくる、焼けたような痛みに、襲われた励は

激痛に耐え切れず地面を転がった。

体の痛覚全てが麻痺しかけていた励は、追撃の炎に気が付くことで我に返り、地面を転がるようにしてかわす。

ポアツ！と炎が彼のいた場所を焼き尽くす。

「ツ！ぐっ……おおおおおおおおおおおおおおお  
おおおおッ！！！！！！」

体をすぐに起こし、再び地面を蹴る。

しかし焰火も容赦はしない。屋根や柱などの建物の一部を攻撃に利用する。

「おおおおおおおおおおおおおおおおおッ！  
」

次々にくる攻撃を、あえて防がずに避けながら駆け抜ける。

もちろん、全てをよけきれはらずはなく、攻撃は彼の体に確実に当たっている。

だが、彼は歩みを止めない。

ただ前に、ただ前に足を進める。

「いい加減にくたばれ！僕は僕の正義を貫く！」

焰火は両腕を動かし、励の周囲の炎を竜巻状にして励に襲い掛から

せる。

「何が正義だ！クソツたれ！！」

逃げ場のない攻撃に励は魔法陣を展開し、烈風を放ち自分の前方だけ炎を吹き飛ばし道を作った。

そこに体を捻じ込み、ただ拳を作って走る。

「一々人を助けるのに、そんな義理みたいな理由があるのかよ？  
違う！『俺がそうしたいから』でいいだろ！！だから俺は正義の  
味方なんかじゃねえ！！」

「理想だけの偽善者が！ふざけるなよ！！それだから誰も救えない  
んだ！！」

励と焰火の距離はかなり縮まった。

励は魔術による体の補強をさらに強化し、拳に力を込め、焰火の顔面を見据える。

正義感、などという上等なものを持ち合わせている自覚はない。

ただ人を助けたい、その考えさえあれば、彼は風紀委員ジャジメントではなくても動く。

にらみ合うのは、歪んだ正義と自分勝手な理想。

だが、その自分勝手が、本人にとっての自分勝手ではないならば、

それは自分勝手だろうか？

第三者が見れば、どう思うだろうか？

「俺は俺の味方でいい！！正義なんて理由で人を傷つけるんじゃないねえ！！」

「黙れ！英雄気取りが！調子に乗るなああああああ！！」

焰火が右手を前に突き出して放った業火を、励は間一髪かわす。

このままではやられる。

そう思った焰火は懐に左手を突っ込み、拳銃を取り出した。

銃口が励に向けられる。

焰火に、迷いはない。

だが、励は拳銃に気づいてなお、足を進めた。

さらに速く、力強く、前に踏み出す。

「おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお  
おおおおおおおッ！！」

お互いの咆哮とともに銃声が聞こえた。

パンツ！！と乾いた音だけが周囲に響き渡る。

しかし励は倒れなかった。

赤黒い色が左肩辺りから浮き上がるようにしてあふれかえる。

それでも怯まない励に、焰火は恐怖すら感じた。

確実に左肩を撃ち抜いた。しかし、かれはとまらない。

（な、何なんだ！！？）

驚く焰火の顔面に、励の魔術で強化した渾身の拳が叩き込まれた。

ドゴオツ！！と鈍い音が響いた後に、ゴトリ、と人の体が倒れるような音だけが聞こえた。

励も殴り飛ばした勢いと体の限界を超えたせいか、前のめりに焰火と一緒に倒れこむ。

その倒れた場所に炎がなかったただけでも奇跡だった。

彼は仰向けになりながら、ピクリとも動かない焰火の様子を確認するといつも通りのやる気のない目に戻る。

いつもの調子に戻った彼はゆくり起き上がると燃え盛る建物に目をやり、だるそうに頭をかく。

「ったく・・・正義だの何だの・・・面倒だ・・・」





## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6856r/>

---

とある少年の特殊な魔術

2011年10月8日09時44分発行